

ネギノ遺跡

大分県竹田市菅生所在遺跡の調査

大分県文化財調査報告

第 35 輯

1 9 7 6

大分県教育委員会

序 文

ネギノ遺跡の所在する竹田地方は、県下でも豊かな自然環境に恵まれ、岡城跡をはじめ多くの史跡や遺跡が集中するところとして知られています。

なかでも阿蘇山の東部一帯に広がる高原には、セツ森古墳群など著名な遺跡が数多く点在しています。こうしたなかでネギノ遺跡は縄文時代の埋葬の問題をなげかけた遺跡として研究者の知るところでありました。

このような高原地帯にも、農業開発の一環として大型の農道が新設されることになり、大分県教育委員会では予定地の発掘調査を実施しました。発掘調査の結果、縄文時代から弥生時代におよぶ集落の一部が明らかになり、予期以上の成果をおさめることができました。ただ農道予定地については、記録保存という消極的な保存措置にとどまったことは止むをえない処置とはいえ、文化財保存のうえからは遺憾なことであります。このうえは、本書が将来の文化財保護ならびに学術研究に十分活用されることを祈念する次第です。

最後に2カ年にわたり調査を担当していただいた、別府大学文学部賀川光夫教授、橘昌信助教授ならびに地元において種々便宜を計っていただいた大塚主氏および佐藤利昭氏をはじめ、調査協力していただいた各位に対し深く謝意を表します。

昭和51年3月

大分県教育委員会教育長

山 本 峯 生

目 次

第1章 序 説	1
I 調査の経過	1
第2章 遺跡の調査	7
I 遺跡の立地と環境	7
II 基本層序	8
III 遺構と遺物	9
(1) 1号住居跡	9
(2) 2号住居跡	12
(3) 3号住居跡	13
(4) 4号住居跡	15
(5) 5号住居跡	17
(6) 溝状遺構	20
(7) ピット群	24
(8) 土 器	27
(9) 石 器	37
(10) 遺物の分布	51
(11) 1号住居跡出土の桃の核果	52
第3章 考 察	53
I 調査の成果と問題点	53
第4章 附 説	57
I ネギノ遺跡の住居跡について	57
II 縄文晩期甕棺葬の問題	58

図 版 目 次

図版 1	遺 跡	
図版 2	層 位	
図版 3	豎 穴 住 居 跡 (1)	
図版 4	豎 穴 住 居 跡 (2)	
図版 5	豎 穴 住 居 跡 (3)	
図版 6	豎 穴 住 居 跡 (4)	
図版 7	豎 穴 住 居 跡 (5)	
図版 8	ピ ッ ト 群	
図版 9	溝 状 遺 構	
図版10	遺 物 (1)	
図版11	遺 物 (2)	
図版12	遺 物 (3)	
図版13	遺 物 (4)	
図版14	遺 物 (5)	
図版15	遺 物 (6)	
図版16	遺 物 (7)	
図版17	遺 物 (8)	

挿 図 目 次

第1図	ネギノ遺跡と周辺の主要遺跡	3
第2図	調査グリッド配置図	5
第3図	遺跡周辺の地形図	7
第4図	ネギノ遺跡土層柱状模式図（第Ⅰ～Ⅶ調査区）	8
第5図	第Ⅵ・Ⅶ調査区平面図（住居跡群）	9
第6図	1号住居跡実測図	10
第7図	1号住居跡出土土器実測図(1)	11
第8図	1号住居跡出土土器実測図(2)	11
第9図	2号住居跡実測図	12
第10図	2号住居跡出土土器実測図	12
第11図	3号住居跡実測図	13
第12図	3号住居跡出土土器実測図(1)	14
第13図	3号住居跡出土土器実測図(2)	15
第14図	4号住居跡実測図	16
第15図	4号住居跡出土土器実測図(1)	17
第16図	4号住居跡出土土器実測図(2)	17
第17図	5号住居跡実測図	18
第18図	5号住居跡出土土器実測図	19
第19図	1号・4号住居跡出土石器実測図	19
第20図	第Ⅱ調査区（溝状遺構）平面図	21
第21図	溝状遺構実測図（E・F・G－1・2グリッド）	22

第22図	溝状遺構実測図（E・F・G—20グリッド）	23
第23図	溝状遺構実測図（E・F—22グリッド）	23
第24図	溝状遺構実測図（C・D—40グリッド）	23
第25図	第Ⅰ調査区（ピット群）平面図	24
第26図	ピット群実測図（C—31グリッド）	24
第27図	ピット群実測図（C・D—40グリッド）	25
第28図	ピット群実測図（C・D—46グリッド）	25
第29図	第Ⅰ区出土土器実測図(1)	27
第30図	第Ⅰ区出土土器実測図(2)	28
第31図	第Ⅰ区出土土器実測図(3)	29
第32図	第Ⅰ区出土土器実測図(4)	30
第33図	第Ⅰ区出土土器実測図(5)	31
第34図	第Ⅰ区出土土器実測図(6)	32
第35図	第Ⅴ・Ⅵ区出土土器実測図	34
第36図	表面採集土器実測図	36
第37図	各区出土石器実測図(1)	38
第38図	各区出土石器実測図(2)	40
第39図	表面採集石器実測図(1)	41
第40表	表面採集石器実測図(2)	42
第41図	表面採集石器実測図(3)	43
第42図	昭和29年出土合口甕棺実測図	60

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和48年度と昭和49年度に実施した大分県竹田市所在のネギノ遺跡の発掘調査報告である。

1. 当遺跡にかかる調査は、竹田市菅生地区における県営の広域営農団地農道整備事業に伴う事前調査として実施した。

1. 本書の執筆は調査担当者および調査補助員が分担した。各章節の分担は次のとおりである。

第1章 I 富永直樹

第2章 I・II 若月省吾

III (1) 後藤伸子 (2) 盛峰雄 (3) 若月省吾 (4) 高野伸子
(5) 下村悟史 (6) a 盛、b 下村、c 若月 (7) 森田孝志
(8) a・b 盛、c 森田 (9) 富永 (10) 田森 (11) 盛

第3章 I 橘昌信

第4章 I・II 賀川光夫

1. 遺跡の実測図作成は調査員および調査補助員があたり、その整図および遺物の実測、製図は執筆担当者が行なった。

1. 図版写真は橘昌信が担当した。

1. 本書の編集は橘昌信がたった。

第1章 序 説

I 調査の経過

ネギノ遺跡は竹田市大字菅生字今に所在し、県営広域営農団地農道整備事業の工事予定地として昭和48・49年の二度にわたり緊急発掘調査を行なったものである。

発掘調査は大分県教育委員会が主体となり、調査は別府大学文学部考古学研究室が主として担当したものである。

なお、遺跡名は昭和19年カメラ発見の折、遺跡の東側宮園部落に鎮座する^{ネギノ}祢野神社から採ったもので、正確な地名を表わすものではない。しかし「ネギノ」の名が長年使われてきたものであるからあえて所在地名に依らないで慣例にならうことにした。

調査期間と調査団の構成

第1次 昭和48年11月17日～11月24日

第2次 昭和49年7月27日～8月10日

調査員	賀川光夫（別府大学文学部教授）	第1、2次
	橘昌信（別府大学文学部助教授）	第1、2次
	清水宗昭（大分県教育庁文化課）	第2次
	橘爪啓史（　　　　　）	第2次

調査補助員 小池史哲(現福岡県文化課)、森永弘太、永松みゆき、龍弘助、下村悟史、若月省吾、園尾裕、竹内弘、富永直樹、中川秀昭、西哲弘、町田利幸、森田孝志、盛峰雄、吉武淳、後藤伸子、高野信子、多田久美子(以上別府大学文学部生)

調査参加者 鳥養孝好（竹田高校教諭）
竹田高校民俗クラブ生徒

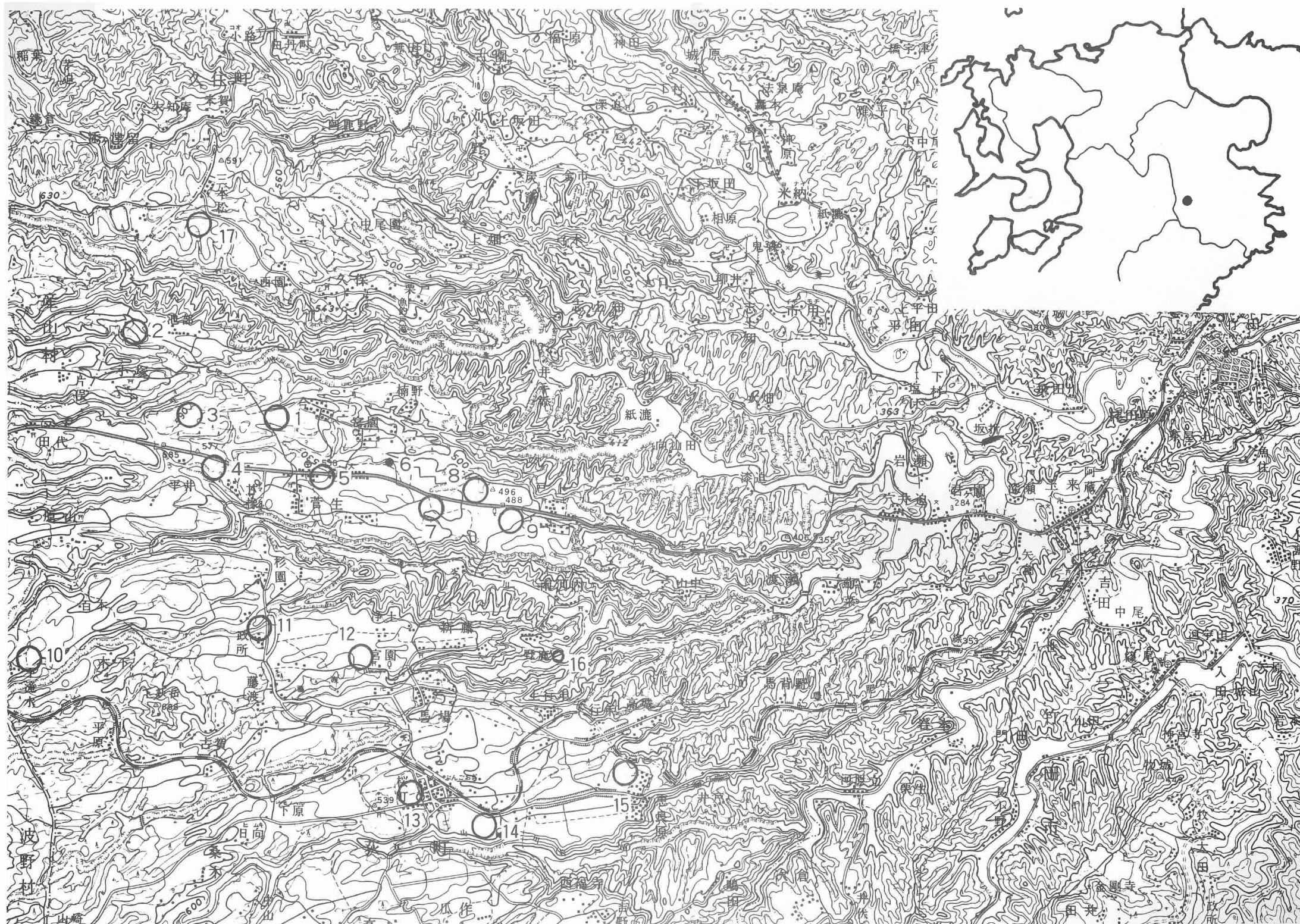
調査区の設定

今回の調査地は、農道拡幅工事に伴う事前の基礎調査のため、最初から範囲は限定されておりグリッド設定に当っては、農道工事のセンター杭を利用した。東西は、640mにわたる広範囲なために第3図のように、東側より第Ⅲ区、第Ⅰ区、第Ⅱ区、第Ⅳ区、第Ⅴ区、第Ⅵ区、第Ⅶ区とほぼ100m単位で7区分し（但し第Ⅲ区60m、第Ⅶ区40m）、さらにその区ごとに2mを単位としてグリッドを設定した。グリッドは、各区とも東側より1、2、3、……50と算用数字を使用して、南北は北側よりA、B、……Gまで設け、たとえばⅠ区A—Iグリッドと呼んで2×2（1単位）のグリッドとした。（第2図）

以上の事項を基本として、一次調査では今部落に接した台地東側のⅠ区からⅢ区を主体として調査

を実施した。各区とも、遺跡の範囲と層序の確認を目的として農道工事のセンターラインぞいに 2×2 のグリッドを $20m$ 間隔に設定し、調査の進行にしたがって、随時拡張してゆく方法をとった。その結果、第Ⅰ区では、晩期の包含層とピット群を確認し、第Ⅱ区では、溝状遺構を確認した。第Ⅲ区では東側へ行くにしたがって表土層が厚く、それに反して包含層の堆積は薄く、一番東側のグリッドにおいては包含層の堆積はみられなかった。

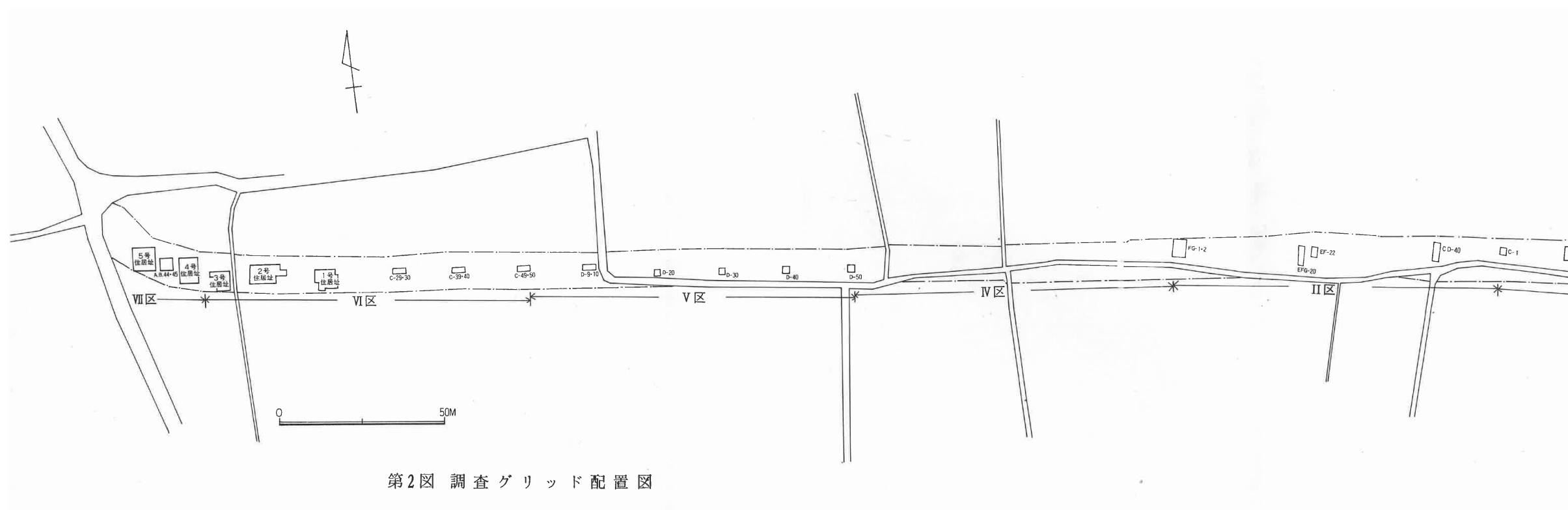
2次調査では、Ⅳ区からⅦ区を主体として1次調査と同じく $2 \times 2m$ ないし $2 \times 4m$ のグリッドをセンターラインぞいに $20m$ 間隔に設定し、調査を実施した。しかし、Ⅶ区、Ⅵ区西側においては、住居跡が密集して存在している可能性がでてきたため、グリッドの設定を $10m$ 間隔に $2 \times 4m$ を設定していった。遺構を確認した地点は、できるだけ広範囲に拡張していきかけたのであるが、調査範囲が限定されていたためにやむなきにいたった。

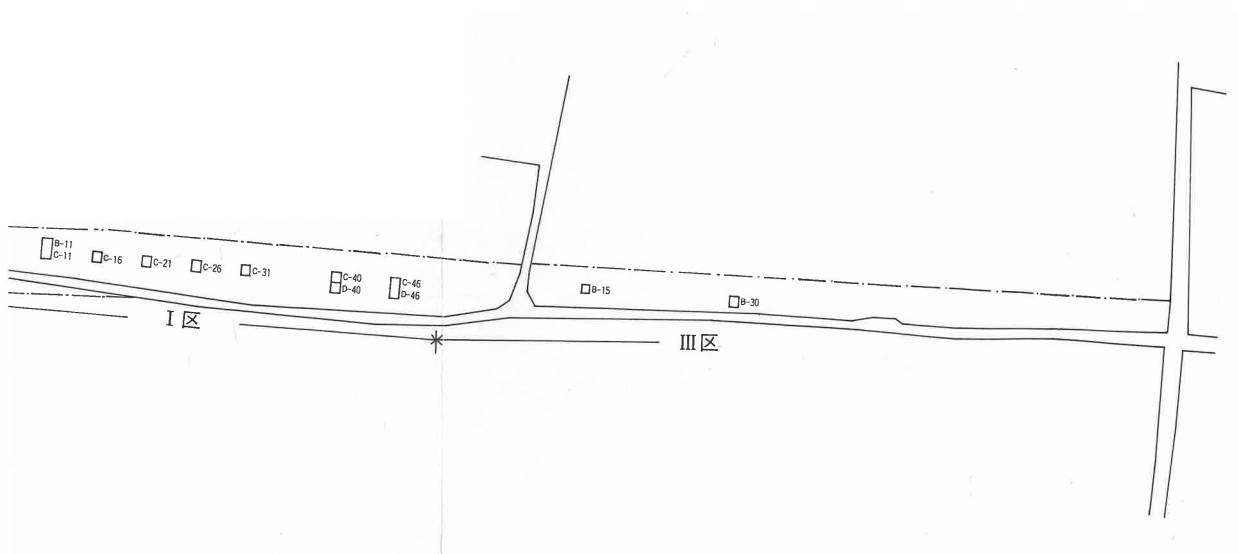


第1図 ネギノ遺跡と周辺の主要遺跡
(国土地理院5万分の1「竹田」分載)

- | | | |
|------------|-----------|-----------|
| 1. ネギノ遺跡 | 6. 蜘蛛塚古墳 | 11. 政所西遺跡 |
| 2. ヤトコロ遺跡 | 7. 田頭遺跡 | 12. 宮園遺跡 |
| 3. 開拓14号遺跡 | 8. 桑木遺跡 | 13. 桜山遺跡 |
| 4. 平井遺跡 | 9. 大塚遺跡 | 14. 横迫遺跡 |
| 5. 菅生中学校遺跡 | 10. 下滴水遺跡 | 15. 恵良原遺跡 |

1: 50,000
1000m 500 0 1000 2000 3000 4000





第2章 遺跡の調査

I 遺跡の立地と環境

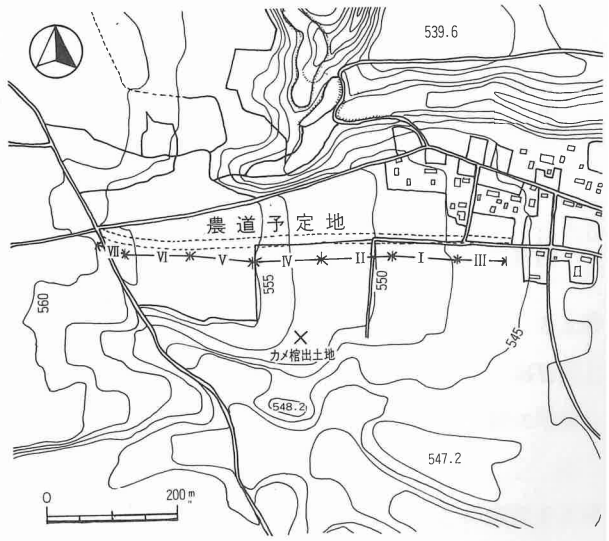
大分県南部に九州屈指の流域面積を有す大野川は阿蘇外輪山、九重連山、祖母傾山系に源を発し、広大な外輪山の山麓を東西に長い台地に分離している。これらの台地は標高850～450mの間に緩傾斜面をなし、大分県側では特に平坦性を強くする。ネギノ遺跡が立地する菅生台地も玉来川と滝水川の深い侵蝕谷に囲まれた、東西5.5km、南北2km、標高平均550mの平坦面をなし、この一帯では、南側の荻台地とともに先史時代遺跡が濃密に分布する地域である。

これらの台地は近年まで水利に恵まれず、台地上は一部を除いては、陸稻、トモロコシ、ソバの穀物類が主体をなす県下有数の畑作地帯として利用されている。

菅生台地の中では、ネギノ遺跡の西側に縄文晩期の集落跡と推定される開拓14号遺跡、南側の浅い谷をへだてて、平井・菅生中学校・田頭遺跡と弥生時代中～後期の遺跡が東西に並んでいる。縄文早期から弥生時代にわたる遺物を出土した桑木遺跡はネギノ遺跡より約2km東に所在し、古墳時前期の前方後円墳を有するセツ森古墳群は菅生台地東端近くに造営されている。また菅生台地の周辺には縄文早期の標式的な遺跡であるヤトコロ遺跡、最近の予備調査によって濃密な弥生時代の集落が確認された内河野遺跡が北西部にあり、南部の荻台地に政所西・宮園・下滝水遺跡等の弥生時代集落および桜山・恵良原・横迫遺跡等の縄文晩期の遺跡がネギノ遺跡を囲むように位置している。またこれらの台地を刻む谷筋の凝灰岩崖面には、野鹿・竜宮等の洞穴遺跡が残されており、考古・人類学の両面の研究に重要な資料を提供している。

ネギノ遺跡は菅生台地中部北辺寄りの今部落の西側に開ける東西700m、南北200～300mの東にやや開く、標高545～560mの扇形の緩傾地に立地する。昭和29年大塚主氏等によって注意された、縄文晩期の合口カメ棺はこの台地の中央南辺寄りの位置より出土しており、一帯に晩期カメ棺群の存在を推定させた。

調査区分はこのカメ棺出土地より150m北側の部分を東西に12m幅で長さ670mにわたる狭長な範囲とし、遺跡を含む台地の中央部を縦断するような調査となった。



第3図 遺跡周辺の地形図（調査区と縄文晩期カメ棺出土地点×）

II 基本層序

調査が広範囲にわたったため、各地区によって土壌の堆積が一樣でなく、複雑な様相を呈する。しかし、調査区が台地の中央部付近を、ほぼ縦断するような形で設定されたことによって、当ネギノ台地の基本的な土壌堆積が概括できたものと考えられる。以下基本的な層序を述べることにする。

基本層序（第4図）

第Ⅰ層 表土層。茶褐色を呈し、パサパサとした感じの砂質の土壌。台地上のほぼ全面を覆っているものと考えられる。平均30cmの厚さ。

第Ⅱ層 色調は黒色を呈し、Ⅰ層と同質のパサパサとした土壌である。台地上に部分的に検出された土層である。この層には、赤褐色のスコリア状の粒子を若干含んでいる。上層との境界は、プライマリーな堆積を示し5～30cm程の厚さがある。

第Ⅲ層 スコリア状粒子を多量に含む。土壌は弱い粘性を帯び色調は暗黄褐色を呈し、30～60cmの堆積がある。

第Ⅳ層 Ⅲ層とほぼ同質の状態を示すが、色調は明るみを増す。スコリア状粒子の混入も少なくなるが、上層との境界は明確でない。平均50cm位の堆積をみる。

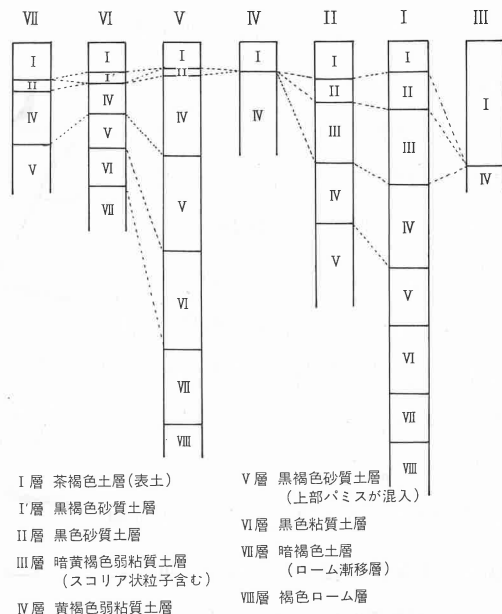
第Ⅴ層 地区によっては、上部面に黄色パミスの堆積がみられる。土壌の質はさらさらしており締まり具合は比較的やわらかい。色調は黒褐色を呈する。また、スコリア状粒子も稀に混入しており30～50cm程度の堆積をみる。

第Ⅵ層 水分を多量に含んでいる粘質のある土壌構成を示す。色調は、上層よりも黒色を強く帯び、35～50cm程の堆積をみる。

Ⅴ層との境界は、不明瞭である。

第Ⅶ層 ローム漸移層。35～40cmの堆積を示し、色調は暗褐色を呈す。

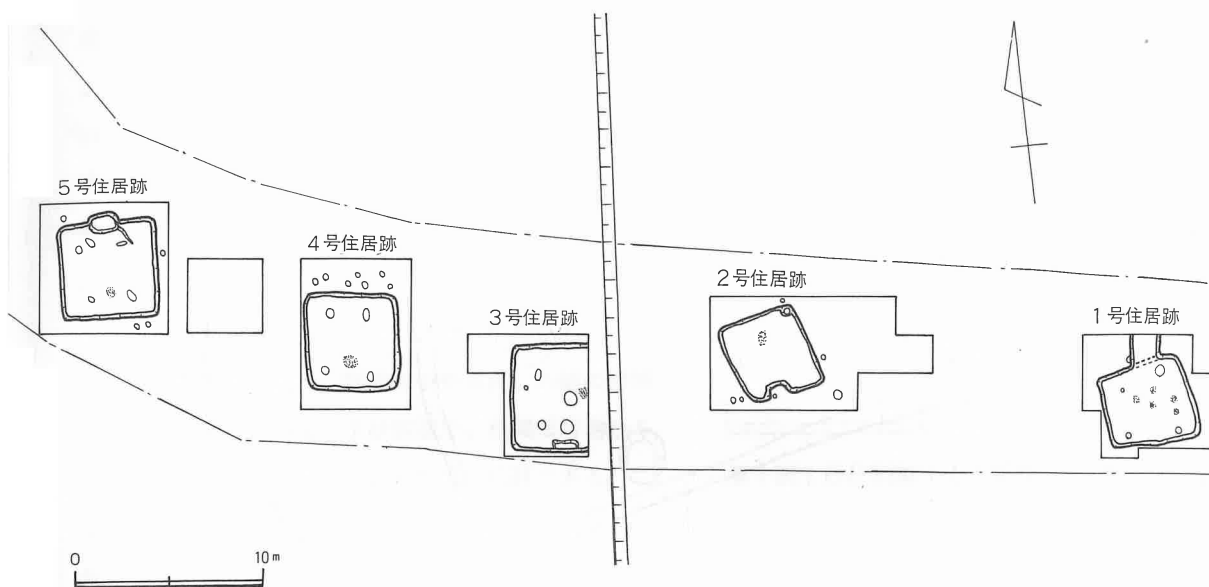
第Ⅷ層 褐色ローム。



第4図 ネギノ遺跡土層柱状模式図（第Ⅰ～Ⅶ調査区）

Ⅲ 遺構と遺物

台地の西側にあたる第Ⅵ・Ⅶ区において、東西方向一列に竪穴住居跡を5基検出することができた。住居跡は方形をなし、6～15mの間隔で切合うことなく長さ60mの範囲におさまる。時期は住居跡内出土の土器から弥生時代終末期に比定されるもので、付近に相当数の住居跡が存在することは確実とみられる。



第5図 第Ⅵ・Ⅶ調査区平面図（住居跡群）

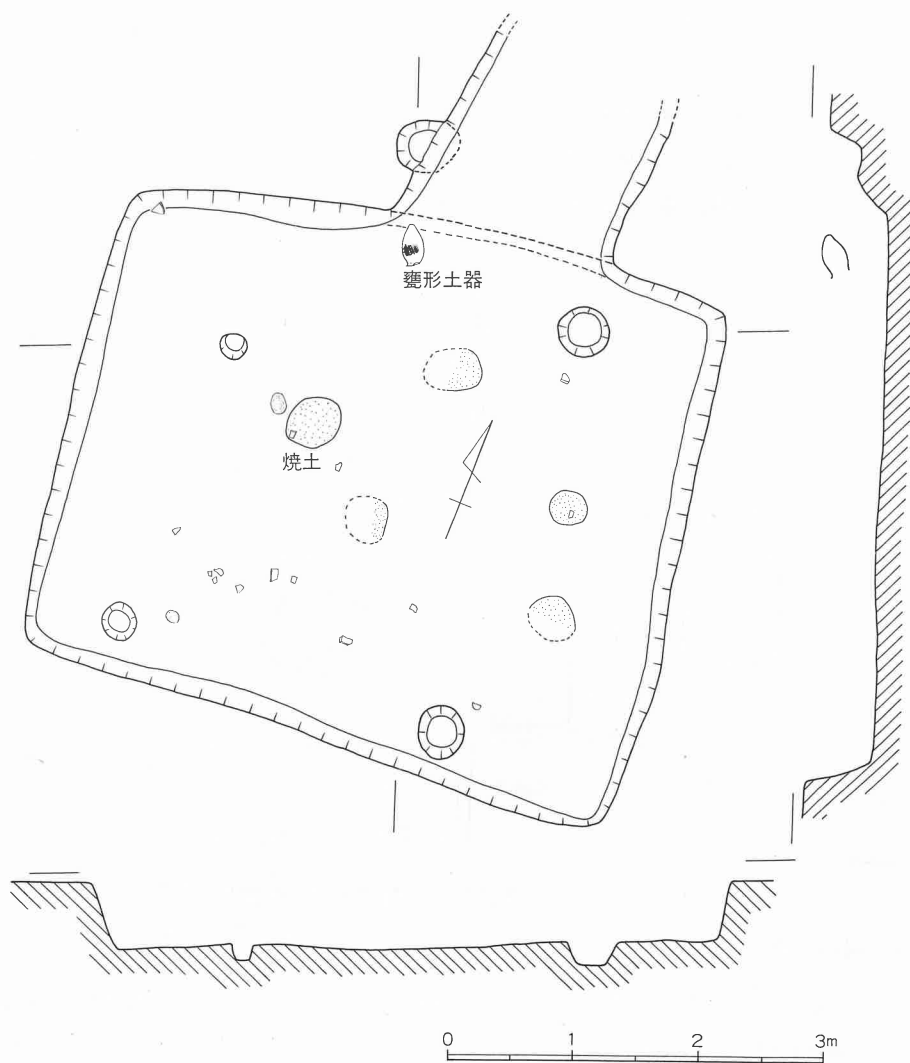
(1) 1号住居跡

5基の住居跡のうち最も東に位置し、主軸をN-89°-Wの方位にとる。5.0m×4.0mの隅丸方形をなす。住居跡はⅣ層黄褐色土上面から掘り込んでおり、深さは60cmであるが上部削平のため、現状よりいくらか深くなるとみられる。床面はⅤ層まで達する。柱穴は住居跡内の四隅近くに4ヶ所、北側に1ヶ所認められる。

住居跡北側は性格の不明な遺構により切られている。その遺構内からは小破片の土器数点が出土している。住居跡の床面には焼土が5ヶ所認められるがいずれも薄い堆積である。

遺構埋土は、明瞭なレンズ状の堆積を呈しており、この住居が放棄されて以後、数次にわたる土砂の流れ込みを知ることができる。第Ⅴ層と第Ⅶ層は不整合に堆積しており、起伏が著しい。第Ⅶ層上面には、第Ⅵと同質と思われる黄褐色土層がブロック状に混入しているのが見られた。複雑に堆積したことを物語っている。

第Ⅲ層の黒色土層は、二次使用の際の生活面と思われるが、遺物、層序から面的にこの床面を正確にとらえることはできなかったが、二次使用の際に残された炉跡（1ヶ所）が認められた。この焼土は厚く（5～10cm）焼土中から炭化した桃の核果4個が出土した。



第6図 1号住居跡実測図

住居跡内の遺物出土状況は、埋土内では、第Ⅴ層が最も多く、第Ⅲ、Ⅶ層がこれに続く。第Ⅳ層、Ⅶ層からの遺物出土量は比較的少ない。住居跡の遺物は、弥生終末期安国寺式に比定される土器で、他に数点の縄文晩期土器片2点が出土している。概して小破片が多い。このうち住居跡の南西部床面から櫛目波状文を有する壺形土器の口縁部がまとまって出土しており、住居跡の時期を決定する資料となる。住居跡南西部床面から磨石と敲石に使用された石器1点（第19図4）と、中央よりやや西側から敲石1点（第19図3）が出土している。

遺物（第7図、第8図）

第7図(1)は甕形土器で、口径16cm、高さ29.5cmを計る。口縁部はゆるく外反し、頸部はややくびれる。胴部は砲弾形を呈し、底部は尖底に近い平底をなす。色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。外壁には刷毛目が残ри、さらに外壁上半は煤が厚く付着している。

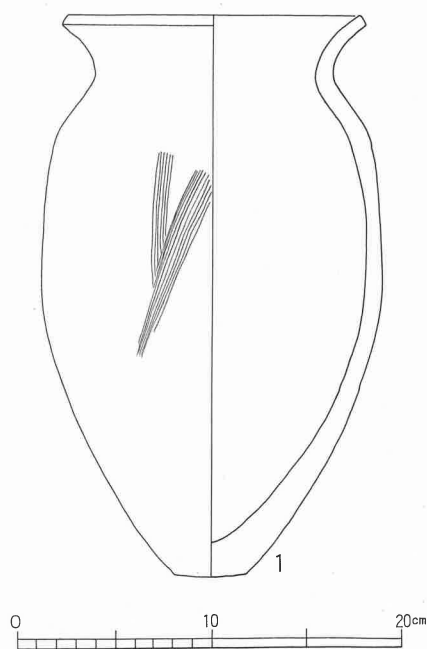
第8図1は第7図同様の器形を呈す甕形土器の口縁部で、色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。外壁に煤が付着している。

第8図2・3・5～8は壺形土器である。2、8は内傾しながら反転する口縁部に櫛描波状文を施こしている。色調は赤褐色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好。8の外壁はヘラ磨きされている。3は頸部から口縁へ移行する部分で、色調は黄褐色を呈し、胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好で内外壁に刷毛目が残っている。5は肩部で色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、外壁はヘラ磨きがなされ、その上に櫛描波状文を施こしている。6は肩部から頸部へ移行する部分で色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良。外壁に櫛描波状文を施こしている。7は胴部で、色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。

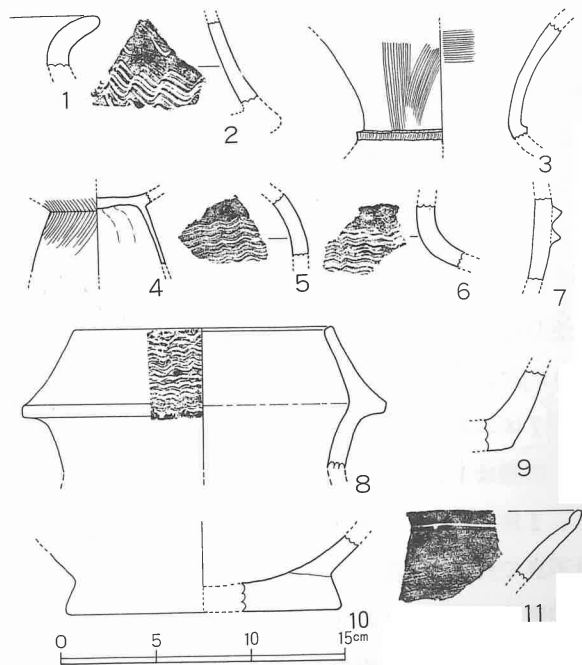
4は高台つきの碗形土器で、色調は淡黄色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好。薄手の手づくね土器で、内壁に指圧痕が残っている。9は底部で、色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良。内壁に煤が付着している。

本住居跡からは他に10、11の縄文晩期の土器が出土している。10は深鉢形土器の底部で、色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。11は浅鉢形土器の口縁部で、色調は黒褐色（一部暗褐色）を呈し、胎土は微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成は良好。器壁は条痕がわずかに残るが、きわめてよく研磨されている。

本住居跡の遺物は、10、11を除きすべて弥生終末期安国寺式に比定される。



第7図 1号住居跡出土土器実測図(1)



第8図 1号住居跡出土土器実測図(2)

本住居跡の出土土器のうち8は床面から出土した土器で「く」の字に屈折する二重口縁に櫛描波状文を施こしている典型的な安国寺式の壺形土器である。第7図(1)はこの住居跡が二次使用された際の土器で、この土器も安国寺式土器の中に入るものである。したがって本住居の時期は弥生終末期に比定されるものである。

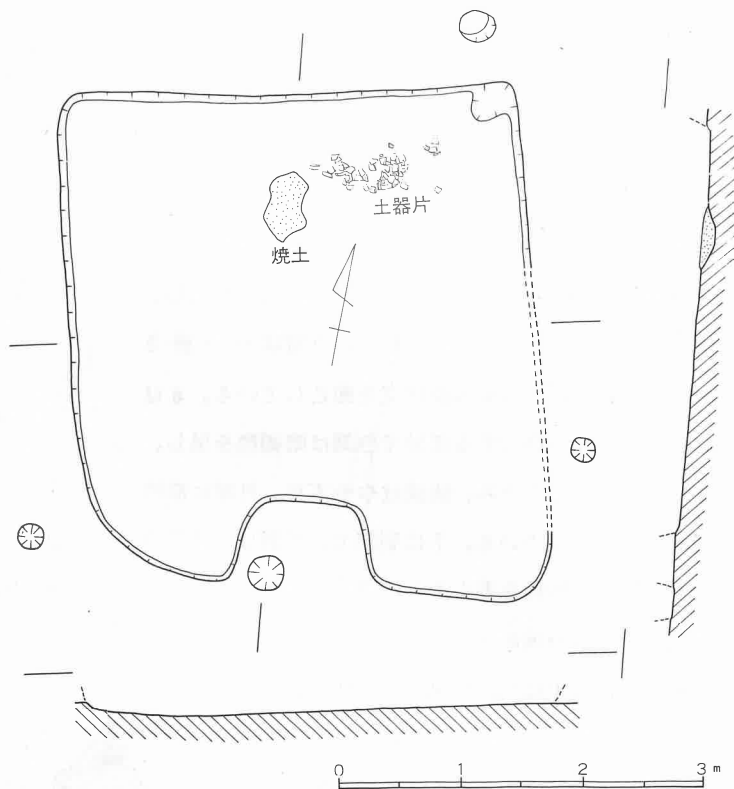
(2) 2号住居跡

2号住居跡は、主軸をN—20°—Wにとり、1号住居跡の西方15mに位置する。形状は不定方形で、4.1m×3.8mを測るが、上面削平により壁高は5cm程度しか残存していない。床面は若干東方へ傾斜しており、貼り床である。中央北壁よりに炉跡(焼土)を検出し、これに接近して、まとまった状態で安国寺式に比定される土器2個体分が出土した。プラン外側で、深さ約8cmの1例を除き、2~3cm程度の深さのピット5個検出したが、プラン内からはピットの検出はできなかった。

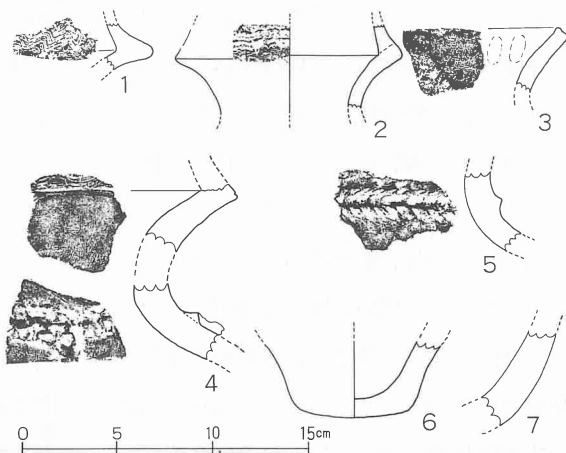
遺物(第10図)

出土した人工遺物は少なく、埋土および床面より、次のような土器片が出土した。

1、2は二重口縁壺形土器の口縁屈曲部であり、色調は1、2共に黄褐色を呈し、胎土は1、2共に砂粒を含む、焼成は1は良好、2は不良で外壁が剥落している。共に口縁部に櫛描波状文を有する。3は口縁部が外反し、頸部がしまり、胴部がややふくらむとみられる甕形土器の口縁部である。色調は暗褐色を



第9図 2号住居跡実測図



第10図 2号住居跡出土器実測図

呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、外壁には煤が付着し、内壁には整形時の指圧痕が認められる。4は二重口縁を有す壺形土器の口縁部と肩部であり、色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。口縁部には櫛描波状文を有し、肩部には「つまみ貼りつけ状突帯」をもち、貼付文がうく。5は壺形土器の肩部であり、色調は黄褐色を呈し、胎土には、砂粒を含み焼成は良好であり、指によるつまみ出し突帯をもつ。

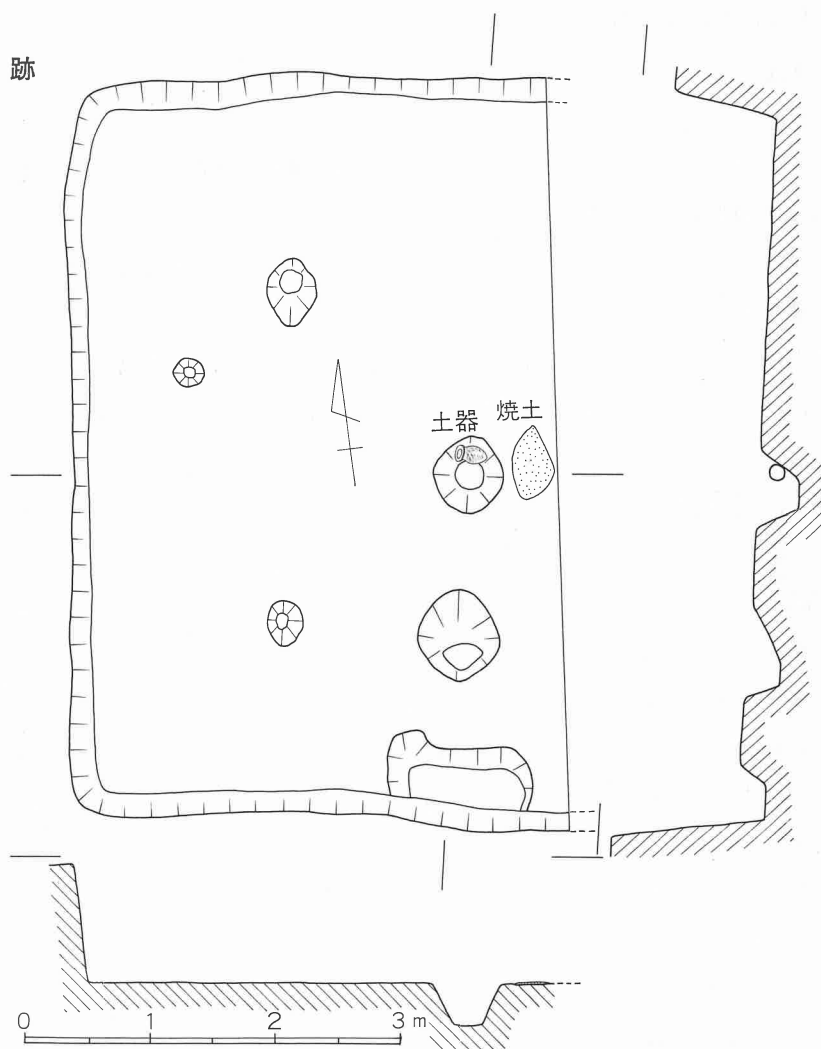
6、7は、胴部卵形状なすとみられる甕形土器の底部および底部付近である。色調は6、7共に黄褐色を呈し、胎土には、共に砂粒を含み、焼成は共に良好である。7は外壁に煤が付着している。

住居跡南壁中央の張り出し部は、床面の工築時より意図的に若干高くした出入口の踏台的性格を持つものと考えられる。尚プラン内からピットが検出されなかった事により上部構築の点に問題を残したが、プラン外の柱穴と考えられるピットの存在と共に類似形態の遺構検出をまって再考すべきであるとする。

(3) 3号住居跡

2号住居跡の約5m西に位置する。形状は、1、2号住居跡と同じく方形を呈する。南北6mを測るが、東西は東側が現地表の耕作面を形成する際に、約80cm余りのカットを受けているため明らかにすることができない。

遺構は、第Ⅳ層の褐色土層上面より切り込まれ、Ⅴ層面へと達している。床面はⅣ層面へ褐色土を一面に敷きつめた、いわゆる貼り床状を呈している。3号住居跡ではⅣ層への切り込みを、ほぼ上面



第11図 3号住居跡実測図

で捉えられたものと考えられ、壁の高さは最高で1.2mを測り、低い所でも0.8mを下らない。

遺構内では、6ヶ所のピット及び1ヶ所の焼土を検出した。その内、中央焼土近くのピット内から完形土器1個体(第12図2)を検出した。

遺物(第12、第13図)

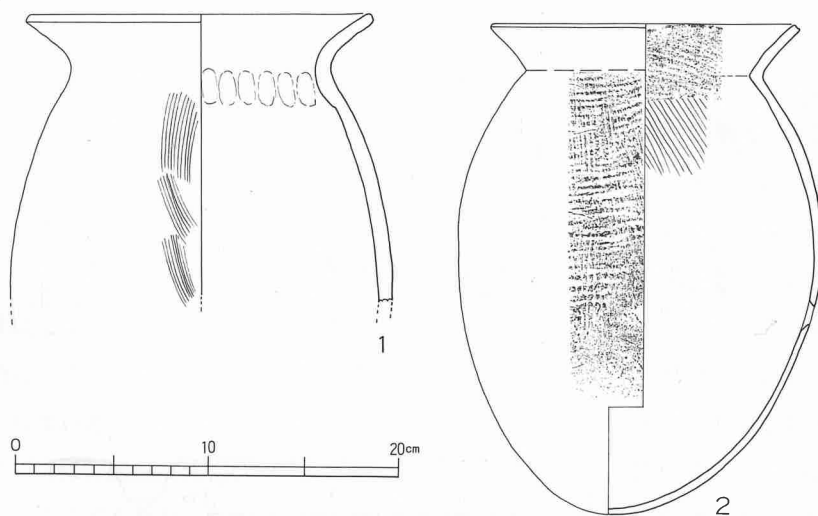
遺物は、埋土中より縄文晩期の土器片や弥生、土師器片などが出土した。しかしながらほとんどが、後世の流れ込みと考えられ、出土状態は様でない。3号住居跡に伴う遺物は、ピット内出土土器(第12図2)と第12図1の土器片のみである。

(第12図、1・2)は壺形土器である。1は口縁部がかなり外反し、頸部でわずかに内面が肥厚する。胴部は、丸みを帯びてふくらむ。褐色を呈し外面に刷毛整形を施している。頸部の内側に整形時に付着したと思われる指の圧痕が、わずかであるが認められる。器壁の内外面に多量の炭化物が付着している。口径18.5cm。

2は比較的薄手で口縁部外反、口縁部内側と表面をたたき調整し、その後刷毛目整形を縦方向に施している。内面の頸部屈曲部には、刷毛目調整をして仕上げている。壁外面には、胴部上半部一面に多量の炭化物が付着している。胴部には、径1cm程の穿孔がある。黄褐色を呈し胎土、焼成共に良い。口径17.5cm、器高26cmを測る。

(第13図1～5、8)も甕形土器である。1、2、4は刷毛目による整形痕を残している。3は口縁外面に刷毛目を縦方向に施しており、器面内外に炭化物が付着し、色が黒色を呈する薄手の土器片である。2は頸部に2本の細い沈線を有している。色は黒褐色で器壁が厚い。4は、明褐色を呈し、外面に炭化物が付着している。3は、明褐色で内面の整形が悪く、粘土紐を積み上げたあとが残っている。外面には炭化物が付着し、口縁部を比較的薄手に仕上げている。

5は、黄褐色を呈し、器壁が薄く第12図2の土器に類似している。胎土に細砂がわずかではあるが混入している。口径14cmを測る。8は黒色を呈し内面は、使用によるものと思われる器面の磨耗がみられる。口径18cmを測る。



第12図 3号住居跡出土土器実測図(1)

(第13図6、7)は甕形土器である。胴部片で、断面三角形の貼り付け突帯を3本付している。内面は部分的に剝落している。6は黄褐色を呈し、7は赤褐色で胎土に細砂を混入している。

(第13図9～11)底部片で、3片とも外側の面が二次的な加熱によるものと思われる慌れが認められ、10は丸底で炭化物が外面に付着している。10、11隅丸平扁状にて胎土に細砂を混入している。色調は3片とも褐色を呈す。

(第13図12)は縄文晩期の甕形土器の肩部屈曲部分である。屈曲部に外側より粘土紐を貼り付け、その上半截竹管状の工具で瓜形状の刺突を施こして、いわゆる刻目突帯をもつ、胴部外面は、アルカ属の放射脈による貝殻条痕整形である。

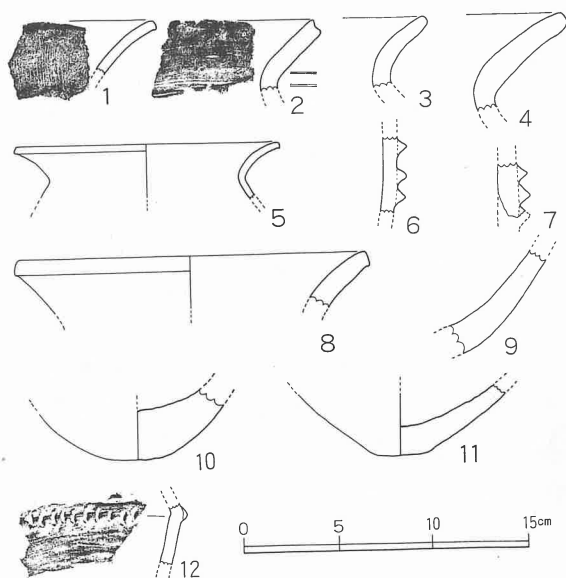
色調は、外面黒色で内面は黄褐色である。

胎土、焼成共に良い。

以上が、当住居跡より出土した土器である。

当住居跡に関する遺物は、第12図1、2の土器であって、他の遺物は埋土より出土したという事は前に述べた通りである。

第12図1の土器は、床面より60cm程度上部から、多量の炭化物を伴って出土している。住居跡の廃絶後に投棄されたものと考えられ、同図2のピット内出土土器や第13図5の床面上出土の土器よりは、若干の時間的な差があると考えられる。



第13図 3号住居跡出土土器実測図(2)

(4) 4号住居跡

3号住居跡の西5mに位置する。主軸をN-5°-Eの方向に取り、プランは、方形を呈し4.5m×4.6mを測る。住居跡は黄褐色土層中より、黒色土層上面まで掘り込まれており、深さは約40cmを測る四壁は共にほぼ垂直に立ちあがり、床面は中央部がやや高くなった貼り床である。住居跡内より柱穴と考えられる4ヶ所のピット及び炉跡(焼土)、さらに住居跡外北側で7ヶ所のピットを検出した。

遺物(第15、16図)

人工遺物として、埋土および、床面より、円盤形土製品、縄文、弥生の各土器片と凹石(第38図9)(第19図1、2)、敲石等が出土した。特に、床面より出土した復元可能な壺形土器は、本住居跡の時期決定に重要な手掛を与えた。第15図の1は、壺形土器で、口縁は、ゆるく外反し、肩部は、あまり張らず、胴部は球形に近く、そのまま平底に近い丸底に移る。色調は、淡黄褐色を呈す。胎土には、砂粒を含み、焼成は良好である。外壁は、刷毛目により調整され肩部には、棒状工具により刺突を施こしたと考えられる5つの列点を有している。第16図1および3は、櫛描波状文を有

する、壺形土器の口縁部で色調は、赤褐色を呈し、胎土には、砂粒を含み、焼成は良好である。3の外壁には、丹が塗ってある。

第16図2は、甕形土器の口縁で色調は、淡褐色を呈し胎土には、砂粒を多く含み、焼成は良好である。

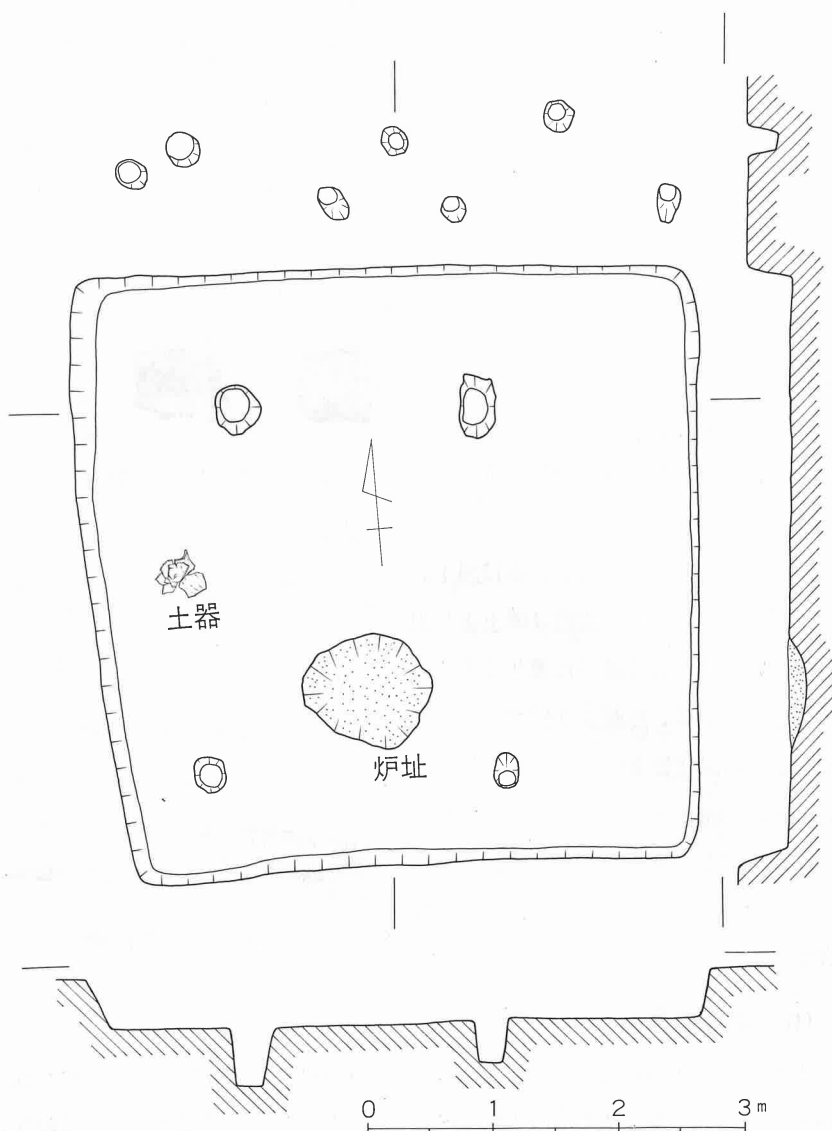
第16図4は、胴部が砲弾形とみられる壺形土器の口縁部で、色調は、黄褐色を呈す。胎土には、砂粒を多く含み、焼成は良好である。

第16図5および6は、壺形土器の胴部とみられ、色調は、暗黄褐色を

呈す。胎土は、微砂粒を含み、焼成は良好で、外壁にはたたきめを有し、煤が付着している。

第16図7は、小形の鉢土器で、色調は、暗褐色を呈し胎土には、砂粒を多く含む。焼成は良好で、外壁にはたたきめを有し、煤が厚く付着している。

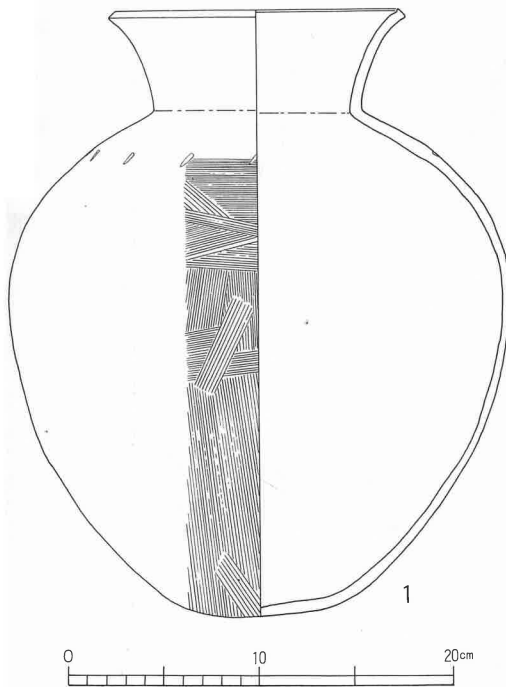
第16図8は、壺形土器の胴部で、色調は、暗褐色を呈し、胎土には、砂粒を多く含み、焼成は、良好で外壁にはたたきめを有している。第16図10、11は、弥生式土器片を利用し、まわりを打欠いて整形した円盤状土製品である。色調は、10が黄褐色、12が赤褐色を呈している。胎土には共に砂粒を含み、焼成は共に良好であり10の内面には刷毛調整痕を有する。この他住居跡埋土内より出土したもの



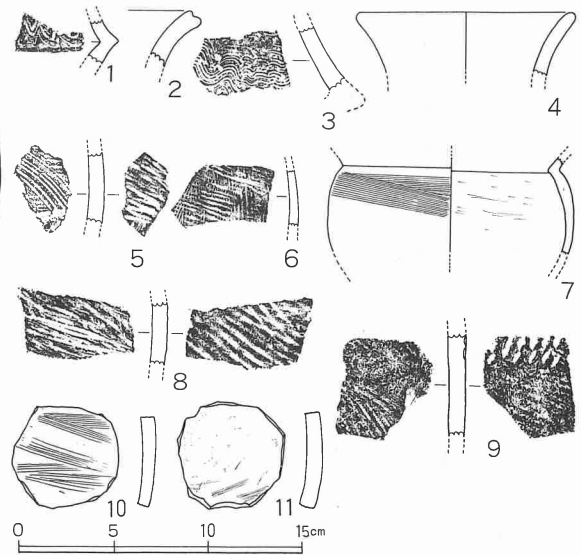
第14図 4号住居跡実測図

に第16図 9 がある。色調は内外壁共に黒褐色を呈し、胎土には、角閃石、石英粒を多量に含み、焼成はやや不良である。内外壁共に、アルカ属の二枚貝により、器面調整を行なっていて、外壁には刺突文を施文している。貝殻による器面調整を行ない、その後刺突文を施文する文様構成から、縄文前期に比定されるものと考えられる。

本住居跡の時期は、床面より出土した壺形土器により、弥生時代終末期と考えられる。



第15図 4号住居跡出土土器実測図

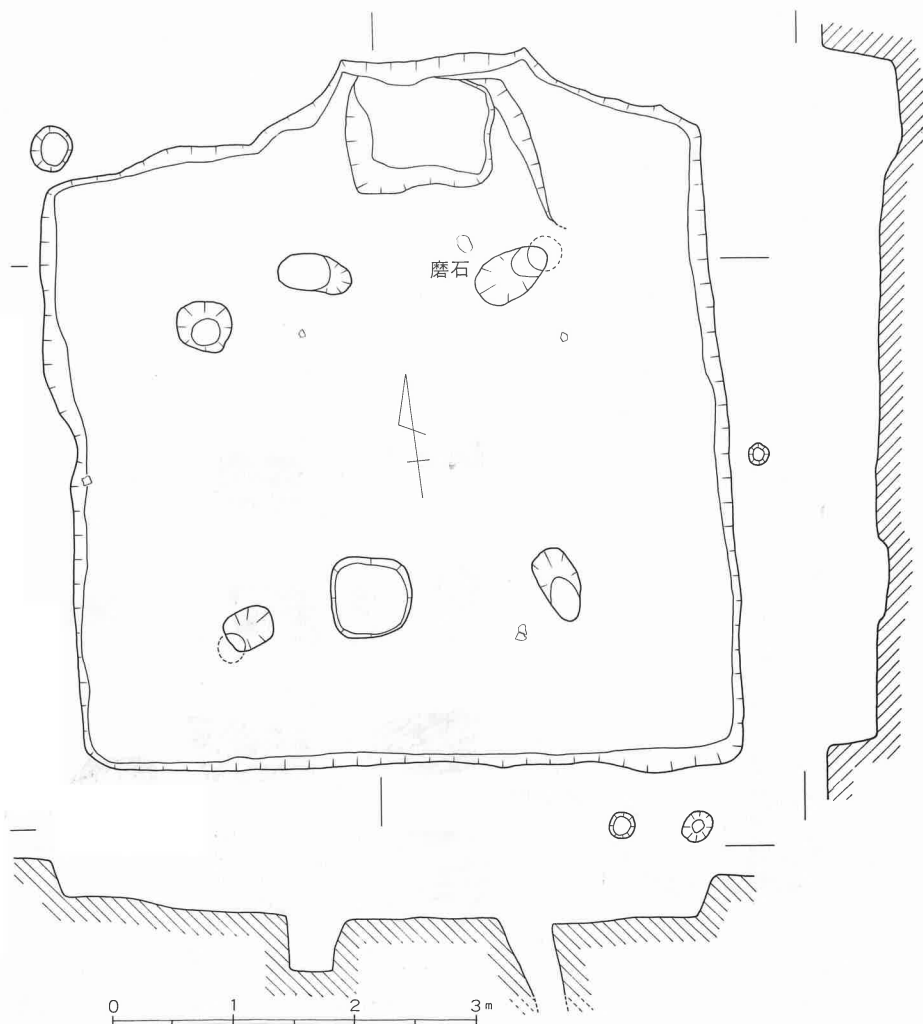


第16図 4号住居跡出土土器実測図

(5) 5号住居跡

調査区の最西端に位置するこの住居跡は、方形のプランを呈し、北側に突出部を設けたもので、長軸をN-7°-Eにとり、長径5.8m、短径5.5m、深さ40cmを測る。住居跡中央部南側寄りに炉跡（焼土）と4本の柱穴、北側に方形竪穴と西側にもう一個のピットが確認された。柱穴と考えられる4本のピットは皆内傾していた。床面は炉跡のまわりと北側の土壌のまわりは、貼り床にされ堅くたたきめられており、その他も堅くふみかためられた状態であった。北側の竪穴に関しては、出土遺物をみなかったが、前面の貼床及び形状、位置などから住居に伴う貯蔵穴の可能性が強い。また、この住居跡は第Ⅳ層の黒色土層に掘り込まれ、プラン内には第Ⅲ層の土壌がレンズ状に堆積していた。

住居跡の南東隅では他の床面よりも少し高くなった部分があり、第Ⅲ層の土壌の流入がはげしく入口の可能性はある。なお、住居跡のまわりに接して4コの柱穴が検出された。



第17図 5号住居跡実測図

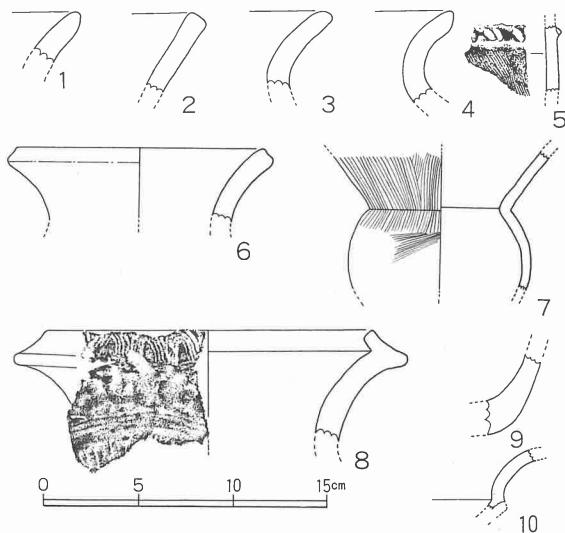
遺物(第18図)

土器は、特に注目するものはないが、口縁部に櫛歯で波状文が描かれ、頸部にも横および縦の櫛描き文様が認められる口縁部片(8)と、外面及び口縁部の内面に丹彩した小形壺(7)がある。前者は口縁部が外反し上部で屈曲して強く内傾する安国寺式系統の土器で内面はあらい条痕で調整されており、後者は外面を荒い刷毛目で調整しており内面にへうけずりはみられない。その他に、外反する口縁部で厚手無文の土器片及び刻目凸帯に刷毛目を施した胴部、ならびに丸平底の底部片(9)がある。口縁部は、外反の度合いが強いもの(4)とややその度合いがゆるいもの(1~3、6)とがあり、口唇部が平たくなったものや(2)、やや凹んだもの(6)も認められる。なお、同土器片は赤褐色を呈し、刻目凸帯のある胴部を除いては内外面に炭化物の付着が著しい。

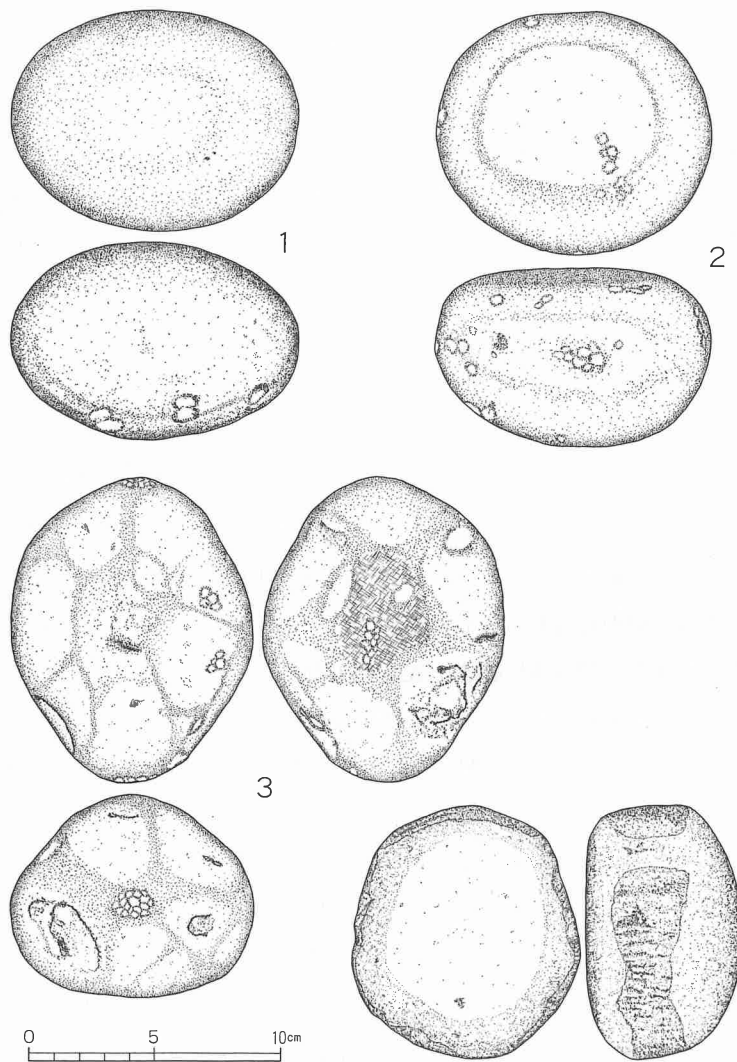
(10)は縄文晩期Ⅱ式の浅鉢形土器である色調は淡褐色を呈し胎土は精選され焼成も良く、よく研磨されている。

石器は、敲石（第38図8）、
石鏃（第37図11）、2次加工剥
片（第37図17）と、床面から磨
石がそれぞれ1点ずつ出土し
た。

この住居跡の営なまれた時期
は決定的な遺物がないため明確
に決定しがたいがプラン及び出
土遺物などから他の住居跡と同
一時期（弥生終末期）とみて大
差はない。



第18図
5号住居跡出土土器実測図



第19図
1号・4号住居跡出土石器実測図
(1・2は4号住居跡 3・4は1号住居跡)

第1表 竪穴住居跡一覧

	形 状	規 模 cm	主 軸	柱 穴	焼土の数	備 考
1号 住居跡	方 形	500×400×60	N-89°-W	内 外 4 1	5	床面より安国寺式土器口縁(壺)
2号 住居跡	不定方形	417×385×5	N-20'-W	外 5	1	床面より安国寺式土器復元可(壺)
3号 住居跡	方 形	600×(400)×120		内 3	1	土壌内より弥生終末(たたき)完形品(壺)
4号 住居跡	方 形	460×450×40	N-5°-E	内 外 4 7	1	床面より安国寺式土器復元可(壺)
5号 住居跡	方 形	580×550×40	N-7°-E	内 外 5 4	1	

(6) 溝状遺構 (第20図～第24図)

第Ⅱ調査区(第1次・2次調査)において、E・F・G-1、E・F・G-2、E・F・G-20、E・F22、C・D・E-40の各グリッドで溝状遺構を検出することができた。

a) E・F・G-1、E・F・G-2、溝状遺構(第21図)

このグリッドでは北側に溝状遺構が存在し溝幅50～80cm、深さは掘り込み面より30cmを測り、断面は「U」字形をなしている。溝底は比較的狭くいくらかの起伏をもつ。A-A'の断面図で土層を観察してみると、第Ⅰ層耕作土層、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層黄褐色土層となっており、遺構は第Ⅲ層の黄褐色土層を基盤として形成されている。なおこの遺構内からの出土遺物はまったく認められなかった。

溝状遺構のほかに、グリッド中央部に平面三角形、断面皿状の土壌が1基検出された。径約25cm、深さ30cmのピット1個を伴ない、土壌の各辺はそれぞれ145cm、115cm、142cmを測る。土層堆積状況は溝状遺構と同様で黄褐色土を基盤として形成されていた。このグリッドでは黄褐色土層上面が全体にわたって東南方向にゆるやかな傾斜を示している。土壌からの遺物は埋土下部より打製石庖丁型石器片と思われるものが1点出土した。

b) E・F・G-20、E・F-22の溝状遺構(第22・23図)

第1次発掘調査の際にF・G-20グリッド北側に黒色土層の落込みが確認されたので、第2次調査においてその性格を調べるためE-20グリッドを拡張した。その結果、ゆるやかなたち上がりの溝状遺構を検出することができた。

この溝状遺構の断面は浅い「W」字状を呈し、基本層位の第Ⅳ層黄褐色土層がその基盤をなしている。溝幅約2.2～2.7mでゆるやかな落ち込みとなり、中央部はやや高くなって事実上2本の溝に分かれている。

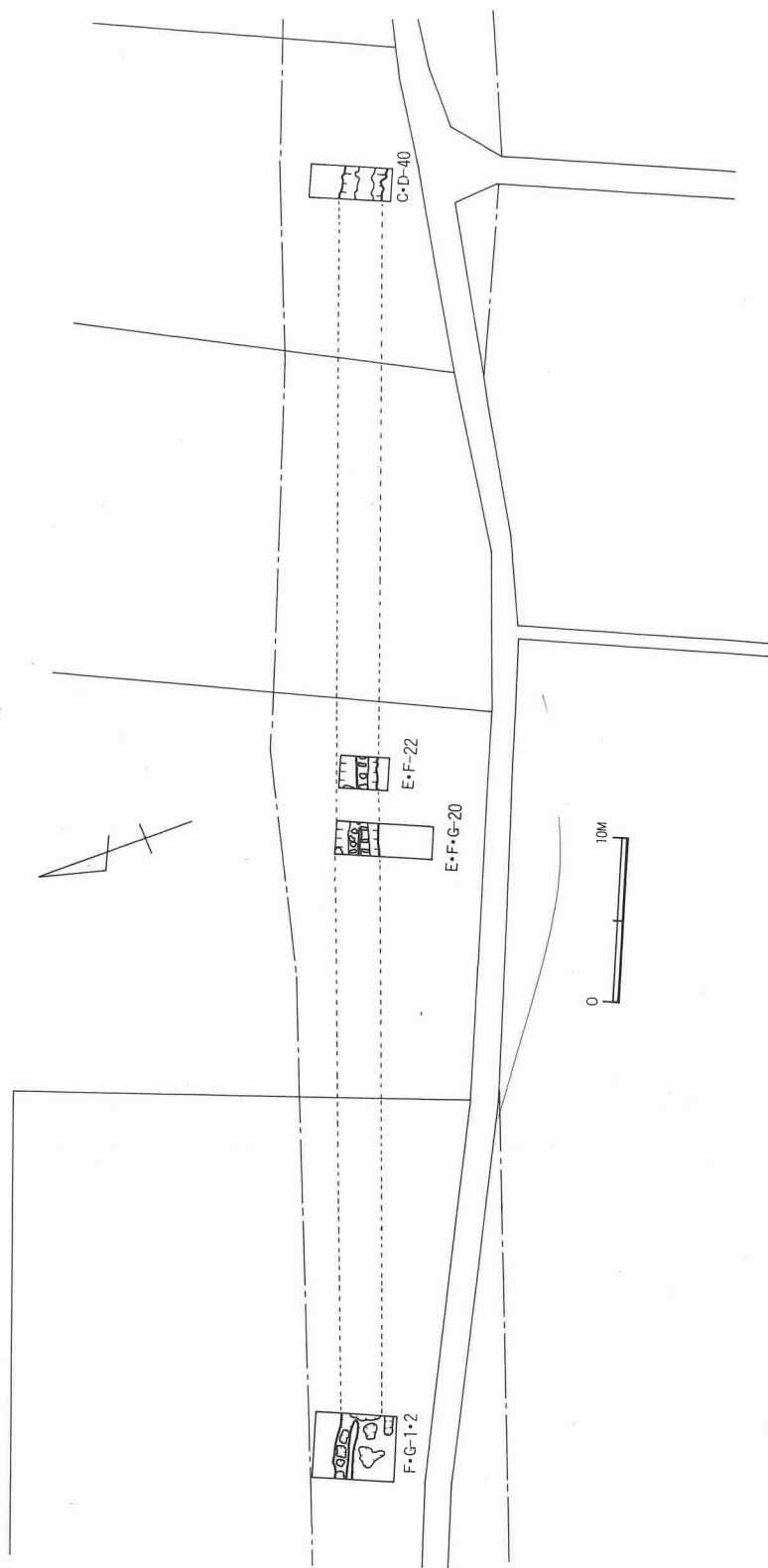
土層堆積状況は、第Ⅰ層が耕作土層で茶褐色を示し、土師器や磁器片が混入していた。第Ⅱ層は黒褐色を呈し黄褐色土層のこまかな粒子を含み、スコリアも一部認められた。第Ⅲ層および第

Ⅳ層は共に黒色土層である第Ⅳ層の方がやや明るくやわらかい。

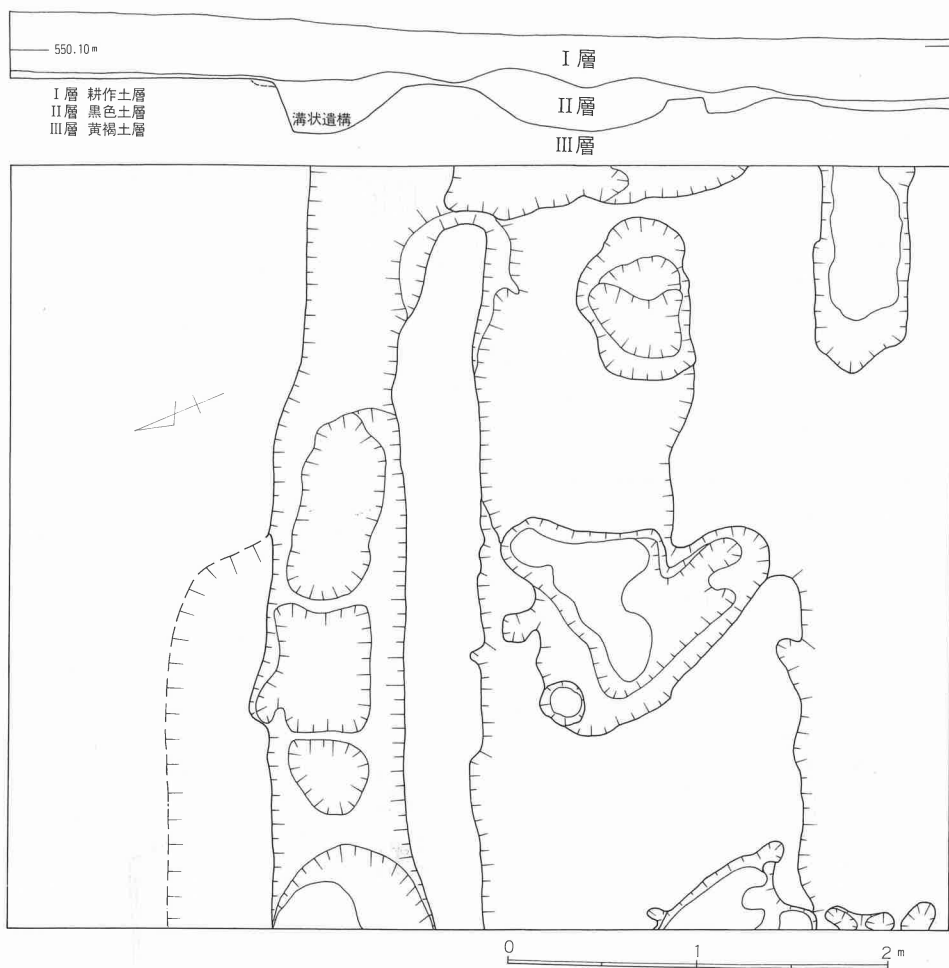
第Ⅴ層は明黒褐色を呈スコリアを多量に含む。第Ⅵ層は、暗黒褐色で黄褐色土層の大きなブロックが混入している。土質はやわらかい。第Ⅶ層は上面がザラザラとした砂質層で有機質土（木ノ葉の腐

蝕したもの）の薄層を数枚レンズ状に含む。土質は非常に堅く小破片の土器片が確認できた。

この層は溝状遺構の性格を考える上で重要であると思われる。



第20図 第Ⅱ調査区（溝状遺構）平面図

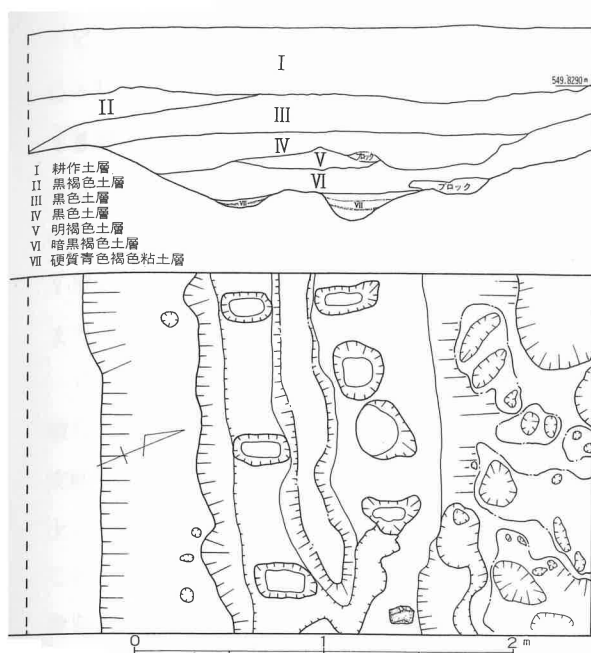


第21図 溝状遺構実測図 (EFG 1・2 グリッド)

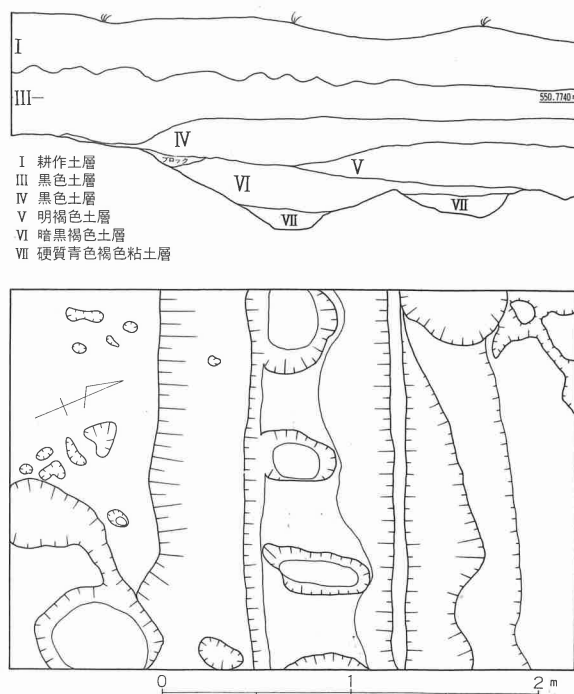
次に溝状遺構の状態を観察してみると、溝はほぼ東西に走行し東側にやや下向傾斜を示している。掘り込み面の傾斜部には多数のピットや凹凸があり、これらピット群の中には、大きく縦にはいりそれから横に数本枝分かれるようなものもあり、あたかも木の根が作用して形成されたかのようなのである。2本に分かれた溝底には、ほぼ70cm間隔で深さ5~10cmの凹みを有し、特に南側の溝底がより顕著にあらわれている。E・F-22グリッドも同様であり一連のものと思われる。出土遺物はE-20第Ⅲ層から口縁部に貼付凸帯のある土器片が出土している。またE・F-22第Ⅲ層からも扁平打製石斧(第38図2)が1点出土している。

c) C・D・E-20の溝状遺構(第24図)

このグリッドにおける溝状遺構の断面は、逆台形状を呈し、上幅約2.4~2.5m、下幅約1.1~1.3mを測る。溝は標準層の第Ⅳ層上面から落ち込み、溝底が標準層位の第Ⅴ層中に確認された。標準層の第Ⅳ層上面自体このグリッドでは南へ下向傾斜を示しているが、溝底はほぼフラットな状態を示している。



第22図 溝状遺構実測図 (E F G 20グリッド)

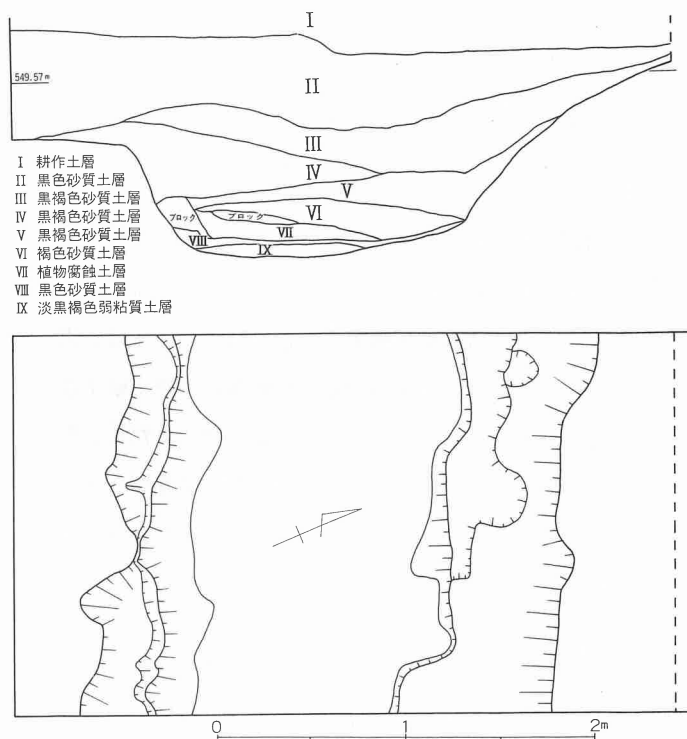


第23図 溝状遺構実測図 (E F 22グリッド)

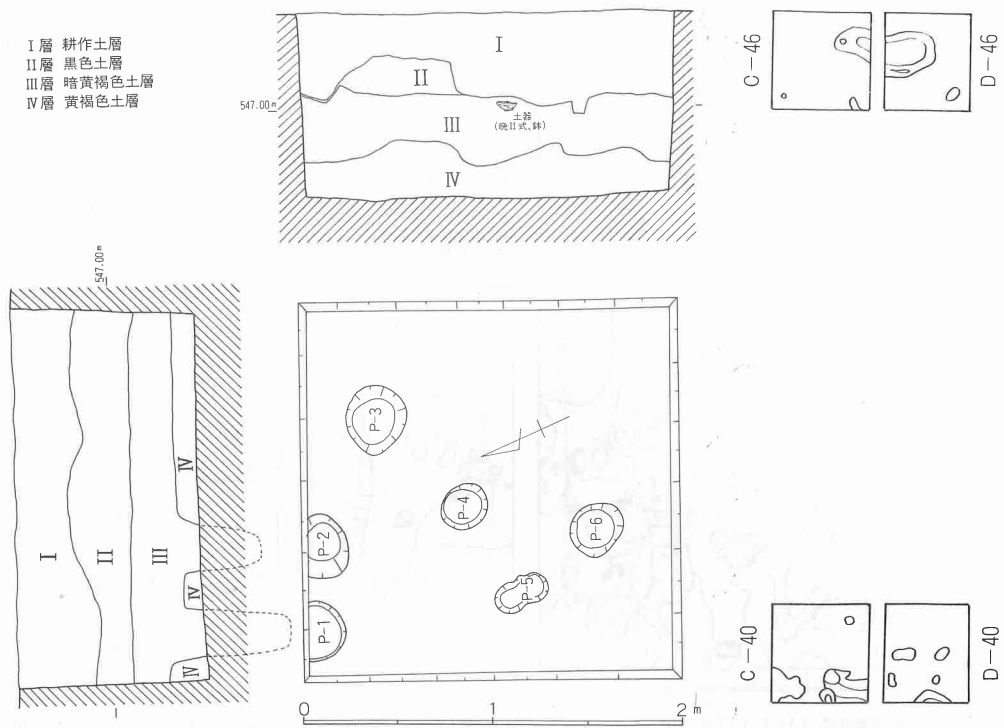
土層は、第Ⅰ層が耕作土、第Ⅱ層は黒色土層となっており、第Ⅲ層は黒褐色を示しソフトな感じの堆積状態を呈している。

第Ⅳ層は溝底を覆うような状態で堆積しており、土壌も固く締まりがある。砂混じりのパサパサした様相を呈する。

第Ⅳ層上面には平均5～10cm程度の厚みで腐蝕した木ノ葉がほぼ粘土化しつつあったがやはり砂混じりであった。第Ⅴ層は、砂質でパサパサして固い。溝底まで残り4層に区分できるが、一般に溝状遺構を埋めている土層の内、第Ⅴ層から第Ⅸ層までは砂混じりで固く締まりのある堆積をしている。溝状遺構の壁面は凹凸



第24図 溝状遺構実測図 (C・D40グリッド)



第26図 ピット群実測図 (C-31グリッド)

が多く、ゆるやかに傾斜して溝底に至る。溝底はかなり踏み固められたような状態を示している。

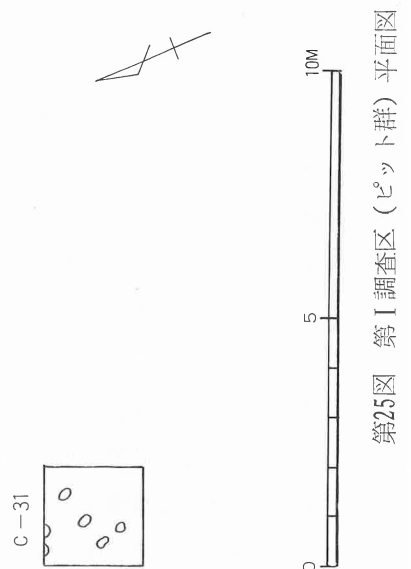
出土遺物は、第Ⅲ層および第Ⅳ層から土器の小片が数点検出されたのみであった。

以上 3 つのグリッドで観察した溝状遺構は、西から東へ緩傾斜した台地中央部を東西に走る連続した遺構とみることが可能である。

一方、この溝状遺構が構築された時期については、出土遺物がきわめて少なくしかも流れ込みの状態で検出されているので明らかにすることはできない。ただし、断面土層の観察から縄文晩期の包含層である第Ⅲ層上面を掘り込んで構築していることからみてこの時期より以前のものではないことは確実である。

(7) ピット群 (第25図～第28図)

1次調査の際、第Ⅰ区の東半 (C-31、C・D40およびC・D-46グリッド) から各グリッド数個ずつのピットが検出



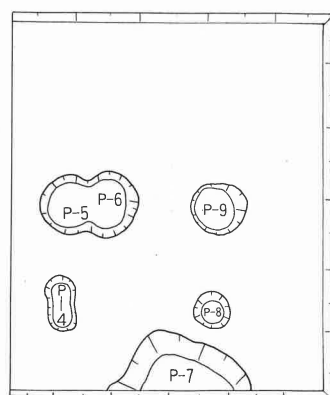
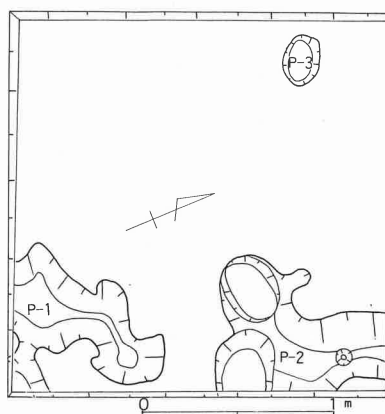
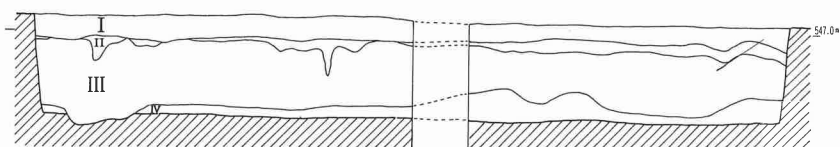
第25図 第Ⅰ調査区 (ピット群) 平面図

された。

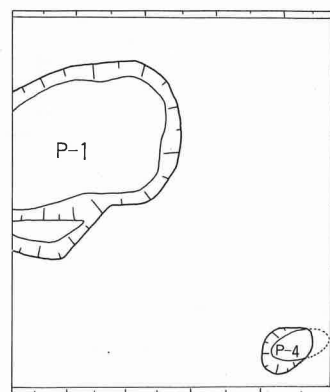
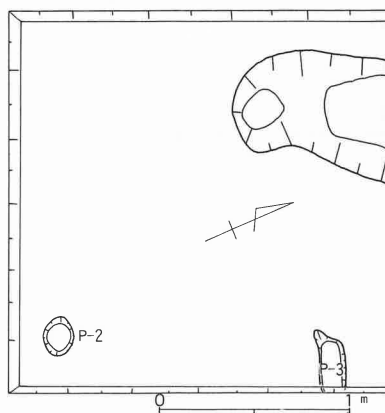
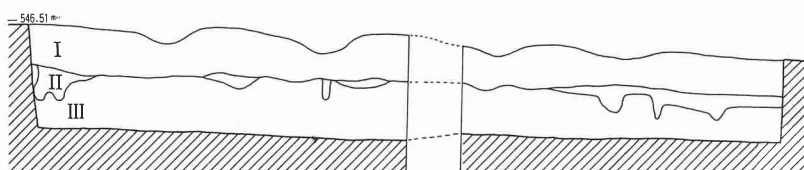
ピットは、円形のプランを呈す深いものと不定形のプランを呈す浅いものが認められた。このうちC-31グリッドのピットは、すべて円形のプランを呈していた。ピットはいずれも晩期の包含層であるⅢ層からⅣ層に掘り込まれており、深いものでは、Ⅳ層とⅤ層間のパミス層にまで達していた。

ピット内からは小破片ではあるが、縄文晩期の土器片が出土していることから、このピット群が縄文晩期のものであることは確実とみられる。しかし、調査区域が狭いためピット群の性格、およびその広がり等は、明らかでない。ネギノ遺跡においてⅠ区、特にこのピット群が存在するⅠ区東半は晩期の包含層であるⅢ層がよく残っており、遺物の出土も比較的多い、さらに表面採集の結果などからみて、Ⅰ区東半に、晩期の遺構の存在する可能性は強い。

各グリッドの出土遺物をみてみると、



第27図 ピット群実測図 (CD-40グリッド)



第28図 ピット群実測図 (CD-46グリッド)

C-31グリットは、I区でも最も多く遺物が出土しており、土器は、縄文晩期Ⅱ式とⅢ式がみられる。C・D-40グリッドは、小破片でしかも数も少ない。C・D-46グリットは、縄文晩期Ⅰ式の深鉢と浅鉢のセット（第29図1、2）の他はすべて小破片である。また、C-31グリットにおいては、東壁のⅢ層上部に鉢形土器が立った状態で出土しており、この出土状況が示すようにⅢ層中でも特に上部に集中して遺物が出土している。

第2表 I 区 の ピ ッ ト 群 一 覧

C-31

注 () 内の値は復元値

番 号	形 状	大 き さ (cm)	深 さ (m)	遺 物	備 考
P-1	円 形	20 × (30)	45	精製土器 5片	
P-2	〃	35 × (30)	35	粗製土器 1片	
P-3	〃	35 × 30	40	ナ シ	
P-4	〃	25	30	〃	
P-5	楕円形	15 × 25	15	〃	
P-6	円 形	28	40	〃	

C・D-40

番 号	形 状	大 き さ (cm)	深 さ (m)	遺 物	備 考
P-1	不定形	—	7～14	ナ シ	
P-2	〃	—	7～10	〃	内に2つのピットが存在する。
P-3	楕円形	20 × 25	15	〃	
P-4	〃	15 × 30	15	〃	
P-5	円 形	30 × (30)	30	〃	P-6と重複
P-6	〃	35 × (30)	25	〃	P-5と重複
P-7	不 明	—	25	〃	
P-8	円 形	20 × 20	15	〃	
P-9	〃	25 × 30	60	黒色研磨土器…1片	

C・D-46

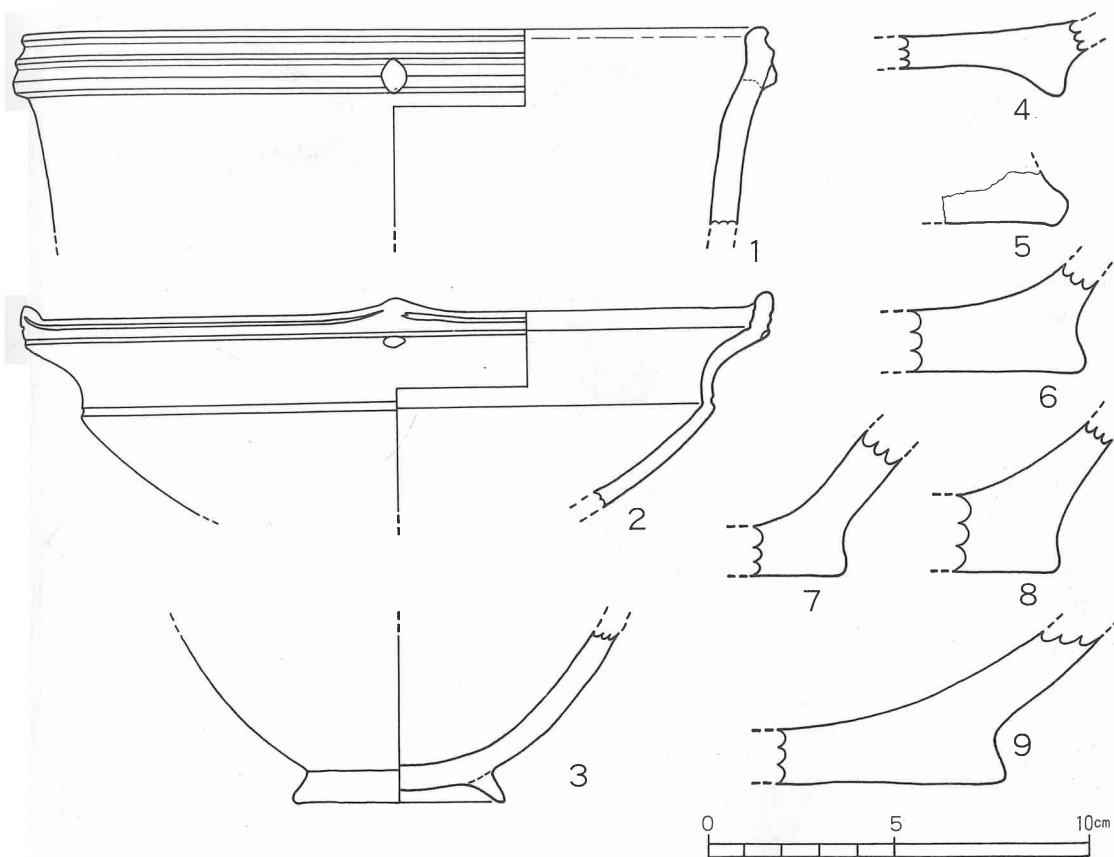
番 号	形 状	大 き さ	深 さ	遺 物	備 考
P-1	不定形	50～70×200	10～20	黒色研磨土器 1片 粗製土器 3片	北側に深さ60cmの円形のピットが存在する。
P-2	楕円形	15 × 20	40	ナ シ	
P-3	不定形	—	10	〃	
P-4	楕円形	20 × 30	40	〃	北に傾斜

(8) 土 器

a) 第1次調査出土の土器 (第I区)

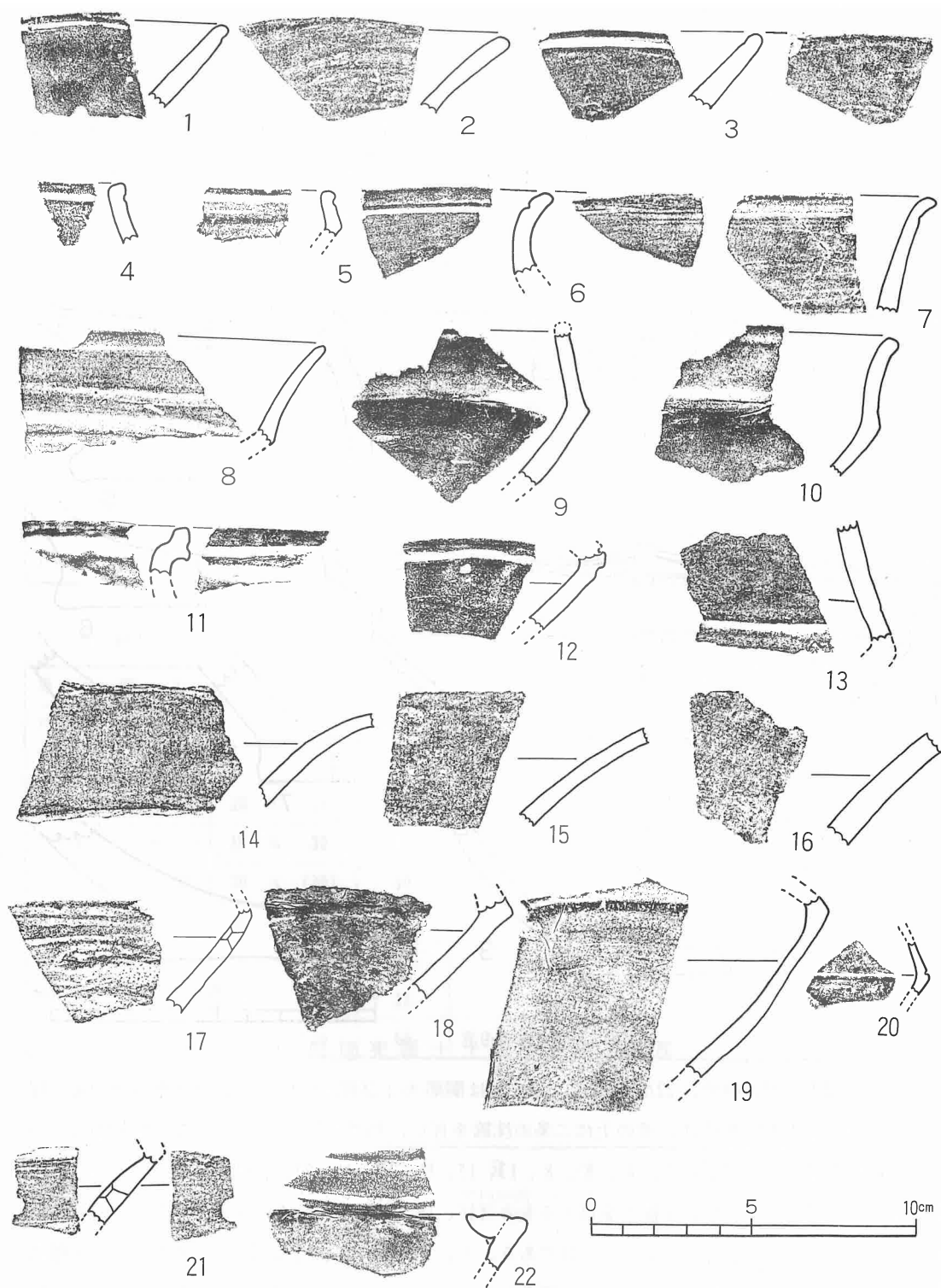
浅鉢形土器 (第29図2、第30図1~22、第31図1~16)

第29図2は口縁部で復元口径約20cmを計り、口縁部の山形波状部を中心として篦状工具による二条の沈線及び楕円凹文を有し、胴部は「く」字形に屈折し屈折部に一条の沈線をめぐらす。色調は内外共に暗灰色を呈し、胎土は微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成はきわめて良好で、器壁は内外共によく研磨されている。晩期I式に比定される。



第29図 第I区出土土器実測図(1)

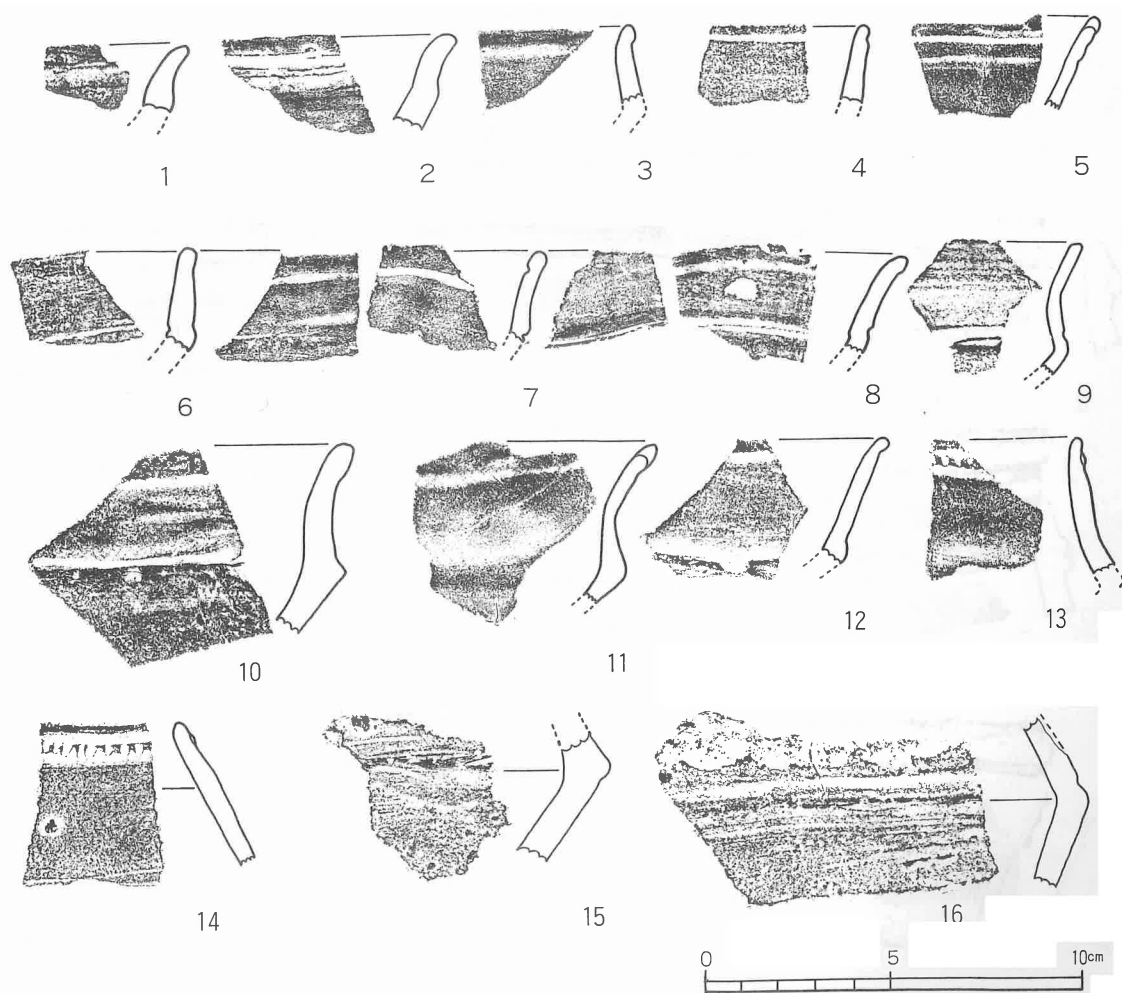
第30図1~22の中で、22は口縁部、12~21は胴部および肩部である。22はやや外傾する口縁部内側に粘土を貼り付け、その上に二条の沈線を有し、特異な形を呈す。色調は暗褐色ないし黄褐色を呈すもの(1、2、4、5、8、13、15、16、18、20~22)、灰黒色を呈すもの(3、7、9、11、12、19)、赤褐色を呈するもの(10、14)がある。胎土はすべて微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成はすべて良好である。1、3、4~6、11~13、20は外壁ないし内壁に一条の沈線を有し、17、21には二次的穿孔がみとめられる。全体的に良く研磨されているが、特に1、3、10、14、22は研磨が著しく施されている。また3は内壁に4、10は内外壁に赤色顔料



第30图 第 I 区出土土器实测图 (2)

が塗られており、2、6、13、18は外壁に煤が点々と付着している。1～3、11～22は晩期Ⅱ式に、4～10は晩期Ⅲ式に比定される。

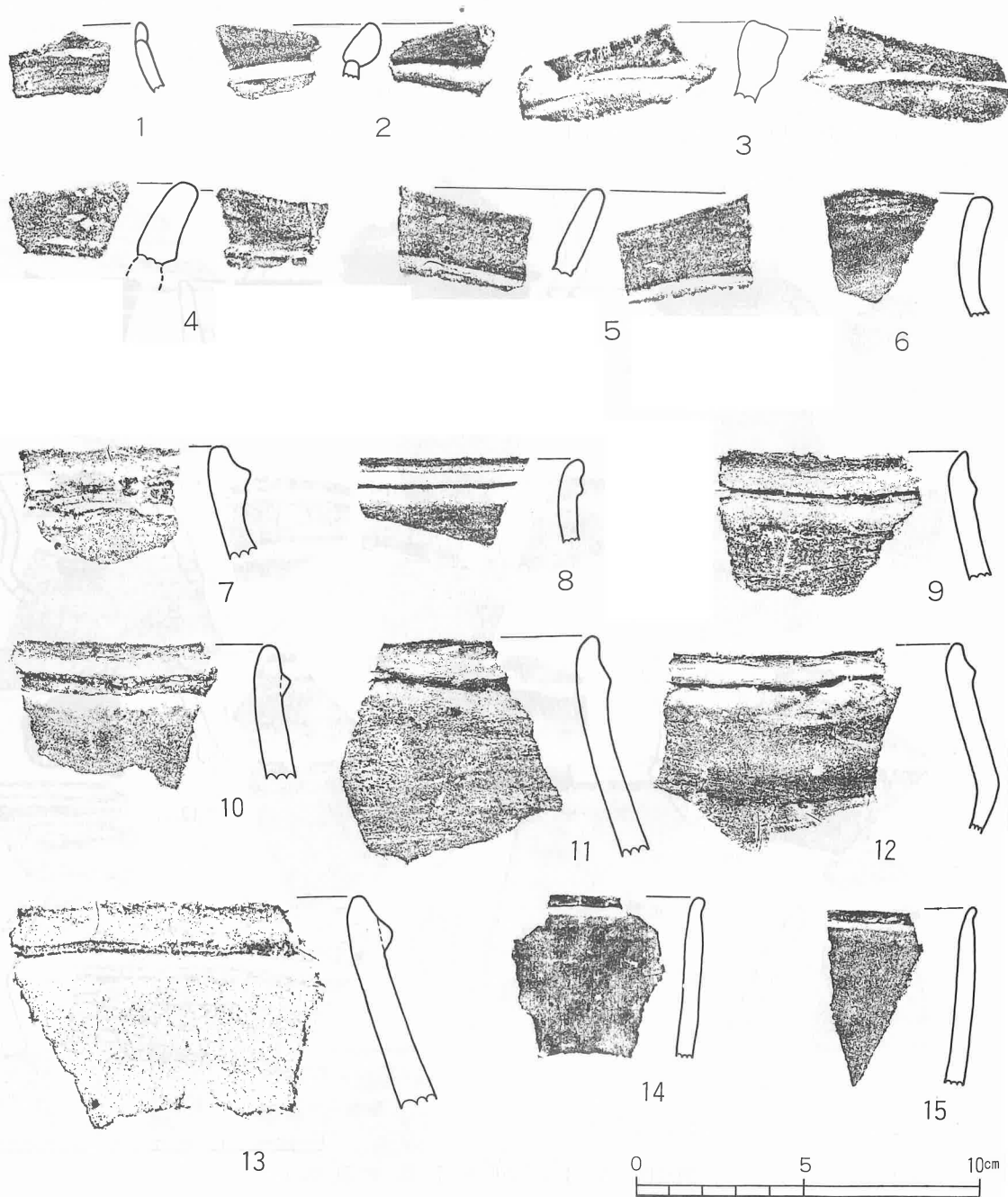
第31図1～14は口縁部、15、16は肩部である。1～14は色調は黄褐色ないし淡褐色を呈し、胎土は微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成は良好である。4、5、7～9は内外壁に1～数条の沈線をめぐらし、5、11は口唇部にリボン状の小突起を有す。13、14は二条の沈線により削り出した突帯に刻目を入れている。15～16は色調は暗褐色を呈し器壁はやや厚手で胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好であり、外壁には条痕が残っている。また二次的に火をうけ煤が付着している。第31図1～16の浅鉢形土器はすべて晩期Ⅲ式に比定される。



第31図 第Ⅰ区出土土器実測図(3)

深鉢形土器（第29図1、第34図1～13、第32図7～13、第33図1～16）

第29図1は口縁部で復元口径約20cmを計り、タガの部分はやや内傾し、篋状工具による二条の沈線及び楕円凹文を有し、色調は内壁は赤褐色、外壁は暗褐色を呈する。胎土は砂粒を含む精選されたものを用い、焼成は良好で器壁は内外共によく研磨されている。外壁全面に煤が付着して



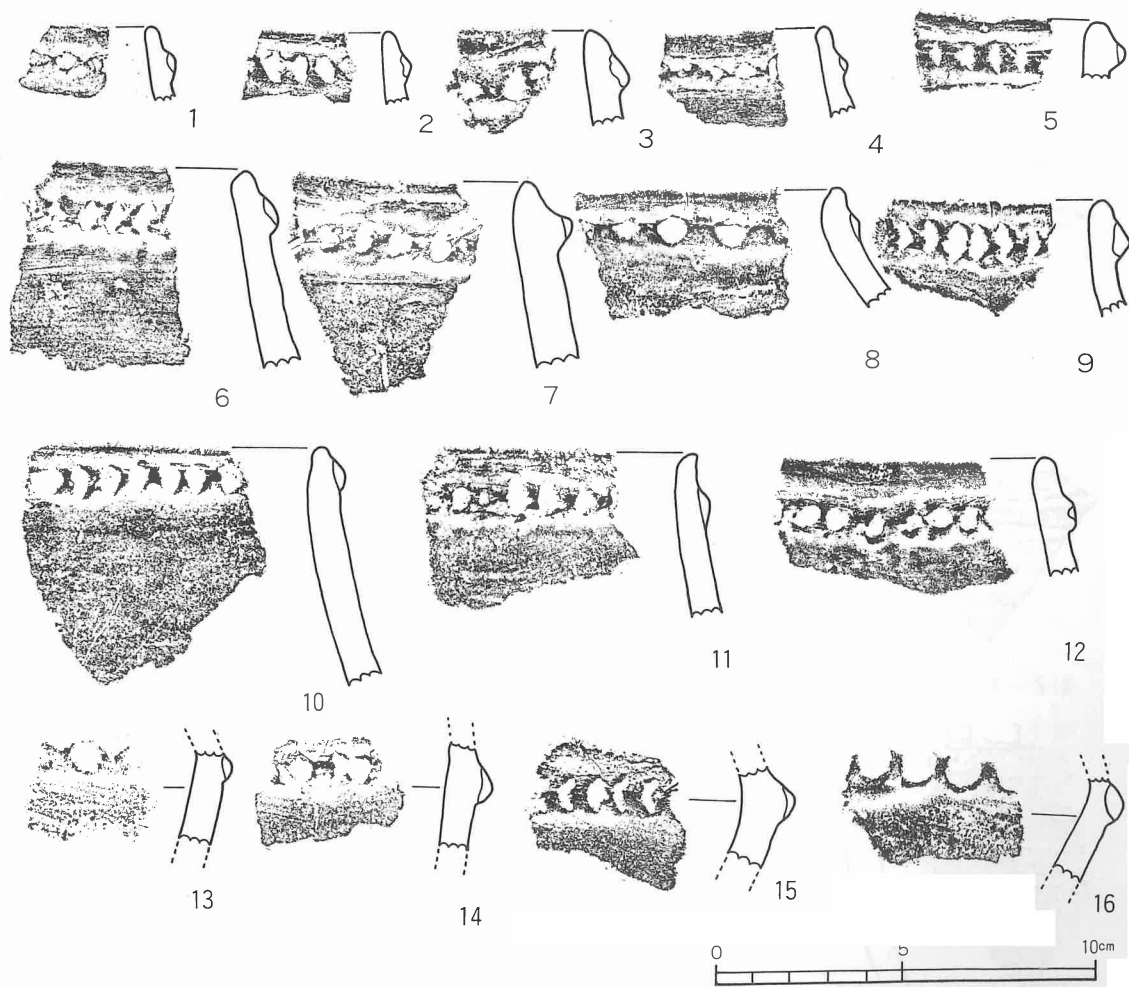
第32図 第I区出土土器実測図(4)

いる。

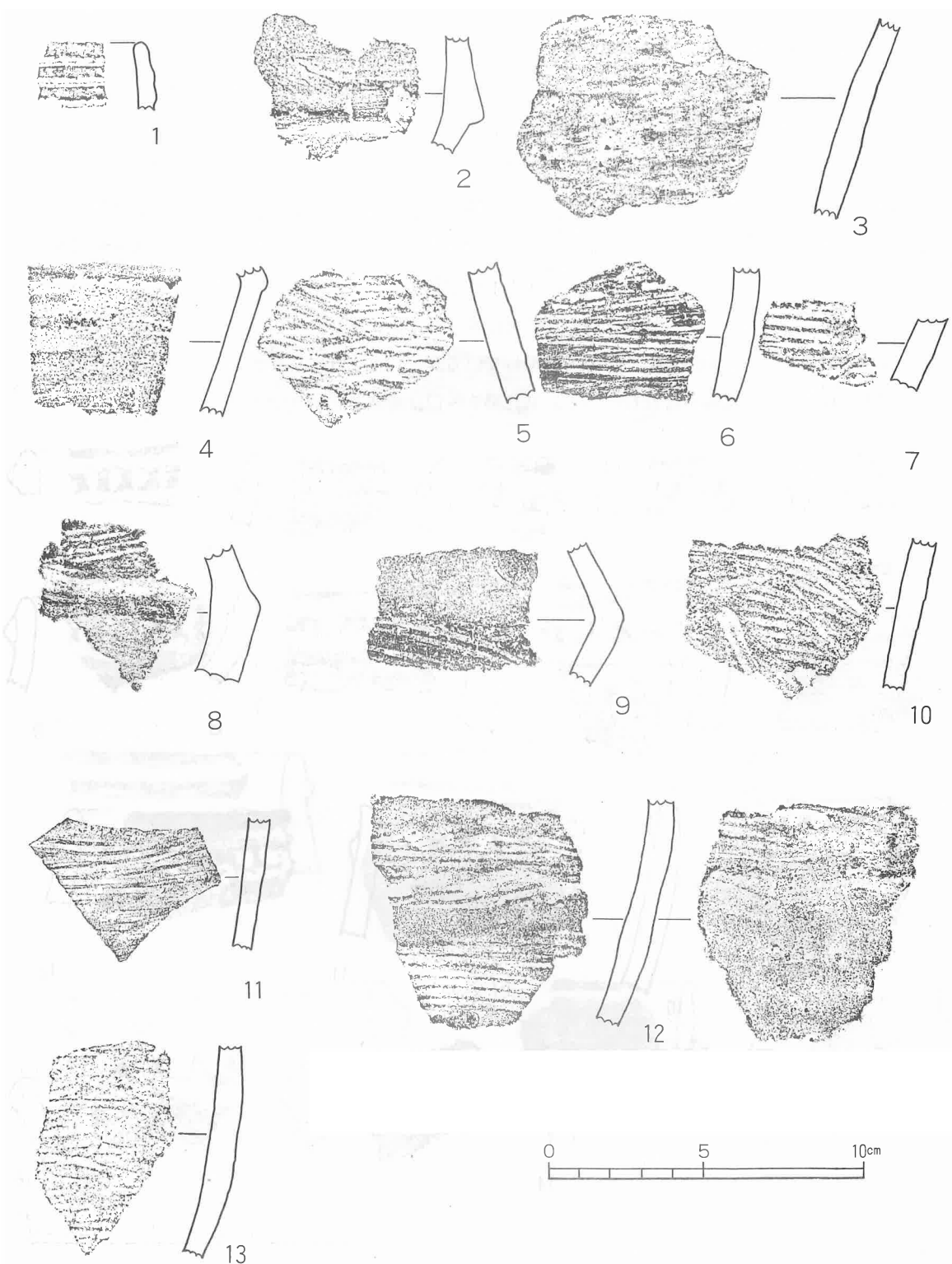
第34図1も口縁部で、ほぼ垂直に立ち上がり三条の凹線が認められ、色調は暗黄褐色を呈し胎土は砂を少量含む精選されたものを用い、焼成は良好で、器壁は内外共によく研磨されている。

第29図1、第34図1は晩期Ⅰ式に比定される。

第32図7～13は突帯を有する深鉢形土器の口縁部である。色調は黄褐色を呈すもの（8、9、10、12、13）と暗褐色を呈すものがあり、胎土は微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成はすべて良好である。突帯は指頭でつまみ出したもの（8、9、11、12）と貼り付けによるもの（7、10、13）の二種類ある。これらの土器は「く」の字状により屈折する肩部にも口縁部と同様に突帯がつくと考えられるが、12の肩部には突帯はみられない。また9は口縁部の断面が他のものと異なり鋭角を呈す。器壁は指でなでて調整しているが、13のようにハケ状の調整痕が残るものも認められる。13には煤が付着している。第32図7～13は晩期Ⅱ式に比定される。



第33図 第Ⅰ区出土土器実測図(5)



第34图 第 I 区出土土器实测图(6)

第33図1～16は刻目突帯を有する深鉢形土器である。1～12は口縁部、13～16は「く」の字状に屈折する肩部である。色調は暗褐色を呈するもの（1、2、4、5）と黄褐色を呈するもの（3、6～16）とがあり、11、15、16は外壁に煤の付着がみられる。胎土はみな砂粒を多く含む精選されたものを用い、焼成は良好である。器壁は貝殻条痕の調整のあと手でなでて調整しており刷毛状の調整痕が残る。14の内壁には貝殻条痕が残る。突帯への刻目の施文はバラエティで8、13、16のように指頭によるもの（爪の跡が残っている）、2、6、14、15のように半截竹管状の施文具によるもの、3、12のように折った棒状の施文具によるもの（不規則な圧痕が残る）、10、11のようにへら状工具により突帯を左右から切りとっていったもの、5、9のようにへら状工具により真上ないし斜上から押えつけたものなどに分けることができる。1、4についてはその施文法を明確に判断できない。第31図1～16はすべて晩期Ⅲ式に比定される。

第34図2～13は深鉢の肩部および胴部である。色調は黄褐色を呈するもの（4、7、8、12）と暗褐色を呈するもの（2、3、5、6、9、11、13）があり、胎土は砂粒ないし微砂粒を多く含み、焼成はいずれも良好である。器壁は貝殻条痕の調整痕が残る。11は胎土、焼成がきわめて良好で、内外壁とも研磨されており、わずかに条痕を残す。3、6、13には外壁に煤が付着している。第34図2～13は、晩期Ⅱ式および晩期Ⅲ式に比定される。

碗形土器（第32図14、15）

第32図14、15は碗形土器の口縁部である。外壁の口縁部直下に一条の沈線をめぐらしている。色調は赤褐色を呈し、赤色顔料を塗ったと思える程である。胎土は微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成は良好で比較的薄手で内外壁共にきわめてよく研磨された土器である。第32図14、15は晩期Ⅱ式に比定される。

壺形土器（第32図6）

第32図6は壺形土器の口縁部で、色調は暗褐色を呈し、胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。

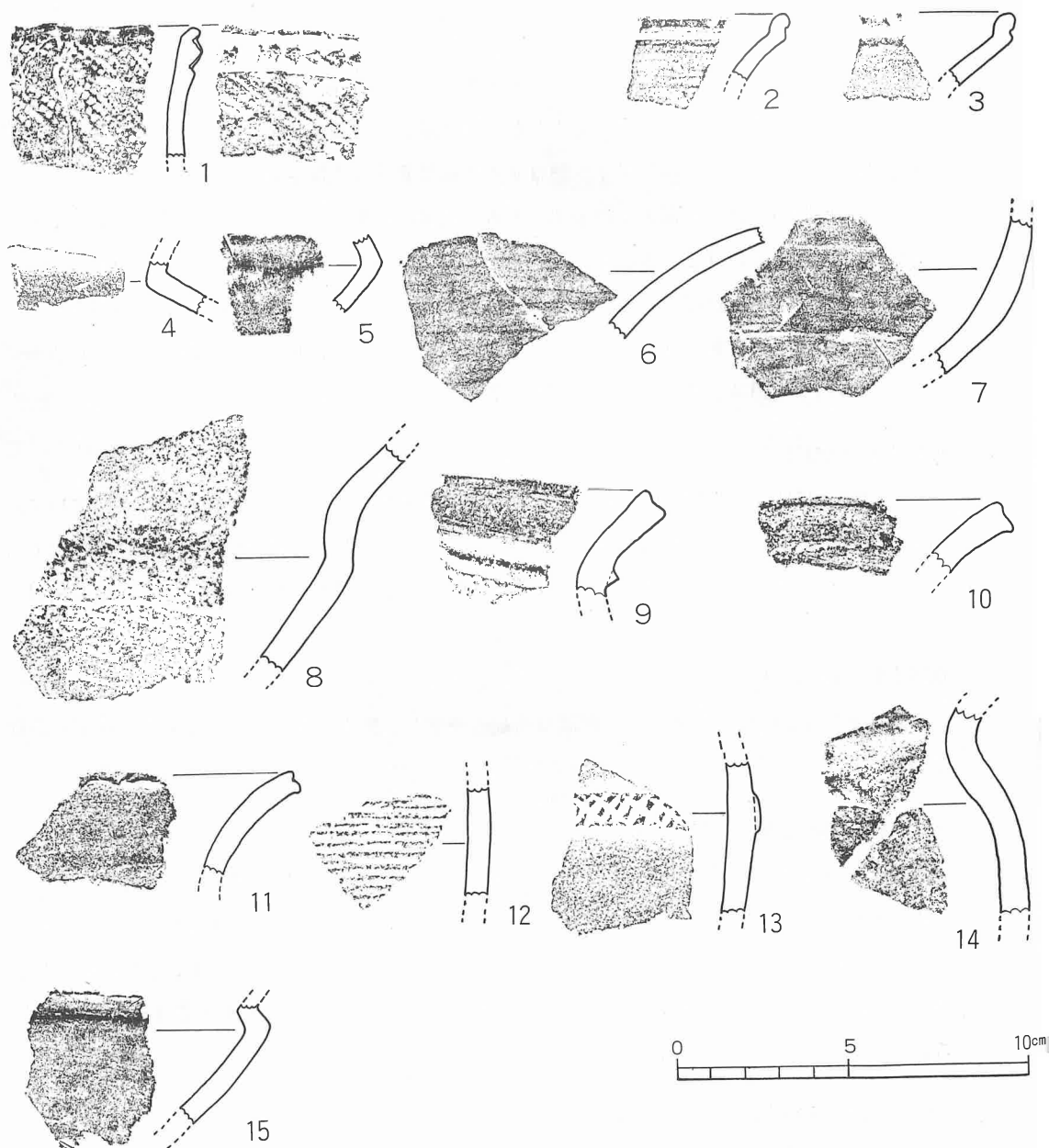
リボン状突起の土器（第32図1～5）

第32図1～5は、口縁部につくりボン状の突起を有する一群である。1、2は浅鉢、3～5は深鉢の土器である。色調は黄褐色を呈するもの（1、4、5）と黒褐色を呈するもの（2、3）があり、胎土はみな微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成は良好である。1、2は研磨され、特に2は研磨が著しく、内壁に赤色顔料が塗られている。第32図1～5は晩期Ⅱ式に比定される。

底部（第29図3～9）

第29図3は鉢形土器の底部で、丸底に近い底部に粘土を環状に貼りつけ安定させている。色調は、外壁は黒褐色、内壁は褐色を呈し、胎土は微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成はきわ

めて良好。外壁には篋状工具による調整痕がわずかに残る。第29図4も3と同様の底部である。色調は灰黒色を呈し、胎土は精選され、焼成はきわめて良好で内壁は良く研磨されている。第29図3、4は晩期Ⅱ式に比定される。第29図5～9は深鉢の底部で、円盤貼り付け底である。色調は褐色ないし赤褐色を呈し、胎土は砂粒（大粒）を多量に含み、焼成は9をのぞき良好である。晩期Ⅱ式ないしⅢ式に比定される。



第35図 第Ⅴ・Ⅵ区出土土器実測図

b) 第2次調査出土の土器（第Ⅴ区、Ⅵ区）

第Ⅴ区出土の土器（第35図1～13）

第35図1～13はⅤ区出土の土器である。1は口縁部で器壁内外にかたい撚りの縄文を施し、口縁直下に押引き文を横走させている。色調は灰黒色を呈し、胎土は微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成は良好でかたくしまっている。瀬戸内の縄文前期末（里木Ⅰ式）に比定される。

第35図2～8は浅鉢形土器で、2、3は口縁部4～8は肩部および胴部である。色調は黄褐色を呈するもの（2、5、7）、暗褐色を呈するもの（3、8）、褐色を呈するもの（4）、暗灰色を呈するもの（6）があり、胎土は8を除いて微砂粒を含む精選されたものを用い、焼成は良好であり6、7は良く研磨されている。8は胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良で外壁に煤が厚く付着している。2～8は晩期Ⅱ式に比定される。

9～13は弥生式土器で、9～11は卵形もしくは砲弾形をなす甕の口縁部で色調は暗褐色を呈し胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好、外壁に煤が付着している。12、13は胴部で、12の色調は暗灰色を呈し胎土、焼成は良好、外壁に叩き目が残り煤が付着している。13の色調は褐色を呈し胎土、焼成は良好で外壁は研磨され、貼付突帯に格子目状に刻目を施し、丹が塗ってある。9～13は弥生終末期に比定される。

第Ⅵ区出土の土器（第35図14、15）

第35図14、15はⅥ区出土の土器である。14は砲弾形をなす甕の肩部から頸部へ移行する部分で色調は淡褐色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。弥生終期末に比定される。

15は浅鉢の肩部で、色調は暗褐色を呈し、胎土は精選され微砂粒を含み、焼成は良好で、器壁は良く研磨されている。晩期Ⅱ式に比定される。

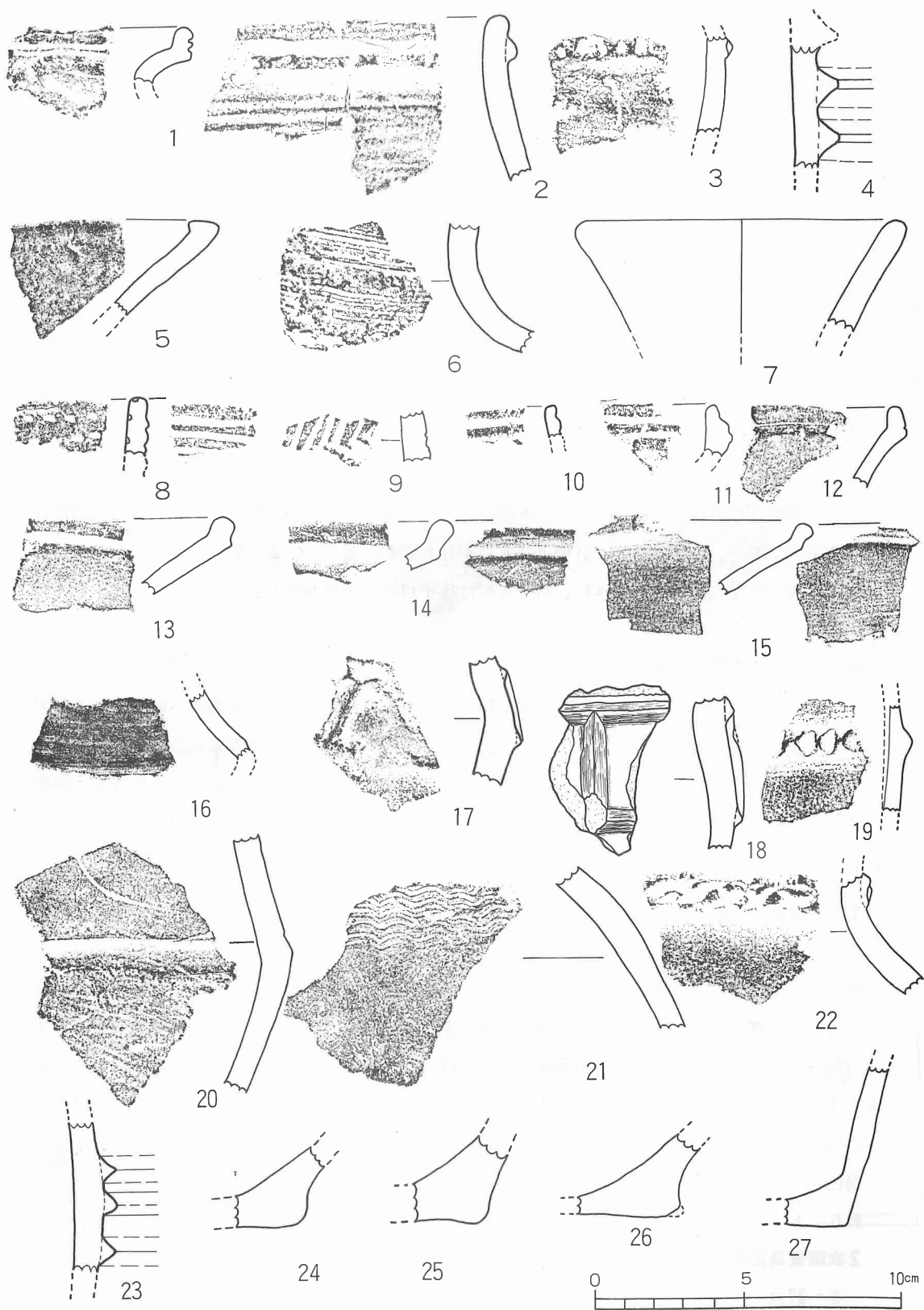
c) 表面採集の土器（第36図1～27）

1次調査表面採集土器（第36図1～7）

1～7は一次調査の際の表面採集の土器である。1は浅鉢の口縁部で、色調は淡褐色を呈し、胎土は精選され焼成は良好で、口縁部外側に二条のヘラ沈線を有す。2、3は深鉢形土器。2は貼付突帯を有する口縁部であり、色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。2の外壁には、貝殻条痕の調整痕が残り、3の外壁には煤が付着している。1は晩期Ⅰ式、2はⅡ式3はⅢ式にそれぞれ比定される。4～7は弥生式土器で、4は壺の胴部突帯をもつ。5は高杯の口縁部、6は壺の肩部から頸部へ移行する部分、7は壺の口縁部である。色調は、4、7は黄褐色、5は淡赤色6、は暗灰色を呈し胎土、焼成共に良好である。5は内外ともよく研磨されており、6は外壁に櫛目の平行沈線が横走する。いずれも弥生終末期安国寺式に比定される。

2次調査表面採集土器（第36図8～27）

8～27は二次調査の表面採集土器である。8は口縁部で色調は黒褐色を呈し、胎土は微砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、外壁にヘラ状工具により数条の沈線を横走させ内壁および口唇部



第36图 表面采集土器实测图

に刺突文がめぐらされている。8は縄文前期曾畑式に比定される。9も8と同様曾畑式の胴部と思われる。色調は褐色を呈し胎土、焼成共に良好である。10～16は浅鉢形土器で、10～15は口縁部、16は胴部で、色調は暗褐色を呈するもの（10、11、16）、褐色を呈するもの（12、13、15）、暗灰色を呈するもの（14）があり、胎土、焼成はすべて良好であり、よく研磨されている。特に15は比較的薄手で、きわめてよく研磨されている。口縁部内外に数条の沈線をめぐらせたものもある。17、18、20は、深鉢形土器の肩部で、色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好であり、17、18は二条の横走る貼付突帯間にさらに縦に粘土を貼りつけている。20は外壁部に条が残り、煤が付着している。11は晩期Ⅰ式、12～16、20は晩期Ⅱ式、17、18は晩期Ⅲ式に比定される。

19、21、22、23は弥生式土器で、いずれも壺形土器である。19は胴部で、色調は黒色を呈し、胎土、焼成は良好である。刻目をいれた貼付突帯を有する。21は肩部で、色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成はきわめて良好で、外壁はよく研磨され部目波状文が施文されている。22は肩部から頸部へ移行する部分で、色調は暗褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。貼付突帯をめぐらし、それに格子状に刻目をつけている。23は胴部の突帯部で、色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成きわめて良好である。19、21～23は弥生終末期安国寺式に比定される。

24～26は深鉢の底部である。色調は暗褐色を呈し、胎土砂粒を多く含み、焼成は良好であるが剥落がはげしい。24～26は晩期Ⅱ式ないしⅢ式に比定される。

27は須恵器の底部である。

(9) 石 器

a) ネギノ遺跡出土の石器（第37図1～17、第38図）、第19図

第1次・2次調査あわせて出土した石器は合計30点である。2回の発掘調査で得た石器は必ずしも多くはないが、石鏃・石匙・削器などの剝片石器と扁平打製石斧・石庖丁形石器の扁平石器と凹石・敲石・磨石などのいわゆる礫石器の3つに大別され、これらの出土地区・出土地点・層位については第3表に示した通りである。図示した石器の大半は、縄文時代晩期の遺物包含層からの出土である。弥生時代の石器は住居跡の埋土中から出土した遺物（第19図）と、第37図12の磨製石鏃が弥生時代後期の包含層より検出された。

以下、図示した石器について器種別に述べることにする。

剝片石器（第37図1～17）

石鏃（第37図1～11） 欠損品も含めて11点を数え、ほとんどが縄文時代晩期の遺物包含層からの出土である。形態的に見ると、基部がほぼ直線をなし三角形状を呈するもの、浅い挟りをもつもの、有柄状に凸部を有するものなどに大きく分けられる。石質はサヌカイトと黒曜石が用いられほぼ同比率を示している。1は基部はやや内彎しているが、全体は二等辺三角形に整えられている。両面とも全面に大きさの揃った二次加工が見られ、断面は凸レンズ状をなす。2はきめの細

かい良質のサヌカイトが使用されている。

長さや幅がほぼ等しく正三角形に近い。

先端部は鋭利に作られている。両面とも押圧剥離による二次加工が施され、精巧

入念に作られている。3は1・2と同じ形状であるがひとまわり大きい。比較的

大きな剥離が全面に及んでおり、整っている。きめの粗いサヌカイトを素材として

いる。4は右側辺がやや外彎する小型の石鏃である。5は先端部を欠損しているが、形状はほぼ正三角形をなす。6は

形状がいびつで先端部を欠く。左側辺は直線的であるが、右側辺は外に少し張り

出し気味である。両面とも二次加工が施こされており、一部左からの細長い剥離

が中央部を越えて右側にまで及んでいる。7は分厚い剥片を素材とし、形はほぼ三

角形に整えられている。周辺から大きさの揃った細長い剥離が中央の肥厚した部

分にむかって走っている。裏面にも入念な押圧剥離がなされている。断面は素材となった剥片

に大きく左右され凸レンズ状を呈している。8は分厚い剥片を素材とし、二次加工は両面とも全

面に及んでいるが、表裏とも第一階程の剥離面を最も肥厚した部分に残している。階段状剥離が

両面とも目立つ石鏃である。断面は7と同様に、厚いレンズ状楕円形状をなしている。9も分厚

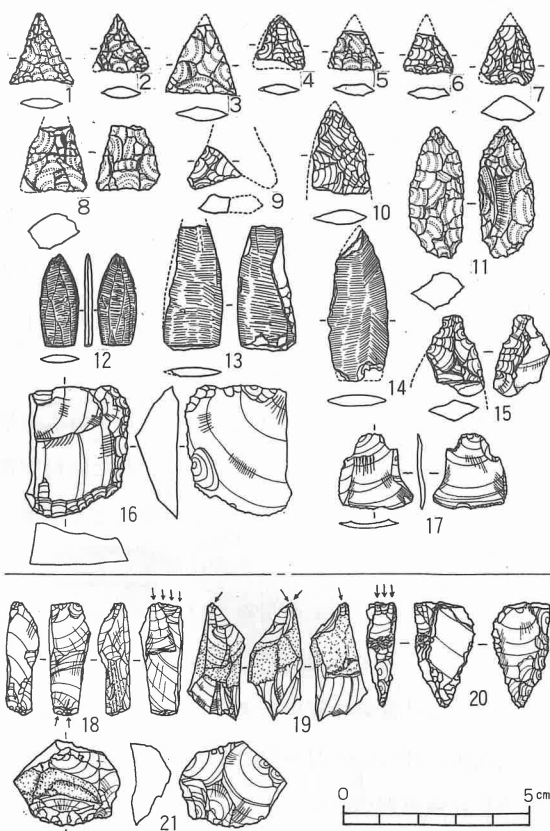
い剥片を素材としている。不純物を含む質の悪い黒曜石が使用され、片脚部のみで全形は不明だ

が挟りを有する比率の大きな石鏃と考えられる。裏面に主要剥離面を残している。脚部の断面は

三角形状を呈している。10は基部が欠損しているが、挟りが浅い石鏃と思われる。右側辺はゆる

やかにカーブしている。両面とも全面に細長い剥離面が行き届いている。断面は凸レンズ状を呈

している。11はサヌカイトの分厚い横長の剥片を素材とし、その主要剥離面が裏面に見られる。



第37図 各区出土石器実測図(1)

形状を整えると同時にバルブをカットするため、裏面左側から階段状剥離による加工がなされ、周辺部は大きさの揃った剥離面が表裏面とも並んでいる。石鏃と分類したもの、一種の小型尖頭器とも考えられる。先端部の二次加工は特に入念である。断面は階段状剥離を明瞭に示している。

以上は、11を除いて縄文時代晩期の文化層である第Ⅲ層からの出土で、この時期の所産と考え

られる。

石匙（第37図15）

主体部が欠損しているので形状は不明だが、縦長の石匙と思われる。灰黒色の光沢を余り帯びない黒曜石の縦長のフレイクを素材としている。つまみ部は片面からの剝離によるノッチによって形成されている。表面の二次加工は全面に及んでおり、中央部に稜を形成している。裏面は左側のみ押圧剝離による二次加工が見られる。表土層からの出土である。

削器（搔器）（第37図16）

姫島産の乳白色をした黒曜石が利用され、断面三角形の横長の剝片を素材とし、半折している。主要剝離面を大部分残し、周辺部に急角度の打撃を加えて、鋭い刃部を形成している。下辺は、約 40° ～ 45° の角度で刃部がつけられ、その部分はサイドスクレイパーとして使用し、右辺は、約 60° の刃角が形成されエンドスクレイパーとして利用されたものと思われる。主要剝離面側には上部に集中して二次加工がなされている。C-2・3グリッドの表土から出土している。

二次加工のある石器（第37図17）

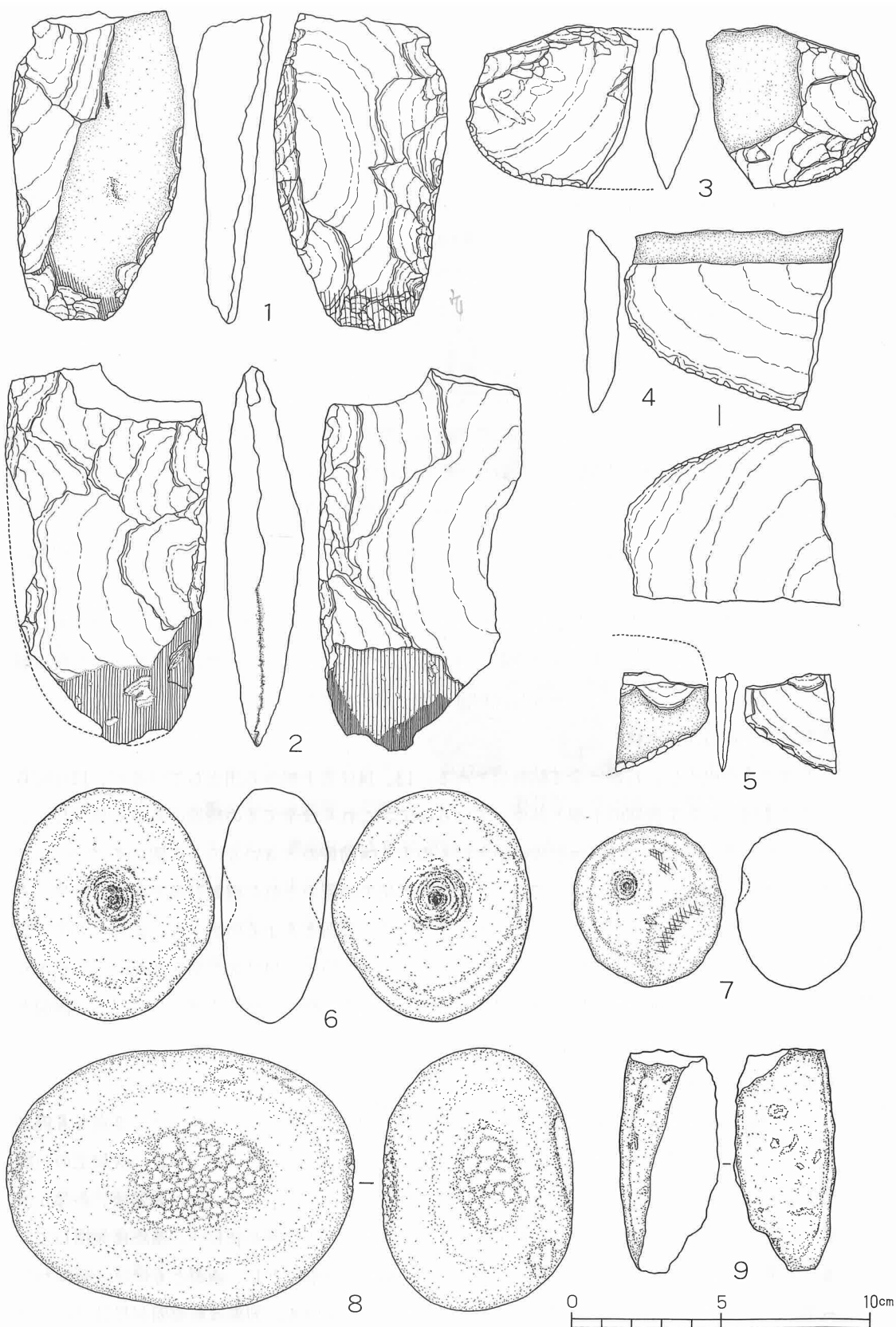
非常にうすい剝片を素材とし、片面の右側辺下部から下辺の右側にかけて細かなリタッチが見られ、上端の両側は背面からノッチ状加工がなされている。形態としては石匙に近い。石質は姫島産の黒曜石を利用している。第5号住居跡の表土層から出土。

磨製石鏃（第37図12～14）

全部で3点出土し、石質は全て粘板岩である。13、14は表土層から出土しているが、12は明らかに第Ⅱ層から弥生後期の土器と共伴しているので、これらは全てその時期のものと見なしてよいと思われる。大きさは2.5cm前後の小さいものと4cm前後の大きいものとに別けることができ、形態・製作とも殆んど類似している。12は完形品で均斉のとれた磨製石鏃である。表裏とも全面に研磨が行き届いている。13は先端と基部を欠く。両面ともよく研磨され、両面ともに意識的な面取り加工は見られず、自然に形状を整えて仕上げている。14は先端部と基部の少しを欠くが、残されている基部を観察すると、12と同様、直線状に截断された如く磨かれている。両面とも研磨が施こされ、断面は凸レンズ状を呈している。

扁平石器（第38図1～5）

扁平打製石斧（第38図1・2） 発掘調査ではわずか2点しか検出できなかった。2点とも縄文時代晩期のものと考えられる。1は礫面を残す横剝ぎの安山岩剝片を素材とし、二次加工の剝離の大部分が主要剝離面に集中しており、背面は刃部近くにのみ集中している。刃部は、かなり使用した跡がうかがえ、特に先端部2～3cmの範囲に使用による擦痕が著しい。基部は欠損している。第Ⅱ層の最下面から出土している。2も横剝ぎの剝片を素材とし、両面ともほぼ全面にわたって二次加工が見られる。一側辺は入念な剝離が施こされている。刃部は剝離面が見分けにくいほど使用痕が著しい。特に刃先の1cmあまりは光沢を帯び、過度の使用がうかがえる。これはE

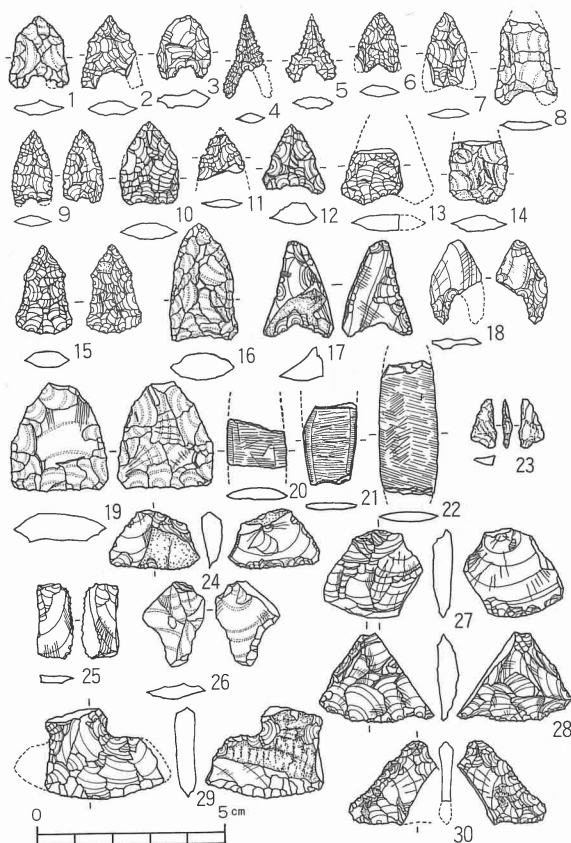


第38图 各区出土石器实测图(2)

—22グリッド遺構内からの出土で、
遺構埋土の第Ⅲ層にあたる。

石庖丁形石器（第38図3～5）

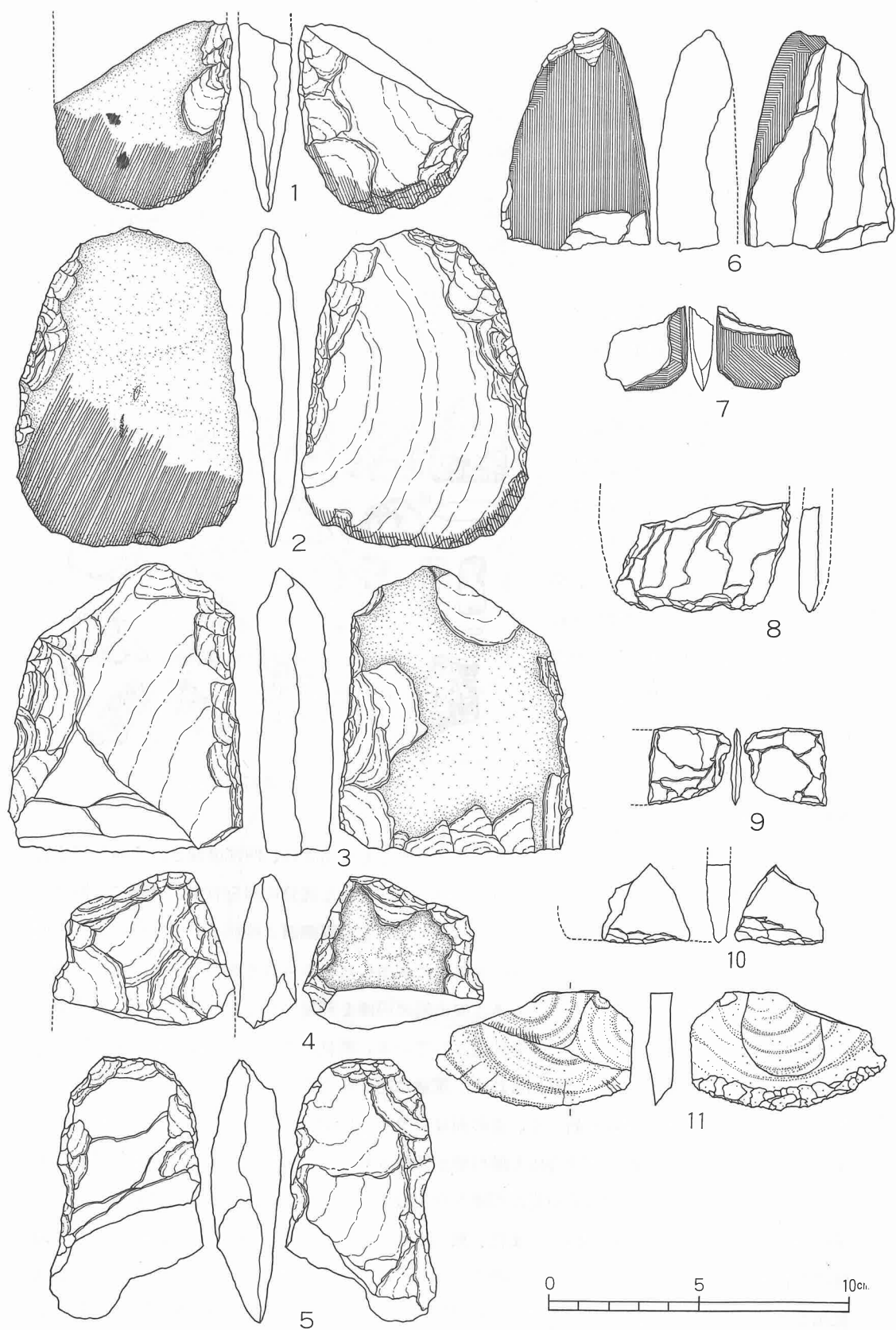
3点とも礫の表皮を残し、扁平な
剥片を素材としている。全て半折し
ている。3は縦長の剥片を素材とし、
礫面を残している。一辺に小さな剥
離が並び、鋭利な刃部を形成してい
る。他の二次加工は主要剥離面の
上部に集中している。4は横長の剥
片を素材とし、礫面が上端に残って
いる。半折しているが、刃部は剥片
の鋭利なエッジをそのまま利用し、
使用痕とみる細かい剥離面が観察さ
れる。他は顕著な二次加工は見られ
ない。5は大部分を欠くが横長の剥
片を利用している。刃部形成の小さ
な剥離面が両面とも見られる。



第39図 表面採集石器実測図(1)

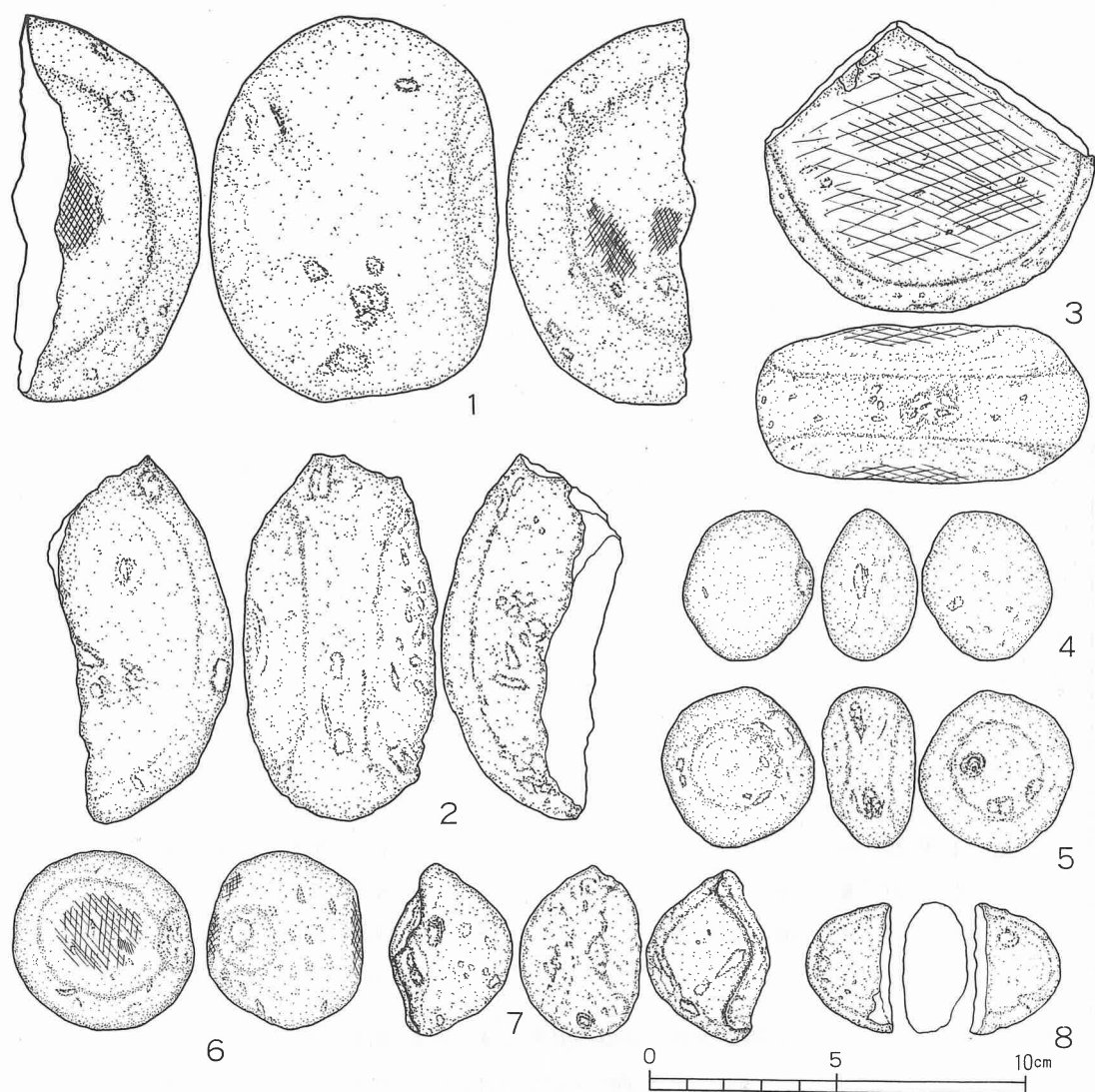
礫石器（第38図6～9、第19図1～4）

6は扁平な安山岩円礫を利用した凹石である。両面とも使用され、凹部の深さは5mmを測る。
7は断面が卵形をした安山岩の円礫を利用し、中心をはずれた部分に凹を有す。一部には擦痕も
見られる。8は厚みのある安山岩の楕円礫を利用している。両側面と端面の中央部に特に敲打痕
が顕著にみられる。約1kgと重く、重量を効果的に利用したとみられる敲石である。9は欠損し
ているため全形は不明であるが、厚みのある安山岩の円礫を利用したとみられ、一面に打痕が見
られる。1は楕円形をした安山岩円礫を利用としている。磨耗が著しく全面にわたって磨石とし
て使用されている。一部に敲打痕が見られる。重量は約1kgと重い。2は厚みを持つ安山岩の楕
円礫を利用し、片面のみ磨耗が著しく、その面はフラットになっている。磨石として利用された
面に一部敲打の跡が見られ、周辺部にも敲打痕が観察される。重量は9と大差なく1kg余りであ
る。3断面隅丸三角形を呈する安山岩の円礫を利用している。両端に敲打痕が認められ、平坦な
面の中央部にも見られる。この面は、また、磨石としても使用されている。約1.2kgとネギノ遺
跡の石器中もっとも重い。4安山岩の円礫を利用した片面平坦な厚みのある磨石である。顕著な
使用を示している。周辺はほぼ全周にわたって削られたような跡が観察され、特異な例として興
味ある石器である。



第40图 表面采集石器实测图(2)

以上、8点の礫石器は7を除いて、住居跡の埋土ないしは床面からの出土である。7の凹石は第Ⅲ層から縄文時代晩期の土器と共伴して出土し、この時期に比定されるものと考えられる。また、大きさ・重量の面からも他の7点と較べて小さく、軽い。住居跡の床面から出土している8（5号住居跡）、9（4号住居跡）、3・4（1号住居跡）の4点は、それら住居跡の時期に同じものと考えられる。



第41図 表面採集石器実測図(3)

第3表 ネギノ遺跡出土の石器一覧

図番号	地区	出土地点	層位	器種	石質	最大幅×最大長 (cm) (cm)	重量 (g)	調査	
1	I	C-16	Ⅲ層	石 鏃	サヌカイト	1.7×1.9	0.6	1次	37図
2	〃	〃	〃	〃	〃	1.4×1.5	0.5(+)	〃	〃
3	〃	C-21	〃	〃	〃	1.9×1.9	1.0(+)	〃	〃
4	〃	C-11	〃	〃	黒曜石	1.3×1.4	0.5(+)	〃	〃
5	〃	C-21	〃	〃	サヌカイト	1.3×1.1	0.4(+)	〃	〃
6	〃	C-26	〃	〃	黒曜石	1.4×1.1	0.4(+)	〃	〃
7	〃	C-21	〃	〃	〃	1.5×1.6	1.3(+)	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	サヌカイト	1.7×1.7	1.9(+)	〃	〃
9	〃	C-31	〃	〃	黒曜石	1.5×1.2	0.6(+)	〃	〃
10	V	C-9	〃	〃	〃	1.6×2.3	1.7(+)	2次	〃
11	VII	5号住	埋土	〃	サヌカイト	1.5×3.5	4.4	〃	〃
12	V	D-50	Ⅱ層	磨製石鏃	粘板岩	1.0×2.5	0.9	〃	〃
13	VI	D-3	表土層	〃	〃	1.5×3.3	1.8(+)	〃	〃
14	〃	2号住	〃	〃	〃	1.6×4.0	2.7(+)	〃	〃
15	II	E-40	〃	石 匙	黒曜石	1.5×2.2	1.4(+)	〃	〃
16	VI	C-2・3	〃	削 器	〃	2.8×3.4	11.5(+)	〃	〃
17	VII	5号住	〃	二次加工のある石器	〃	2.0×2.0	0.8	〃	〃
1	I	C-21	Ⅱ層	扁平打製石斧	安山岩	5.7×10.4	169.7(+)	1次	38図
2	II	E-22	溝内	〃	〃	6.8×12.6	238.2(+)	2次	〃
3	I	C-26	Ⅱ層	石庖丁形石器	〃	5.7×5.5	52.4(+)	1次	〃
4	V	C-9	Ⅲ層	〃	〃	7.2×6.0	59.2(+)	2次	〃
5	II	F・G-1	〃	〃	〃	3.0×3.3	6.2(+)	1次	〃
6	VII	4号住	埋土	凹 石	〃	6.3×7.7	228.8	2次	〃
7	I	C-21	Ⅲ層	〃	〃	5.0×5.3	152.0	1次	〃
8	VII	5号住	床面	敲 石	〃	11.6×8.6	1023.5	2次	〃
9	〃	4号住	〃	磨 石	〃	3.3×7.4	169.2(+)	〃	〃
1	〃	〃	埋土	磨 石	〃	8.7×11.5	1111.0	〃	19図
2	〃	〃	〃	磨石・敲石	〃	9.6×11.0	1119.0	〃	〃
3	〃	1号住	床面	敲 石	〃	9.6×12.1	1238.0	〃	〃
4	〃	〃	〃	敲 石	〃	9.2×10.0	911.0	〃	〃

b) ネギノ遺跡表採の石器（第39～41図、第37図18～21）

2次にわたる調査期間中、ネギノ遺跡のほぼ全面にわたる表採によって発掘出土数を上まわる53点もの石器が採集された。これら表採石器の器種・石質・大きさ・重量については第4表に示した通りである。出土石器に比して二等資料の価値しか持たないが、ネギノ遺跡の性格を把握する上で軽視出来ない重要なものと考えるので、出土石器と同様、剥片石器・扁平石器・礫石器と大別し、器種別に述べることにする。

剥片石器（第37図18～21、第39図1～30）

石鏃（第39図1～18） 形態的に見て、(イ)いわゆる駒形鏃、(ロ)挟りが深い鋸歯鏃、(ハ)挟りの比較的浅いもの、(ニ)丸く突出した基部を有するもの、(ホ)素材となる剥片の剝離面を大きく残すもの、と大きく5種の形態に分類出来る。石質は黒曜石・サヌカイト・チャート・安山岩の順に使用されている。駒形鏃（第39図1～3）は3点で、いずれも両面ともに押圧剝離によって二次加工がなされている。1・2は形態的に全く同一であるが、3はそれほど明確な駒形ではなく、全体として丸みを帯びている。断面も1・2と幾分違いを見せている。4・5は両側縁が鋸の歯のように調整されたいわゆる鋸歯鏃である。ともに挟りの深い基部を有している。違いといえば剝離の技術でこれは黒曜石とサヌカイトという石質の差に起因するものと考えられる。4は非常に均斉がとれ、スマートに仕上げられているのに対し、5は剝離が粗くずんぐりしていびつである。挟りの比較的浅いもの（6～13・16）は9点を見るが、わずかに挟りが見られ、一見すれば直線に近いもの（10・16）から3mmに達する挟りを持つもの（8）まで、バラエティに富んでいる。6・7・9はもとに黒曜石製であり、表裏ともに全面にわたって大きさの揃った剝離面がみられる。8は安山岩を利用し、形状・剝離技術とも他と若干の違いを示している。両側辺はほぼ平行に走っており、ゆるやかに先端部へ移行すると考えられる。両面とも大きな剝離が見られ、縁辺部に小さな加工を見る石鏃である。12は厚みのある剥片を素材とし、片脚部に礫面を残している。基部が外彎状に張り出しているのは、14・15である。15は両側縁上部に肩が張り出し、そこからやや内彎して基部にいたる。18は剥片鏃の範疇に入るが、西北九州の縄文時代後期に見られる縦長の剥片を素材とした剥片鏃とは幾分異なるもので、不定形の剥片を素材としている。17もb面に大きく主要剝離面を残しているが、未製品と思われる礫面を残している。

尖頭状石器（第39図19）

不定形のサヌカイトの剥片を素材とし、主要剝離面を残す。基部調整加工のためバルブカットされており、形態的には、九州縄文時代早期の押型文土器に伴なう尖頭状石器と全く同じであるが、表採品であるため時期決定に正確さを欠く。石鏃をひとまわり大きくしたもので、機能的には石鏃と考えてよい。

彫器（第37図18～20）

姫島産の黒曜石製2点とチャート製1点の3点が表採されている。18は両端に錯交状に grave

r-facets が作出され、柱状の礫面を残す剥片を素材としている。上端の刃部は4回のフルーティング加工によって作られ、鋭い。使用痕は上下両端の刃部に観察される。19は刃部が嘴状に尖っており、残核を利用し、graver-facets 以外は殆んど二次加工を見ない。20は縦長の剥片を素材とし、打面を調整して後3回のフルーティングにより graver-facets を作出している。表面の左側下部はナイフ形石器のブランディングを思わせる急角度の二次加工が見られ、右側辺にわたって押圧剥離による細部加工が施されている。

削器（第39図28、第40図11）

28はチャート製で両面とも二次加工の剥離面が全面に見られ、刃部は鋭利である。刃部には使用痕とみられる刃こぼれが観察できる。11は主要剥離面側のみに加工がみられる大形のサヌカイト製である。

石匙（第39図29・30）

2点とも横形の石匙で、29に比べて、30はつまみ部が小さく、わずかにノッチを施して作出しているに過ぎず、三角形状を呈している。両側辺には大きさ・形の揃った剥離面が並んでいる。

二次加工のある石器（第37図21、第39図24～27）

石核の一部に二次加工のあるもの（21）と剥片の縁辺に二次加工の見られるもの（24～27）と素材別に分けられる。後者は更に、刃部が直線のもの（24）、外彎するもの（25・27）、内彎するもの（26）に細別される。21・24・27は削器的機能を有している。25は不定形の剥片を素材とし、小さなリタッチングによる二次加工が見られる。26は刃部が内彎し、表面からのリタッチによって形成されている。小形の concave-scraper と考えられる。

不明石器（第39図23）

ナイフ形石器に類似した石器で、全面に磨滅が見られ、剥離の稜線は不明瞭で光沢を帯びる。側面は細かいブランディング加工によって形成されている。チャート製。

磨製石鏃（第39図20～22）

3点とも欠損品であるが、発掘による出土石器と形態的に大差ないものと考えられる。21の基部はやや細まり内彎している。また磨製技術にも若干の差異が見られ、意識的な面取り加工を施している。

扁平石器（第40図1～5、8～10）

扁平打製石斧（第40図1～5、8）

6点の内訳は安山岩製4点、蛇紋岩製と粘板岩製各1点ずつである。安山岩製のすべては片面に礫面を有する扁平な横剥ぎの剥片を素材とし、円礫の自然面のゆるやかな彎曲をうまく石斧のそりとして利用している。1・2の刃部は使用痕が顕著で、斜方向の線條痕・磨滅を剥離のくぼみまでも見ることができる。5は基部のみの横剥ぎの剥片を素材とした石斧であるが、比較的厚みを有する。磨製石斧の未製品とも考えられる。8は粘板岩製である。裏面は粘板岩特有の節

理が残されている。3、4、5は半折しており、刃部の使用痕は観察されない。

石庖丁形石器（第40図9・10）

9は粘板岩、10は安山岩が用いられ2点とも半折している。9は両面とも板状剝離による二次加工が見られ、刃部は小さな剝離によって形成され、刃部は鋭利である。10は剥片のままの剝離面を残しているが、打撃の方向は不明である。

礫石器（第40図6・7、第41図）

磨製石斧（第40図6・7）

発掘では出土を見なかったが、安山岩と蛇紋岩製の磨製石斧2点が採集されている。6は刃部欠損しているが、全面に研磨が見られる。7は刃部に使用痕である擦痕が顕著に見られる扁平な石斧である。両面ともよく研磨されている。

敲石・磨石（第41図）

敲石と磨石を併用しているのもあり、全て安山岩の円礫を利用している。150g以下の小さいものと300g以上の大きいものとに大別できる1・3・4・6・8は磨石として利用され、1は厚みのある円礫を、3は扁平な円礫をそれぞれ利用し、両面ともに使用痕が観察される。両者とも、周縁部は敲石としても使用されており、敲打痕を見ることができる。6は円礫を用い、両面とも使用による擦痕が見られ、敲石としても使われている。2・5・7は敲石としてのみ使用され、敲打痕が著しい。

第4表 ネギノ遺跡採集の石器一覧

図番号	器 種	石 質	最大幅×最大長 (cm)	重 量 (g)	
18	彫 器	チャート	1.1 × 3.0	3.5	37図
19	〃	黒曜石	1.6 × 3.1	3.9	〃
20	〃	〃	1.6 × 2.8	3.0	〃
21	二次加工のある石器	〃	2.9 × 2.2	5.6	〃
1	石 鏃	サヌカイト	1.6 × 1.9	1.1	39図
2	〃	黒曜石	1.5 × 1.9	0.9(+)	〃
3	〃	チャート	1.5 × 1.7	1.1	〃
4	〃	黒曜石	1.1 × 2.2	0.3(+)	〃
5	〃	サヌカイト	1.3 × 1.6	0.4	〃
6	〃	黒曜石	1.1 × 1.6	0.6(+)	〃
7	〃	〃	1.1 × 2.0	0.6(+)	〃
8	〃	安山岩	1.7 × 2.2	1.1(+)	〃
9	〃	黒曜石	1.0 × 1.9	0.5(+)	〃
10	〃	〃	1.7 × 2.2	1.6	〃
11	〃	〃	1.3 × 1.2	0.3(+)	〃
12	〃	〃	1.7 × 1.9	1.2	〃

13	石	鏃	黒曜石	1.7 × 1.4	1.2(+)	39図
14	〃		サヌカイト	1.5 × 1.6	1.4(+)	〃
15	〃		黒曜石	1.4 × 2.3	1.2	〃
16	〃		サヌカイト	1.8 × 3.1	3.9	〃
17	〃	(未製品)	黒曜石	1.8 × 2.5	2.3	〃
18	〃		〃	1.3 × 2.2	0.6(+)	〃
19	尖頭状石器		サヌカイト	2.6 × 2.9	6.3	〃
20	磨製石鏃		粘板岩	1.6 × 1.3	0.9(+)	〃
21	〃	鏃	頁岩	1.4 × 2.2	1.1(+)	〃
22	〃		〃	1.6 × 3.6	2.5(+)	〃
23	不明石器		チャート	0.7 × 1.3	0.2	〃
24	二次加工のある石器		黒曜石	2.4 × 1.6	1.7	〃
25	〃		〃	1.0 × 2.0	0.6	〃
26	〃		サヌカイト	1.7 × 2.2	1.2	〃
27	〃		黒曜石	2.6 × 2.3	3.4(+)	〃
28	削器		チャート	3.1 × 2.4	4.7(+)	〃
29	石匙		黒曜石	3.1 × 2.4	4.7(+)	〃
30	〃		〃	2.3 × 2.2	1.9(+)	〃
1	扁平打製石斧		安山岩	5.8 × 6.3	60.8(+)	40図
2	〃		〃	7.6 × 10.6	180.3	〃
3	〃		〃	7.8 × 9.6	271.4(+)	〃
4	〃		〃	6.0 × 5.1	70.2(+)	〃
5	〃 (磨製石斧未製品?)		蛇紋岩	5.0 × 8.7	114.3(+)	〃
6	磨製石斧		安山岩	5.0 × 7.4	111.0(+)	〃
7	〃		蛇紋岩	2.7 × 2.8	5.4(+)	〃
8	扁平打製石斧		粘板岩	5.8 × 3.7	21.6(+)	〃
9	石庖丁形石器		〃	2.7 × 2.6	4.6(+)	〃
10	〃		安山岩	2.9 × 2.6	5.8(+)	〃
11	削器		サヌカイト	6.5 × 3.9	25.2(+)	〃
1	敲石(磨石)		安山岩	5.0 × 10.3	581.0(+)	41図
2	〃		〃	4.9 × 9.7	315.8(+)	〃
3	〃 (磨石)		〃	7.8 × 8.8	425.2(+)	〃
4	磨石		〃	3.5 × 4.0	51.9	〃
5	敲石		〃	4.0 × 4.3	67.7	〃
6	〃 (磨石)		〃	4.9 × 4.8	140.0	〃
7	〃		〃	3.3 × 4.6	56.1	〃
8	磨石		〃	2.3 × 3.5	19.7(+)	〃

c) ネギノ遺跡の石器の考察

ネギノ遺跡から出土・表採した石器は全部で83点ある。そのうち2次にわたる発掘によって出土した石器はわずか30点に過ぎず、土器と比して非常に少ない。ここでは、出土石器に重点を置き、それに表採の資料を加味して、石器についてのまとめと若干の考察をおこなうこととする。

- ① ネギノ遺跡の石器組成は第5表に示した通りである。いわゆる石器 (tools) は表採、出土資料あわせて全体で16%を占め、発掘による出土においては12%を占めるに過ぎない。石核は3%であり、出土でも同様な割合を示して大差ない。剥片・砕片類は80%以上に達する。
- ② 石鏃の占める割合が大きく、発掘による出土でも36.7%もの比率である。三角形鏃、駒形鏃、鋸歯鏃、抉りを持つもの、剥片鏃、基部突出のものと6形態に分類可能である。共伴の土器から縄文時代晩期黒色磨研土器Ⅰ式～Ⅲ式の時期に比定することができる。これら石鏃の形態変化を晩期Ⅰ式～Ⅲ式の時間的な変化なのか、あるいは、限られた時期の単なる形態の変化なのかは判断しかねる。
- ③ 磨製石鏃は発掘による出土と表採を併せて6点に過ぎないが、幅1.5cm、長さ3.5cm位の大きいものと、幅1cm、長さ2.5cmの小さいものとに分けられる。粘板岩を利用し殆んど弥生時代終末のものであるが、図25の表採品だけは、基部の作り、研磨法に違いが見られる。
- ④ 縄文時代晩期に普遍的な扁平打製石斧・石庖丁形石器の占める割合は石鏃に較べると以外と少なく、両石器併せても半分にも満たない。これら殆んどの石器は、片面に自然の礫面を残す横剥ぎの同じ技法で作られた扁平な剥片を素材としている。大部分の扁平打製石斧の刃部に使用痕が観察される。
- ⑤ 凹石・敲石・磨石などの礫石器は20%に近い割合を示し、縄文時代晩期から弥生時代終末期までのものを含んでいる。用途が二種にわたる場合が多く、大きさ・重量から500gを越す大形のもの、200g以下の小形のものに大別できる。これら礫石とセット関係になる石皿の出土はみなかった。
- ⑥ 剥片石器と扁平石器・礫石器との間に明確な石質の選択が見られる。つまり、剥片石器は黒曜石・サヌカイト・チャートに限定され、扁平石器・礫石器は安山岩・蛇紋岩に限られている。

第5表 ネギノ遺跡の石器組成(その1)

器 種	出土数	表採数	小 計	%	器 種	出土数	表採数	小 計	%
石 鏃	11	18	29	35.0	磨 製 石 鏃	3	3	6	7.2
尖 頭 状 石 器	0	1	1	1.2	扁 平 打 製 石 斧	2	6	8	9.6
ス ク レ イ パ ー	1	2	3	3.6	石 庖 丁 形 石 器	3	2	5	6.0
石 匙	1	2	3	3.6	磨 製 石 斧	0	2	2	2.4
彫 器	0	3	3	3.6	凹 石	2	0	2	2.4
二次加工のある 石器	1	5	6	7.2	敲 石 ・ 磨 石	6	8	14	17.0
不 明 石 器	0	1	1	1.2					

ネギノ遺跡の石器組成（その2）

組	成	出土数	表採数	小 計	%
石	器	30	53	83	16.1
剥片・砕片		216	203	419	81.0
石	核	8	7	15	2.9

当遺跡の石器製作に用いられた石質は、考察のところで触れたように黒曜石・サヌカイト・チャート・安山岩・粘板岩・蛇紋岩・頁岩である。ここでは特に石材の搬入と選択性を中心に考察を加えた。

現在、九州では黒曜石の原産地として十数ヶ所が知られており、かなり明らかにされつつある。^{註(1)}肉眼的に観察した限りに於いて確認できた黒曜石は姫島産・腰岳産・阿蘇産のものである。ちなみにネギノ遺跡から各原産地までの直線最短距離を調べてみると、姫島まで約90km、腰岳まで約140km、阿蘇まで約45kmである。中でも阿蘇産出のものが一番多く使用されているが、この黒曜石は阿蘇熔結凝灰岩の中に小塊として含まれ、阿蘇火山噴出物の堆積地帯ではその原産地が数ヶ所見られるので、比較的手近かに採取されたものと考えられる。しかしながら、140kmも離れた腰岳の黒曜石が利用されているということは、何らかの形で当遺跡に持ち込まれたものであり、石材の需要・供給圏あるいは交易の問題として興味深い。サヌカイトの原産地として佐賀県の多久・小城地方の良質のものが挙げられる。しかし、ネギノ遺跡で用いられているサヌカイトは、明らかに多久・小城地方のものと違いを示しており、原産地は現在のところ不明である。

次にネギノ遺跡の石器を機能的に見た場合、狩猟・採集活動を反映している石器群と、原始的農耕による生産経済を反映している石器群^{註(3)}とに大別されることが考えられる。前者は石鏃・スクレイパー・石匙・彫器・尖頭状石器などが相当し、後者は扁平打製石斧・石庖丁形石器が当てられるであろう。

石鏃は他の石器と較べて目立って比率が大きく、これは狩猟の存続を意味するものと考えられる。石鏃の出土状況を見ると、第Ⅰ区に集中しており、しかも第Ⅲ層からの出土が大部分で、何らかの生活面を思わせる。供伴土器から考えると、三角鏃は縄文晩期Ⅲ式の特徴的な石鏃として捉えることができる。表採も含めた全体的な石鏃の形態変化をどのように捉えるか問題であるが、ネギノ遺跡が縄文時代前期末から晩期、そして弥生時代後期・古墳時代初頭までにわたる複合遺跡であることを考慮すれば、単なる製作技術や機能の違いによる形態的な変化とともに時間的な変化も考えてよい。

次に原始的農耕を考えさせる扁平石器は扁平打製石斧・石庖丁形石器あわせてわずか5点にすぎず、一定地域の面としての広がりも認められなかった。更には出土層位もまちまちであるため、生活面としては捉え難く、あたかも使用中に破棄されたような出土状況を示している。九州の縄文晩期の大方^{註(4)}の遺跡から出土している扁平石器の数量に較べると資料が少ない。しかしながら扁平打製石斧・石庖丁形石器の製作技術は、他の遺跡のものと殆んど差が認められず、形態上も同様である。又、扁平打製石斧の大部分に使用痕が認められ、刃先から斜め方向に表裏対称に線条痕・磨耗が見られる。これ^{註(6)}

に対し柄ずれ・手ずれによる磨耗は観察できなかった。農耕用の土耕具としての機能が十分に考えられる。

註

- (1) 清水宗昭「針尾島の黒曜石原石地群」速見考古創刊号 九州先史研究会 1971
同 「石材からみた九州先土器時代の問題(1)剥片石器原石の分布」速見考古第2・3合併号 1972
下川達弥「佐世保市東浜淀姫発見の黒曜石産地」若木考古74 1965
- (2) 清水宗昭 前掲書 1971
- (3) 賀川光夫「縄文晩期農耕の一問題—いわゆる扁平石器の用途—」考古学研究13—4、 1967a
同 「縄文後・晩期農耕文化の一問題—石鍬などについての分類と技法—」史叢第11輯 日本大学史学会刊 1967 b
- (4) 古田正隆「山の寺梶木遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第1集 1973
同 「重要遺跡の発見から崩壊までの記録—縄文晩期原山埋葬遺跡—」百人委員会埋蔵文化財報告第3集 1974
賀川光夫・橘昌信「縄文式晩期農耕文化の研究に関する合同調査」(大分県大野郡緒方町大字大石遺跡)別府大学 1966
同 「縄文晩期農耕の起源に関する研究」(大分県荻町桜山遺跡・恵良原遺跡・横迫遺跡)別府大学考古学研究報告2 1971
同 「小高野遺跡調査報告—大分県大野川流域縄文晩期遺跡の研究—」別府大学考古学研究報告4 1974
渡辺誠他「大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報」平安博物館 1973
坂本経堯・富田紘一他「三万田東原—調査概報—」熊本県菊池郡泗水町教育委員会 1972
鈴木重治他「陣内遺跡」日向遺跡総合調査報告第2輯 宮崎県教育委員会 1962
河口貞徳「黒川洞穴発掘報告」鹿児島県考古学会紀要第2号 1952
同 「上加世田遺跡」鹿児島考古第7号 1973
この他、昭和43年(1968)別府大学考古学研究室によって調査された佐賀県多久市天山遺跡からも多数出土している。
- (5) 賀川光夫「縄文晩期農耕文化に関する一問題—石刀技法—」考古学雑誌52—4 1967
同 前掲書 1967 b
- (6) 橘 昌信「使用痕に関する一考察」古代文化21—9・10 1969

(10) 遺物の分布状況

ネギノ遺跡発掘の際、台地上の表面採集により多数の遺物が採集された。遺物は土器と石器があり特に石器においては採集品が、出土品をはるかに上回っている。土器は縄文晩期のものと弥生終末期のもの、他に若干の須恵器があり、石器は打製石鍬、磨製石鍬、扁平打製石斧、磨製石斧、スクレーパー、尖頭状石器、石庖丁形石器、磨石と種類は豊富である。また特筆すべき遺物として、縄文前期の曽畑式土器2点がある。

ネギノ台地における遺物の分布状態をみると、晩期の土器は、台地全体に散布しているが、特

にⅠ区付近に濃厚であり、かつ破片も大きい。他の区においては小破片が多い。弥生終末期の土器も台地全体に散布しているが、小破片が多い。Ⅱ区の北側から曽畑式土器が2点採集されている。またⅣ区南側の以西甕棺の発見された付近から、かなり大形になると思われる深鉢形土器の破片が採集されており、甕棺の破片である可能性もある。次に石器であるが、扁平打製石斧、磨製石斧は、採集された内ほとんどがⅠ区付近からであり、反対に石鏃はⅠ区付近からは全く採集されておらず、みなⅣ区以西からである。石鏃のうち駒形鏃はⅣ区以西でも南側に多く、磨製石斧はⅤ、Ⅵ区に多い。Ⅶ区からはⅦ区の最西端の道路わきから、スクレーパーが1点採集された他、遺物は少なく、道路をこえたⅦ区以西からは全く遺物は採集されてない。Ⅲ区以西は表採を行っていないため不明である。

縄文晩期の遺構は、Ⅴ区以西においては、上部のカットがはげしいため残っている可能性は少ないが、台地の東側は包含層がよく残っており、特にⅠ区周辺は土器の出土も多く発掘されたピット群などから、晩期の遺構の分布が考えられ今後の成果が期待される。

(II) 1号住居跡出土の桃の核果

遺跡より検出される桃の核果には、小型で丸味の強い円形を呈した古代桃と呼称されるものと、現在の栽培種に近似し、古代桃に比較してやや大型で卵形を呈した、野桃と呼称されるものが知られている。1号住居跡の二次使用の際の炉跡より検出した4個の核果は、小形で丸みの強い円形を呈していることより、古代桃と呼称される部類に属すると考えられる。以下計測値を表にした。

第6表

No.	長 mm	幅 mm	厚 mm	長/幅	幅/長	長/厚	備 考
1	21.0	19.5	13.0	1.078	1.50	1.612	
2	20.0	—	12.1	—	—	1.651	一部破損
3	—	—	11.8	—	—	—	一部破損
4	—	—	—	—	—	—	破 損

第7表 九州に於ける、桃の果核出土遺跡一覧

遺 跡 名	所 在 地	時 期		文 献
土 生 遺 跡	佐賀県小城郡三日月町大字久米土生2558番	弥生中期初頭～中葉	ノモモ?	佐賀県文化財調査報告書第25集 土生、久蘇遺跡、佐賀県教育庁文化課 1973 佐賀
江 津 湖 苗 代 津 遺 跡	熊本県熊本市健軍町苗代津	不 定	ノモモ	熊本県文化財調査報告書第15集、江津湖苗代津遺跡、熊本県教育委員会、1974 熊本
古 閑 原 遺 跡	熊本県菊池郡泗水町	弥 生 後 期	コダイモモ	熊本県古閑原遺跡出土の植物炭化物、松本豪 考古学ジャーナル82、1973 東京
安 国 寺 遺 跡	大分県東国東郡国東町	弥 生 後 期		九州文化総合研究所報告「大分県東国東町安国寺弥生式遺跡調査報告」鏡山 猛 他 1958 福岡

※ 尚時期は核果の出土層位の時期であり、かならずしも遺跡の時期を表わしたものではない。

第3章 考察

I 調査の成果と問題点

農道拡幅工事に伴うネギノ遺跡の事前の基礎調査の結果については前章で詳しく述べたので、ここではそれらを改めて整理を行ない、成果と問題点について若干ふれることにしたい。

1. 遺跡の広がり

ネギノ遺跡は縄文時代晩期の甕棺の出土遺跡として学界の注目を浴び、縄文晩期における葬制の新しい問題提起と共に弥生時代前段階様相を把握する上での一面の先鞭をつけたのである。問題の甕棺出土地点は南北約400m、東西700m余の舌状台地ほぼ中央の南端近くにおいてであり、台地縁辺の一面に墓域が形成されていたものとの考え方が許されよう。この事は今回調査が実施された台地のほぼ中央部において、縄文晩期の埋葬に係わる遺構、遺物が全く出土していないことや、台地全体の表面採集の結果、逆に南側の台地の縁辺において甕棺と考えられる土器片が採集されていることなどから肯首できるものと思われる。

一方、縄文時代晩期における日常の生活の場としては台地の東側の部分にその主体があったと予想され、実際今回調査を行なった700m近い細長い調査区における遺物の出土状況がそれを示しており、台地上の遺物の分布とは符合している。生活の中心となる住居跡については明確な形で把握することができなかったものの、晩期の遺物が最も良好な状況で出土した第2区においては柱穴とおぼしきピット群が認められたのである。そのプランについては調査の諸事情もあって確認できなかったが大石遺跡の例で見られるような平地住居の存在が想定されるのである。⁽²⁾

縄文時代晩期は各時期の遺物が認められるわけであるが、この遺跡発見の契機となった甕棺と同時期である晩期Ⅱそれに晩期Ⅲ式にその主体が考えられ、やはり晩期Ⅰ式の遺物は極端に少ない。いずれにしても台地の東側に主体をおいた縄文時代晩期の生活が予測されるのである。

縄文時代晩期の貴重な遺跡として周知されていた当ネギノ遺跡で新たに弥生時代終末期の竪穴住居跡5基が確認された。縄文時代晩期の生活が台地の東側に想定されるのに対して、弥生時代の集落はこの台地のネックに占地しており、背後に広い別な台地が展開している。このことは生産の場としての耕地に当然関連してくるものと思われ、縄文時代晩期との生活の違いの一端が示唆されているようである。しかしながら現時点における弥生時代の生産の場所や埋葬にかかわる墓地等については全く不明と言わざるを得ない。

今回の調査は極めて限られた範囲であったが、総合して考えると台地の東側は縄文時代晩期の生活が、その南側は晩期の墓域が想定される。さらに弥生時代終末期は西側に集落の主体が設定され晩期よりさらに広い生活空間がこの台地上に展開したものと考えられる。

遺跡の広がりについては以上のように考えられるが、遺物包含層の状態は必ずしも良好でなかった。遺物が比較的多く出土した台地東側にあたる第Ⅰ区では、第Ⅲ層の暗褐色土層上部に生活面があられたのである。弥生時代の遺物は表土層および黒色をした第Ⅱ層より晩期の遺物と混在した状態で出土しているが数も少なくすべて小破片である。一方台地の中央から西にかけての第Ⅴ・Ⅵ区ではⅢ層がほとんど認められず、したがって晩期の遺物も極めて断片的である。弥生式土器は表土層・Ⅱ層から出土しているが状態は良くなく小破片が多い。住居跡群が検出された西側の地区も良好な包含層は把握できなかった。なお第Ⅳ層以下の層からは全く遺物の出土はなかった。

2. 縄文晩期の土器

今回の発掘で得られた縄文式土器の数量は多くなく、しかも大半の土器片は小さく全体の器型を明確に判断できるものは極めて限られているが、その特徴について若干触れることにしたい。縄文式土器は数点の前期と考えられるものをのぞけば全て晩期の所産であり、それも晩期Ⅱ・Ⅲ式で大半が占められている。

晩期Ⅰ式は数が少ない。特徴的な土器として口縁部直下に扇状貝圧を彷彿させる楕円形の押圧文を施した浅鉢型・深鉢型土器が出土している。

晩期Ⅱ式には浅鉢・深鉢型土器の他に鉢および碗などの器種が見られる。深鉢型土器は口縁部に突帯を有するもので従来「田村上層式」と呼称されているものに比定される。浅鉢・深鉢型土器では口唇部にリボン状の突起を貼りつけたものが認められる。

晩期Ⅲ式もやはり浅鉢型土器と深鉢型土器が主要なセットをなしている。浅鉢型土器は全体的に胎土・焼成共に良好で器壁はよく研磨されている。深鉢型は口縁部と屈接する肩部に刻目突帯を巡らしおり、器壁に条痕の残るものが顕著である。さらに深鉢型土器の多くには煤が厚く付着したものが多く、浅鉢形とは全く対象的な用途が示唆されている。

以上のような晩期の土器の中にあって特に晩期Ⅱ式の凸帯を有する深鉢型土器は注目すべき資料と考えられる。すなわち縄文時代晩期Ⅲ式の粗製深鉢形土器は器面の条痕による整形、円盤状の貼り付けの底部と共にあるいはそれ以上のメルマークとして口縁部および「く」の字状頸部の刻み目凸帯が重要視されているのは周知の通りである。ちなみに当遺跡出土の深鉢型土器では刻み目凸帯文と凸帯文のみで刻み目を有しないものが存在するのである。凸帯文のみで刻み目のない深鉢型土器の存在は田村遺跡およびネギノ遺跡の甕型土器でⅡ式からⅢ式への過渡期の時期に位置するものとして既に注意されていたが、今回日常の生活の場と考えられる包含層より発見されたことにより過渡期の存在が一段と明確にされたと考えられる。さらにその凸帯には指でつまみ出したものと貼付けを行なったものの二者が認められることは凸帯文土器の出現が土器の形態上できわめて自然にその出現が考えられるであろう。

3. 安国寺式土器

今回の調査で新たに確認された弥生式土器は台地の中央よりやや西側の第Ⅴ・Ⅵ区、5基の竪穴式

住居跡の覆土中および床面出土のものとそれに表面採集によるものがある。このうち竪穴住居跡に関連して出土した5点をのぞくと他はいずれも小破片でしかもその数はあまり多くないのである。

器形としては壺型土器、甕型土器、高杯型土器、埴型土器、小型壺型土器が出土しているが、その大部分は壺型土器で占められており、他はきわめて少ない。

壺型土器は器形および文様などから大きく二種類に分けることができる。すなわち二重口縁を呈するものと単に外反する口縁をもつものである。前者は口縁部が「く」の字状に内傾するいわゆる二重口縁を有し、胴部に丸味をもち尖底に近い平底ないし丸底に近い形態を呈するものである。タガ状の口縁部に櫛描きによる半円の孤文を交互に連結した形の波状文を施文している。この櫛目波状文には、「流水波状文・曲水波状文・小波状文」などが見られる。頸部と卵形をした胴部に断面三角形ないし台形の突帯を有するものやさらに頸部の突帯に篋描斜格子文が施されたものが存在している。⁽⁴⁾

後者は口縁部が外反して頸部がしまり、胴部が卵形ないし球形に膨らみ尖底に近い平底あるいは丸底の底部へと移行するものである。これには胴部に広い突帯をはりつけ、格子状の刻目を施したものやタタキの入ったものが認められる。他に注目すべき文様として肩部の四分の一周にヘラ状工具で5コの刺空文を施したものが存在する。以上の二者の壺型土器は胎土・焼成共に良好である。

甕型土器は口縁部が外反し、卵型の胴部を有し、尖底に近い平底を呈するものを基本の器形とするものである。胎土は大粒の砂を含み、焼成は危弱であり、器壁には炭化物が厚く付着している。この甕型土器には頸部に断面三角形の貼付突帯を有するものもみられる。

高杯型土器は表面採集の資料が一点あるのみであるが、これは口縁が丸く曲彎するもので、脚部はラッパ状に開くものと考えられる。器壁は内外面共に研磨が丹念に施されている。

埴型土器、小型壺型土器は共に小破片のため器形については不明と言わざるを得ない。

以上、本遺跡の弥生式土器はその特徴から国東町の安国寺遺跡⁽⁵⁾や佐伯市白瀉遺跡⁽⁶⁾の住居跡上層出土の土器にその類例を求めることができ、弥生終末期に位置づけて大過ないものとする。

ただ安国寺式土器の変化はきわめて緩慢であると考えられるのでその終末は古墳時代開始の時期まで及んでいるという見方もされよう。いずれにせよ、畿内、瀬戸内との強い関連をもつきわめて東九州の安国寺式土器が、九州のほぼ中央に位置する高地の台地で5基の竪穴式住居跡と共に確認できたことは一つの成果と見なすことができ、そのあり方は弥生時代終末の東九州を考察する上で貴重な資料と考えられよう。

4. 弥生時代終末の集落

弥生時代の集落の研究はこの十数年のうちに土地開発に伴う大規模な緊急調査とあいまって目ざましい進歩が見られるのは周知の通りである。東九州の地にあって宇佐市の台ノ原遺跡⁽⁷⁾、大分市の雄城台・守岡両遺跡などの発掘調査によって、徐々にではあるがその第一歩が踏み出されているのである。そのような時期に海岸部から遠く離れた高地に所在するネギノ遺跡において検出された5基の竪穴式住居踏群の存在は注目に値するであろう。特に大分県で最近調査の実施された先に挙げた三つの

大集落がいずれも近くに平野部を控えしかも時期的に弥生時代後期後葉が欠落しており、多くの面で対照であるだけに一段と興味がもたれる。ただネギノ遺跡の場合は調査区がきわめて狭い地域に限定されているため今回の調査では住居跡のみで、しかもその住居跡群もさらに広がると予想される状況におかれているのである。また、住居跡以外の袋状竪穴や溝状遺構、それに埋葬の場としての墓地や生産の場である耕地等の集落を構成する要素については全く資料が与えられてないのである。そのようなわけで、集落を構成する一要素である生活の中心的な場としての住居跡の一部が発見されただけで全ては今後の問題として残されている。

ネギノ遺跡発見の個々の住居跡の構造や出土遺物については既に述べてあるのでそれに若干の補足を行ないたい。

まず住居跡群の位置であるが、台地西側の最も高い箇所に集中して立地しており、西側と北側とはすぐ谷に面しており、南と東への拡がりが考えられるのである。このうち、住居跡の構造上から言えば南側に入り口が予想されるので集落の拡がりも当然南側に求めるべきと思われる。

5基の住居跡群はいずれも切り合い関係がなく、しかもほぼ等間隔で存在していることは同時期に営まれていた可能性が強いであろう。住居跡出土の遺物は限られており、明確に判断できないが、5基の住居跡間に時間的な差を積極的に示唆する根拠も見当たらないのである。しからばネギノ遺跡では弥生終末期に少なくとも5戸以上でもって一つの集落を形成していた可能性が強まるであろうが残念ながらその数・形態・構成等についての究明は行なえなかった。

次に当時の人々の生活を支える生産に係わる確実な道具類については磨製石鏃と敲石類しか出土してなく、生産については不明と言わざるを得ないのである。しかしながら当遺跡の環境を考える時、周辺に拡がる平坦な台地は畑作地帯としての条件を十分に備えており、それを当然考えなければならぬであろう。時期的には若干降るが、指呼の間にあるセツ森古墳群は県下における古式古墳でありこの古墳群築造の背景は正にこの台地の生産力の豊かさを抜きにしては考えられないのである。

東九州の弥生時代中期の代表的遺跡である下城遺跡⁽⁸⁾においては鉄製の鎌が存在することからすれば弥生時代終末のネギノ遺跡でも耕作具・収穫具に鉄器の導入が行なわれていたものと思われ、同時に鉄製工具による効率的な木器類の存在も可能であり、東九州の弥生終末期における鉄器普及の一端を示唆しているものと考えられる。

- (註) (1) 賀川光夫「九州における縄文晩期の甕棺」石器時代第5号 昭和33年
(2) 賀川光夫・他「大野郡緒方町大石遺跡の調査」大分県地方史第34号 昭和39年
(3) 賀川光夫・羽田野一郎「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」朝地町教育委員会 昭和35年
(4) 森貞次郎「東九州地方」弥生式土器集成本編1 昭和39年
(5) 鏡山猛他「大分県国東町安国寺弥生式遺跡調査報告」九州文化総合研究所報告 昭和33年
(6) 賀川光夫・小田富士雄「白濁遺跡」佐伯市教育委員会 昭和33年
(7) 大分県教育委員会「台ノ原遺跡」大分県文化財調査報告第33輯 昭和50年
(8) 賀川光夫「豊後下城弥生式遺跡における鉄器文化」大分県地方史第1巻第2号 昭和29年

第4章 附 説

I ネギノ遺跡の住居跡について

縄文晩期の集落及びカメ棺遺構を想定したネギノ遺跡は、一部縄文晩期遺構を認めながらも、主体は、調査区西側第Ⅵ、Ⅶ調査区の道路予定地で、弥生時代終末期の集落の検出に注意が集中した。幸い竪穴式住居には最少一個体分のほぼ完形になる土器が床面に残されており、竪穴の年代を決定する資料となった。丸底に近い尖底に二重口縁をつけ櫛歯波状文をもった土器と、敲き条痕を残す壺形土器が相伴することから、弥生時代終末期を当てることになる。

竪穴式住居跡は合計五つを数え、比較的大形で、をいずれも方形の類似形態であった。住居跡はまたま道路予定地に沿って一列に配置されており、集落全体を展望することは不可能であった。しかし、竪穴の構造、出土遺物などの類似から、これが同時の住居跡であると判断することが許されるものであった。竪穴内部は、10～80cmの深さの壁面をもって床面となり、四隅に柱穴（2号のみは外部に柱穴をもつ）があって、中央に炉跡をもつという形式であった。

集落の広がりには、この5つの竪穴式住居の四周に及ぶものと考えられ、しかも東側に接して溝状の遺構らしいものの検出から、所謂溝状遺構をもつ集落跡と考えることも可能であった。この溝がはたしてどのような性格のものであるか、にわかに決定できないが、もし環溝状の広がりをもつものであったり、集落を明確にする仕切りの溝であったりするとすれば、当然大家族の共同生活を考慮せねばならず、その構成員は、奈良時代の文献にみる郷戸の具象化したものと推理できる。こうした問題はすでに鏡山猛氏によって細論（奈良期の集落遺跡について一史淵第66輯一）されているところであるがネギノ遺跡の竪穴住居跡群は、奈良時代の住居跡同様、竪穴の大きさがそれぞれ著しい大小の懸隔を示さなかった。この点は鏡山氏が述べているとおり、大きな主家を中心とした小さな房戸の集合といった形態は認められていない。この状態をネギノ遺跡全体に普遍して考えるならば、郷戸内各戸の人員の均等性が立証できるであろう。

さて、ネギノ遺跡の方形の5つの竪穴住居跡が、東西に一列に配置され、その広がりを推理することによって、奈良時代文献の郷戸制度をあてることには、ある程度の抵抗があるとしても、郷戸の集団を房戸の構成とみると、弥生時代の集落構造は郷戸的なものでないとするには当たらぬであろう。もし、ネギノ遺跡の竪穴住居跡の集団が、郷戸の始源の姿であるとすれば、奈良以前の環溝集落を検討せねばならぬ。一方弥生後期の集落の完掘作業がない限り問題を一步進めることはできぬ。ネギノ遺跡の弥生後期終末の住居群は、その竪穴構造が良好な状態で保存されているところから、周辺に広がる遺構群を追求することができれば、当時の村落形態を完全に把握することができるのではなかろうか。いずれにしても、こうした重要な問題をかかえた集落跡が、一部とはいえ道路で消滅し、その広がりから村落形態の検討をみぬまま、いずれ煙滅の運命になるのは惜しまれてならぬ。

II 縄文晩期甕棺葬の問題

阿蘇東麓の外輪山熔岩台地は、東方に延び左右（東西）に刻入される深い溪谷によって、それぞれ独立した長形の舌状台地を形成する。菅生台地や荻台地は、そうした台地の典型的なもので、表面がわずかに傾斜しているが、全体として平坦な台状をなす。

ネギノ遺跡は、こうした菅生台地に存在し縄文晩期の甕棺遺跡として著名な遺跡であった。もともと弥生文化の一特徴としての甕棺葬の源流が、縄文後晩期に存在するとする考えから、縄文葬制の内容分析がおこなわれていた。そうしたなかでネギノ遺跡の合口甕棺は、縄文晩期葬制の中で、甕を被覆する現実的な問題提起として注目された。その後、この学史的事例を証明する資料が相次いで発見され、今日では、九州全域で、100例を越す甕棺の出土例が縄文期において存在するようになった。おそらく、縄文晩期の葬例のうち、土壇や、石槨墓、石棺、支石墓など多種類の遺構が明らかにされているが、そのうちもっとも類例多数の土壇でさえ、確実な例証として甕棺の出土数をの甕棺が、縄越えるものはあるまい。そのように縄文晩期葬例の特徴を考えると、甕棺の例数は多い。そして縄文後期に起因することもおよそ明かとなり、弥生文化の定形的葬制の1つとして注目された甕棺葬の源流が、縄文文化後晩期に求めるべきであることを指示する例証を増しつつある。

さて、縄文文化の甕棺葬が、縄文文化の体質の中にあって、それが東北日本の円筒土器や、中部日本の中期遺構に存在するものを含めて西日本のカメ棺葬に言及することもあるが、もとより弥生文化の葬制展開とは提起理由を異にするものである。また西日本においても、縄文後晩期埋葬における甕棺葬が、土壇を基本とする葬例の中で、あまりにも理論的根拠が薄い、とする考えもある。しかし現実の葬例をみると、従来貝塚や、洞穴などにみられる土壇埋葬は、後期前半ではほぼ消失し、後期末、晩期の埋葬例は極く例数が少なくなった。そうした中で、近時、甕を棺とする風習が、100例を越えるという実態から、これが後期末、晩期の葬制の1特徴とすることに問題をささむことは先ずできないのではなかろうか。

縄文後晩期葬制の論点は、本項の主体ではないので稿を改めたいと考えるが、こうした縄文文化終末の葬制展開に重要な問題を提起したのが、ネギノ遺跡である。そしてついであるが、弥生文化の葬制展開の1問題をその土器の形成から、簡単に観察してみよう。

そもそも、甕棺葬がその社会的背景をもとにして異常な発展をみるのは、甕形土器の口縁部がT字または逆L字型をなす須玖式文化期にあるとされている。土器形成のうえで、須玖式文化の口縁部扁平の形成過程が、甕型土器の容積の大型化につながり、土器形成技術の発展を意味していた。しかも土器形式のきわめて単一化という点で製作技術の統制がみとめられる。この大型化と、技術的統一化とが、これを製作する専門的職人の登場が必要となる。すなわち、須玖式土器の口縁部扁平化の形成過程は、甕棺にする葬制の固着化という点に関係があり、甕棺葬の盛衰と関係して、須玖式土器の変化を考えねばならぬ。そういう意味では須玖式土器の形式は、甕棺葬の風習と全く関係して発達したものであって、その均一性は、甕棺葬制の普及の範囲において専門の技術者によって形成された可能

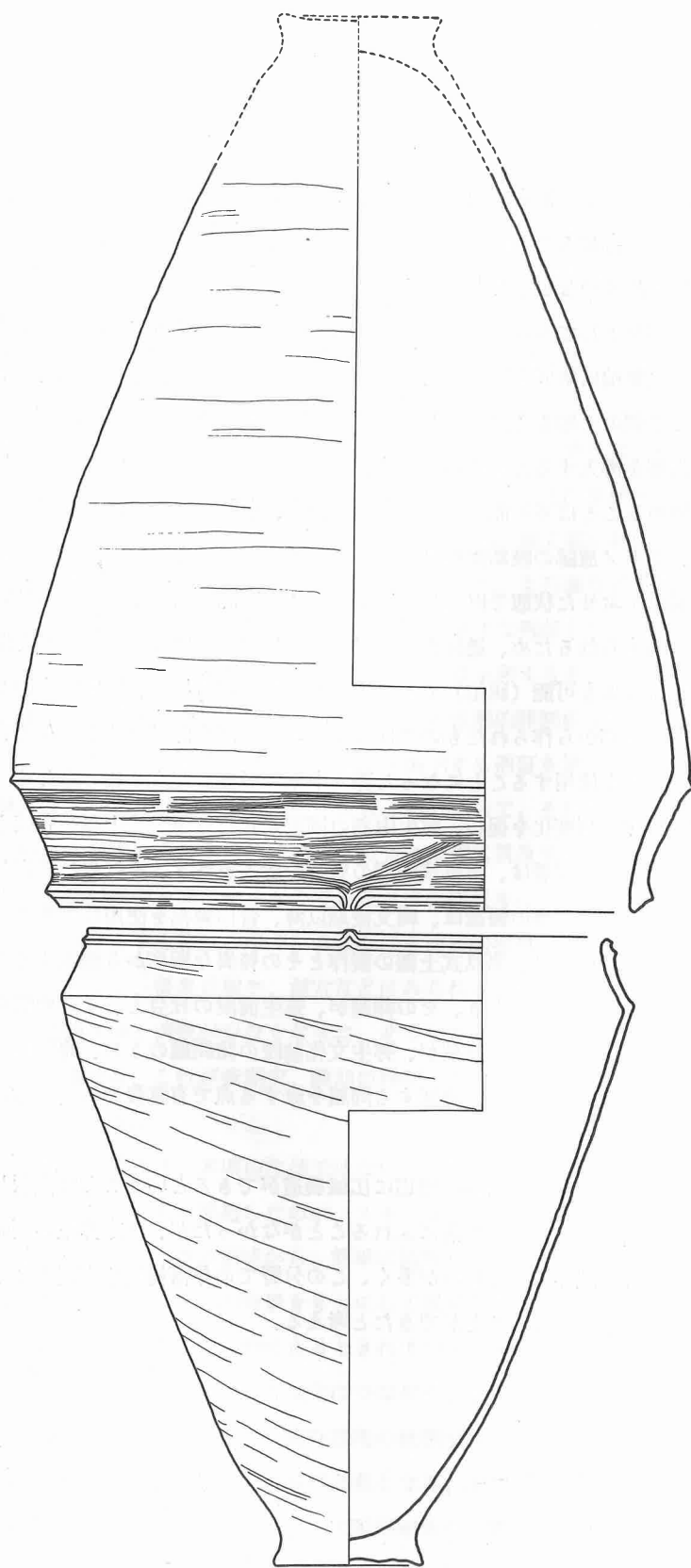
性が強い。

合口甕棺は、弥生文化葬制のうち最も顕著な遺風であった。そして遺体の合理的埋葬のために扁平な口縁部で2個の甕棺を継ぎ合わせることになる。問題は甕棺葬の本質は、この合口にあるのでこの起源の追求が、甕棺葬制の起源につながることになる。

縄文後期に合口甕棺が葬制としてみられるのは、長崎県南高来郡国見町筏遺跡の磨消縄文Ⅲ式Aの土器であった。この場合の甕棺は精成土器を使用しているため、専門の甕棺作りの職人をあてることにはならぬ。したがって2個の土器を合口に継ぐためには小型土器を大型の甕に挿入するか口縁部を打ち割り、いずれかの土器を挿入することによって2個を合せて容積を大きくする。こうした場合でも大人の遺体を棺内に納めることは不可能であると考えから、当初小児埋葬に甕が使用されたことになる。その大型化が、ネギノ遺跡の晩期甕棺である。ネギノ遺跡では1つの合口甕棺が発見され、小形甕に大型の甕型土器をかぶせた状態で出土している。下甕の底部は割って放置されているので、遺体の水分をぬくためと考えられるため、遺体をそのまま安置したことになる。その場合遺体の姿勢によっては大人を安置することも可能（屈位）である。こうした合口甕棺は、弥生文化のそれと違って、遺体を収納する目的で最初から作られたものではなく日常の容器をあてたことになる。専門の甕棺作りは、葬制として甕を専ら使用することになった弥生中期に登場してくることになる。甕棺葬制の固着化は、古代窯業の専門の制度化を促し、弥生中期の固定形式たる須玖式土器を完成させた。

弥生文化の葬制のなかで甕棺の固着は、須玖式土器の専門的職人を作り、それぞれ固定した土器形式を創造することになった。大型の甕の製造は、縄文後期以降、合口甕棺を使用した葬制の技術的実用化によって出来たものであることは、須玖式土器の製作とその特異な器形から想定することができる。このように合口甕棺の発達を考えると、その葬制が、弥生前段の社会と、その習慣の中に芽生えたことがよく理解できる。ネギノ遺跡の甕棺が、弥生文化前段の諸問題のうち、葬制について重要である点は、やがて須玖土器の専門の窯業に発展する問題を蔵する点で有意義であると考えからである。

ネギノ遺跡の調査は、そうした重要な遺跡の周辺に広域農道ができるということで実現したものであった。頭初予測された縄文晩期の墓地や集落にふれることがなかったが、一方弥生後期末の竪穴住居跡群の検出に成功した。この点みるべきものが多く、この分野での集落構造を究明するうえで、大きな問題提起となり、また成果をあげることができたと思う。

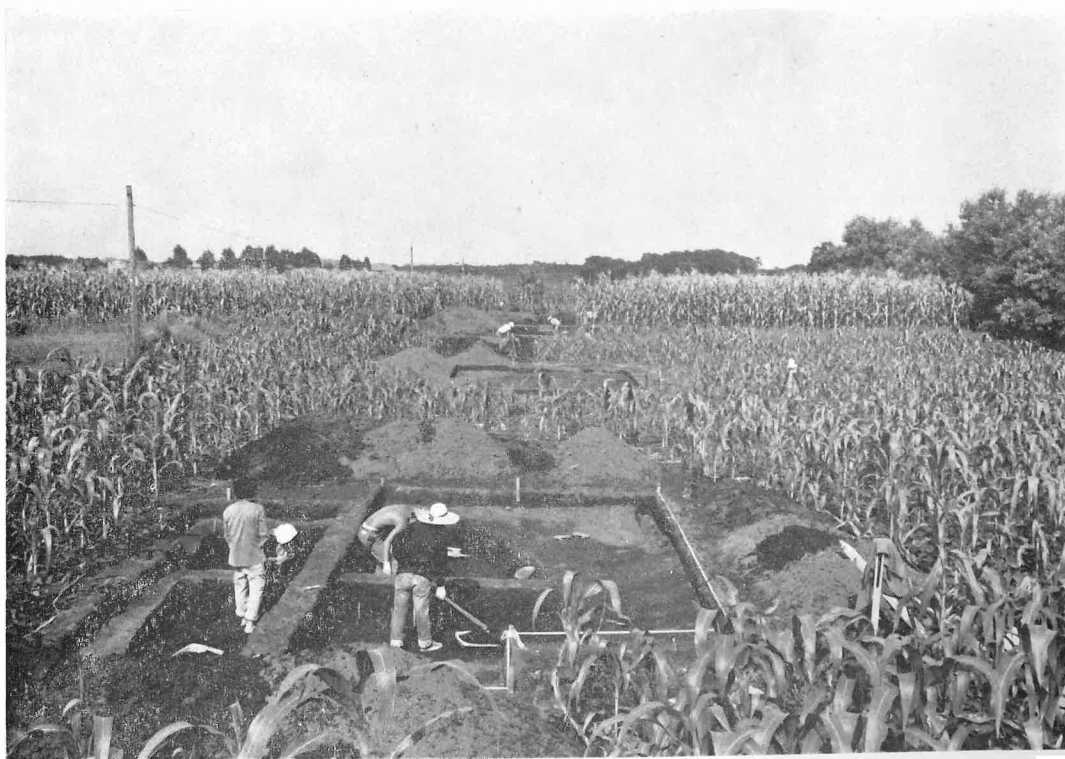


第42図 昭和29年出土合口甕棺実測図

図版1 遺 跡



航空写真（北上空より）



第Ⅵ・Ⅶ区 住居跡発掘風景

図版2 層 位



第I区 C-26グリッド東壁



第I区 C-31グリッド東壁

図版3 竪穴住居跡(1)



1号住居跡全景



1号住居跡内土器出土状態

图版 4 竖穴住居跡 (2)

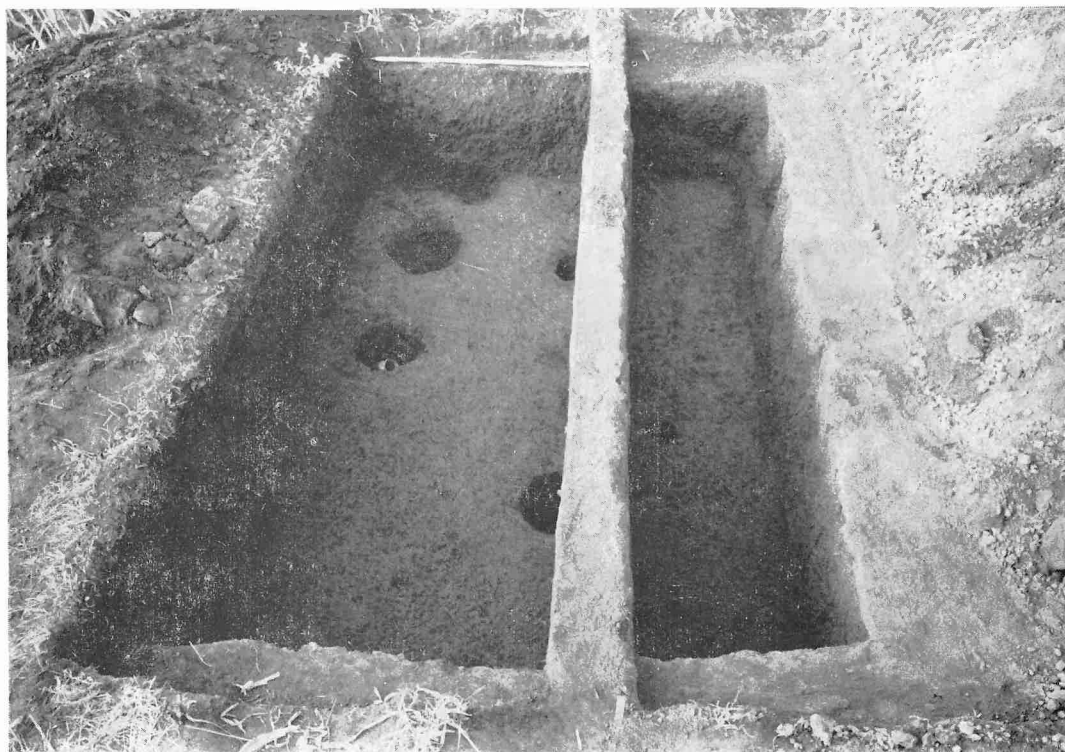


2号住居跡全景



2号住居跡内土器出土状態

图版5 竖穴住居跡 (3)



3号住居跡全景

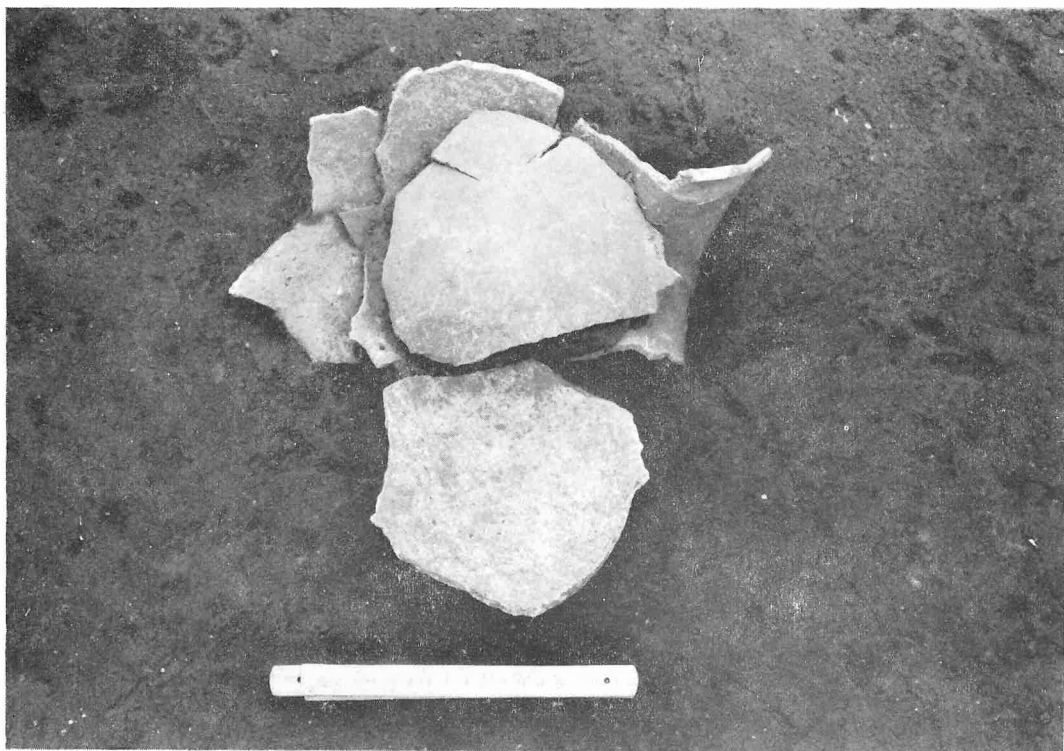


3号住居跡内土器出土状態

图版 6 竖穴住居跡 (4)



4号住居跡全景



4号住居跡内土器出土状態

图版 7 竖穴住居跡 (5)

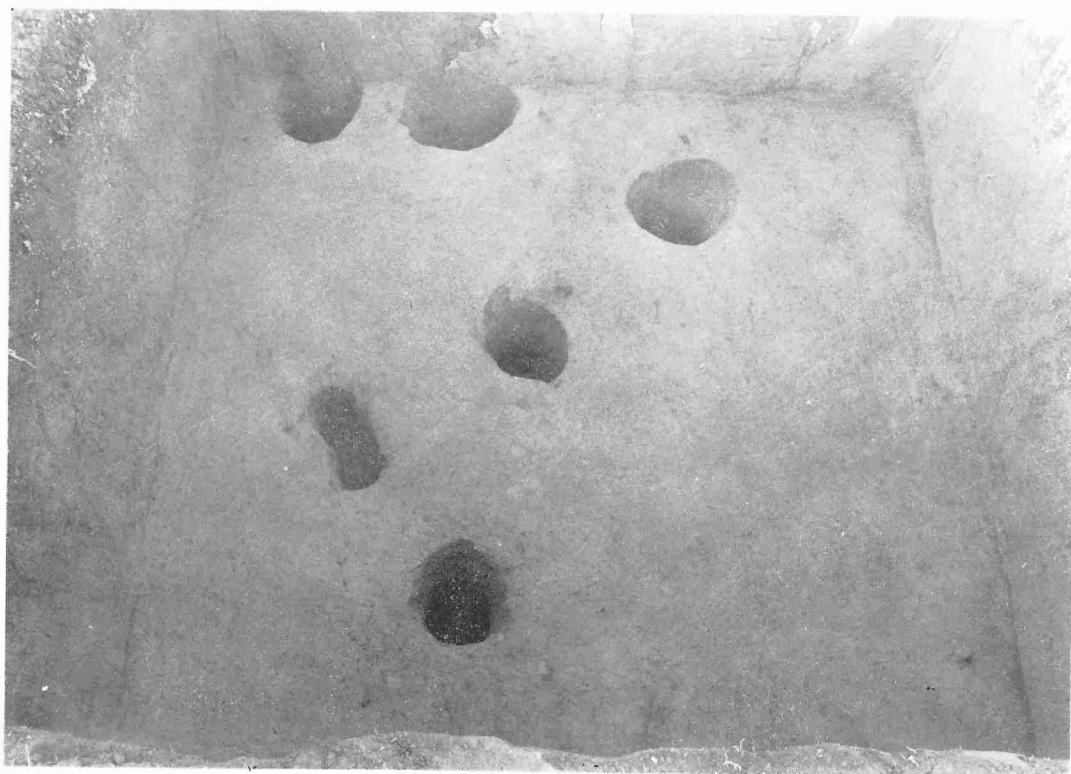


5号住居跡全景



5号住居跡内竖穴(貯藏穴?)

図版 8 ピ ッ ト 群



第I区 C-31 グリッド ピット群



第I区 C-40 グリッド ピット群

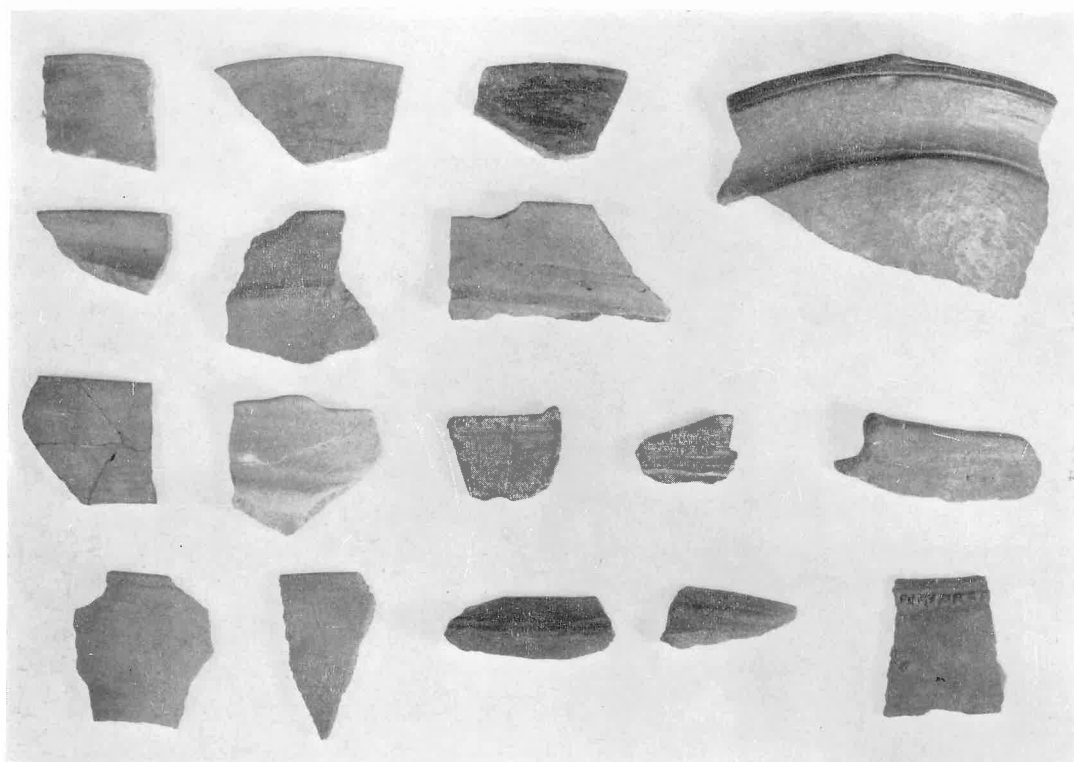
図版9 溝状遺構



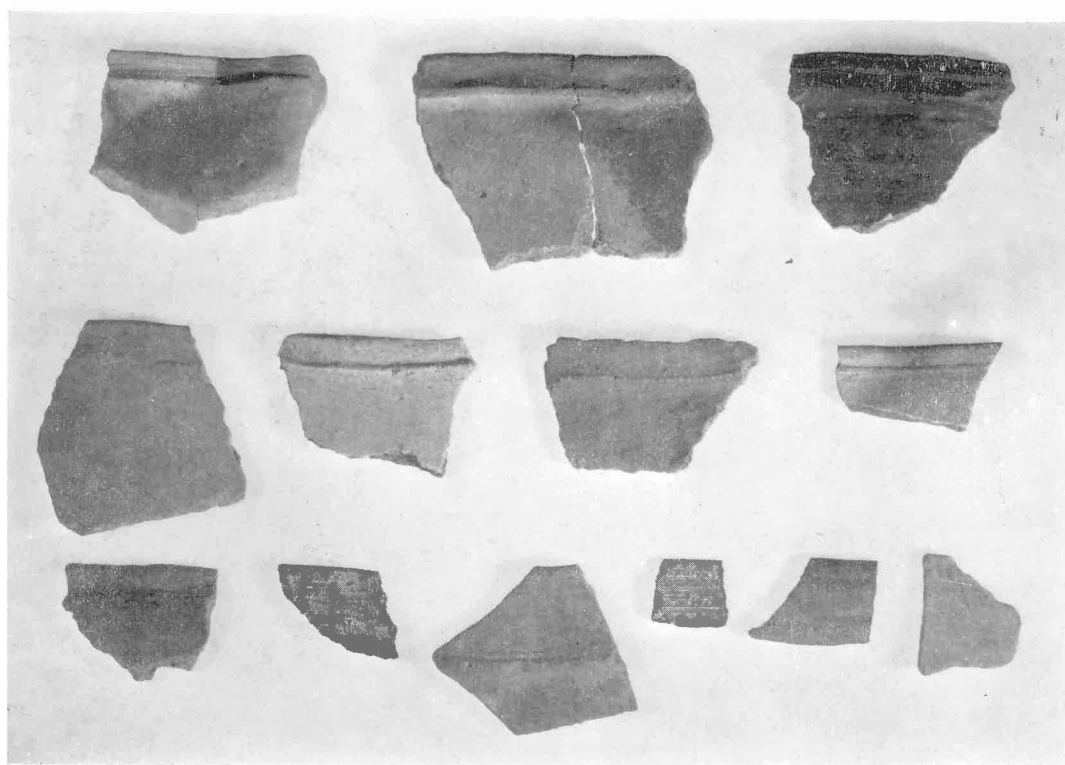
第Ⅱ区 EFG-I-2 グリッド 溝状遺構



第Ⅱ区 EFG-20 グリッド 溝状遺構

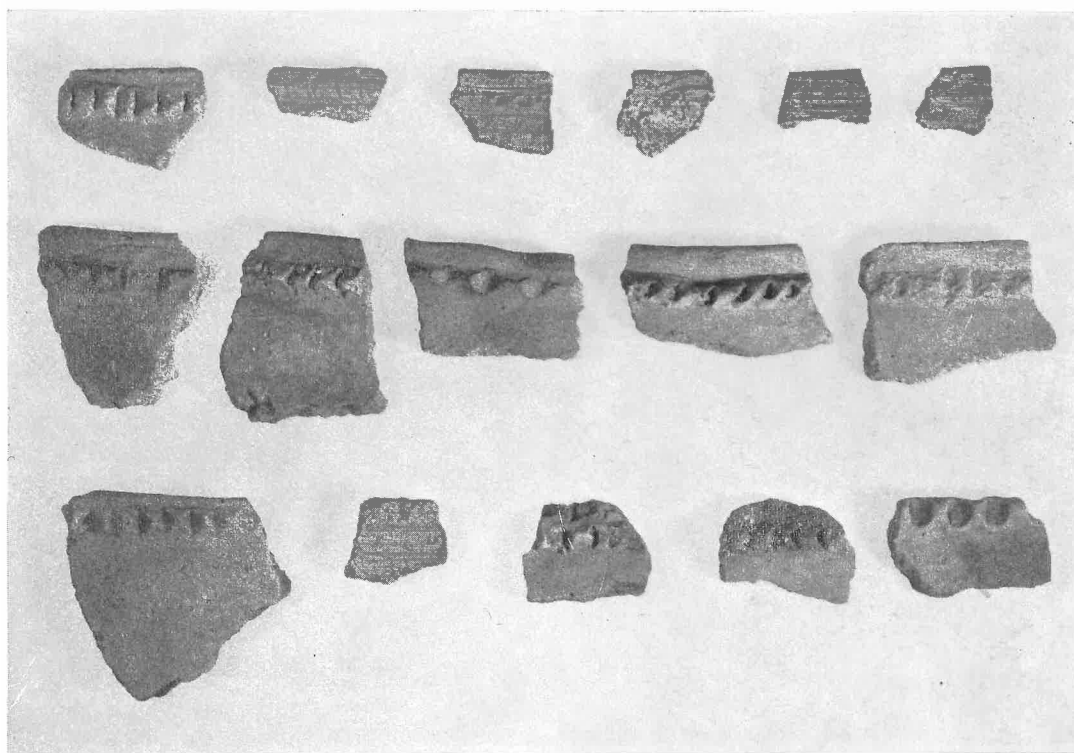


第I区出土土器 その1

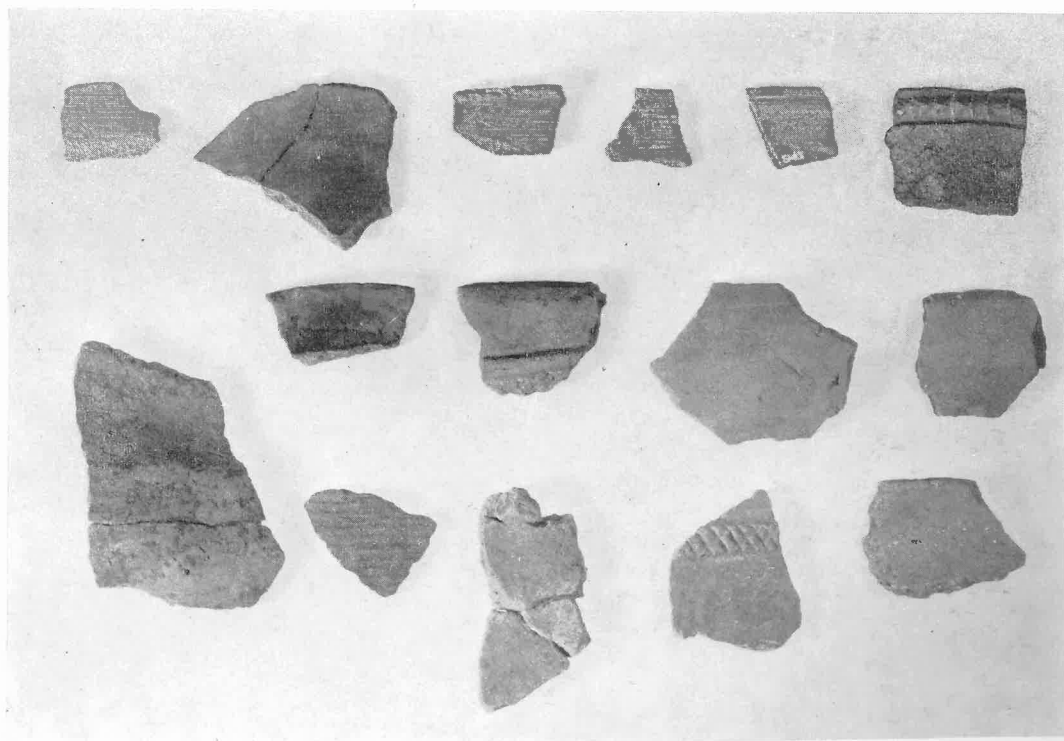


第I区出土土器 その2

図版11 遺物 (2)

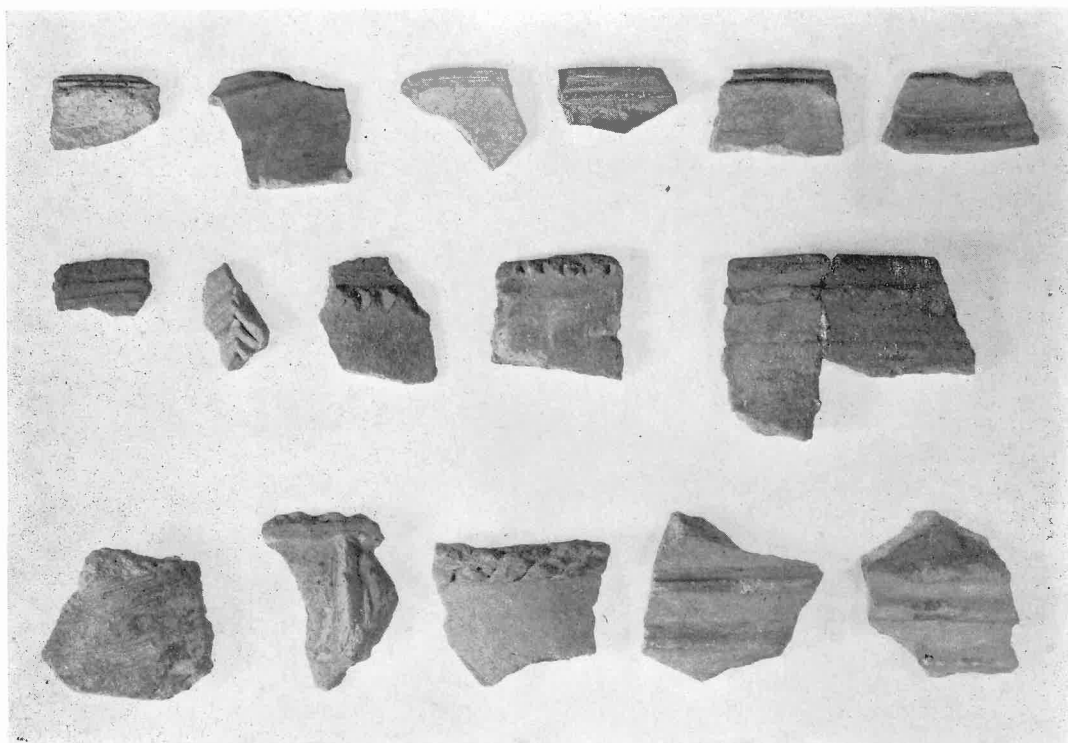


第Ⅰ区出土土器 その3

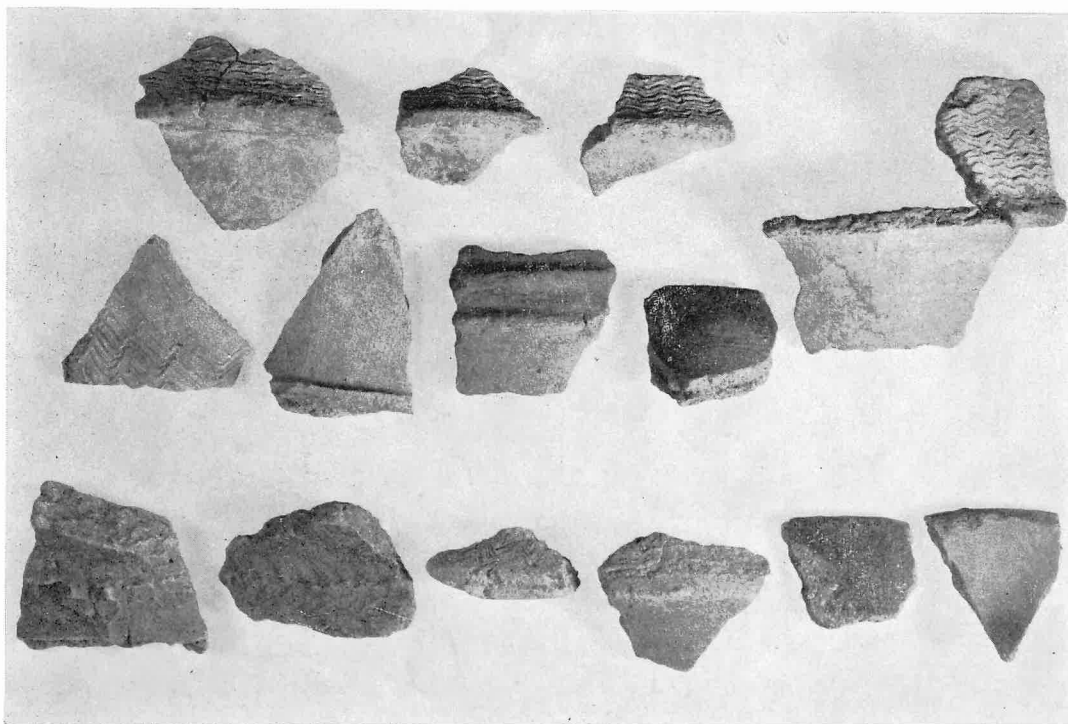


第Ⅴ・Ⅵ区出土土器

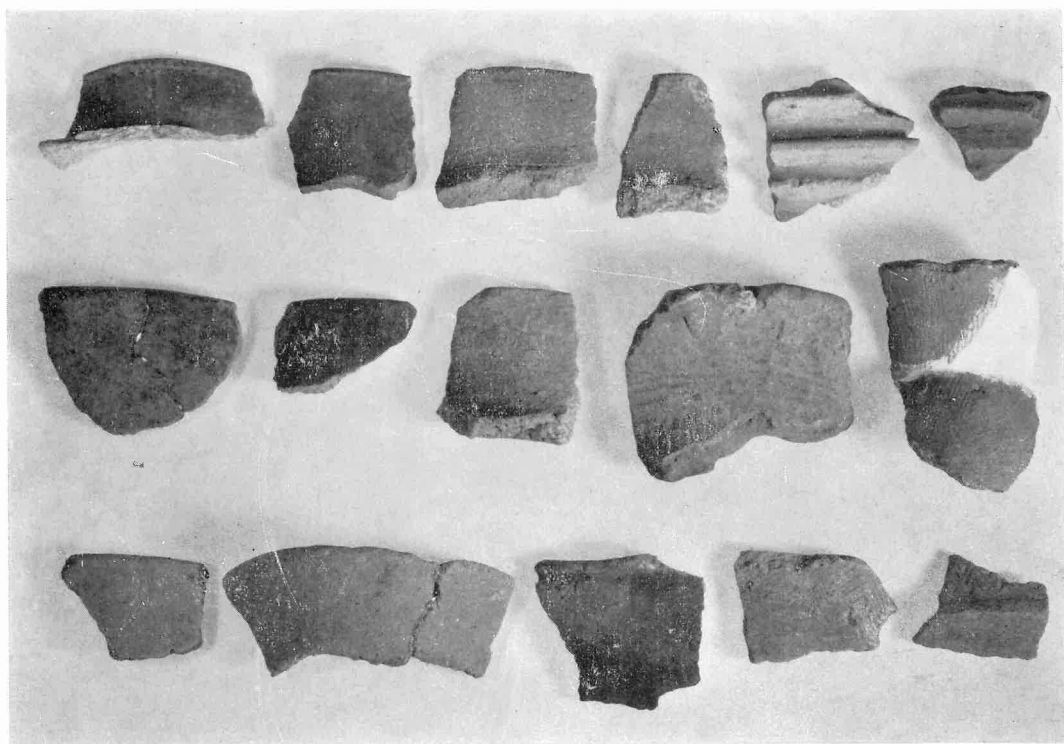
図版12 遺 物 (3)



表面採集の土器



1号住居跡内出土土器



3号住居跡(上二段)、4号住居跡(下一段)内出土土器



1号住居跡内出土 桃 核果



1



2

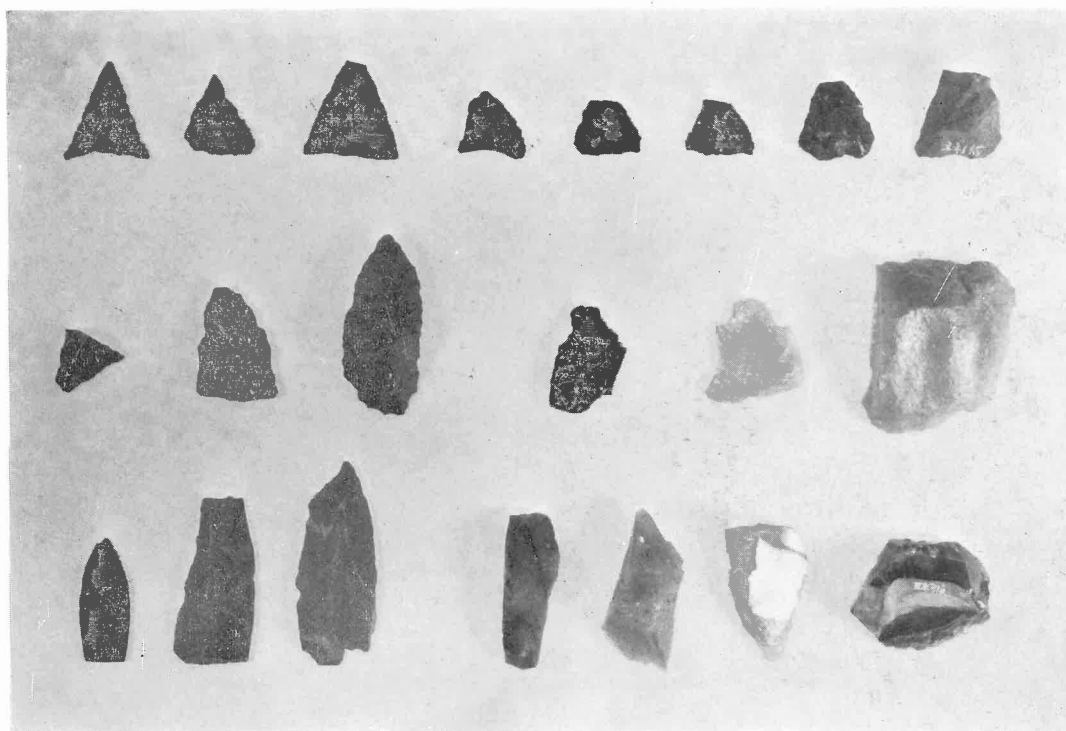


3

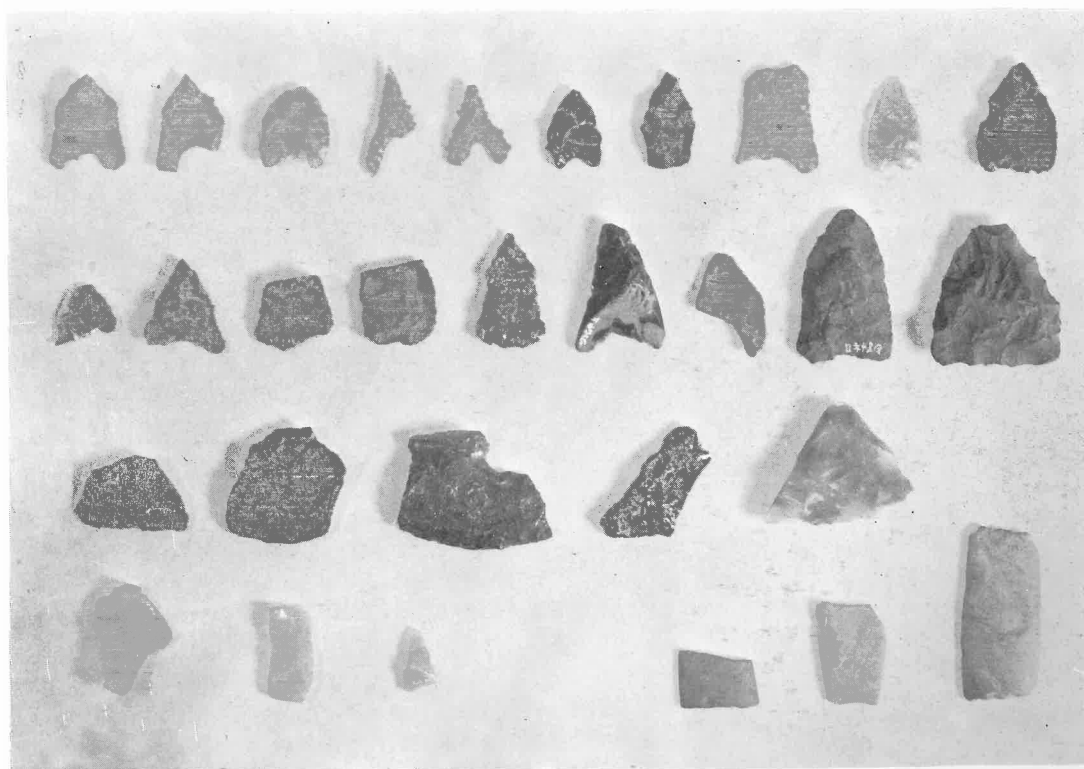


4

各住居跡内出土土器 (1号住居跡(1)、3号住居跡 (3)・(4)、4号住居跡(2))

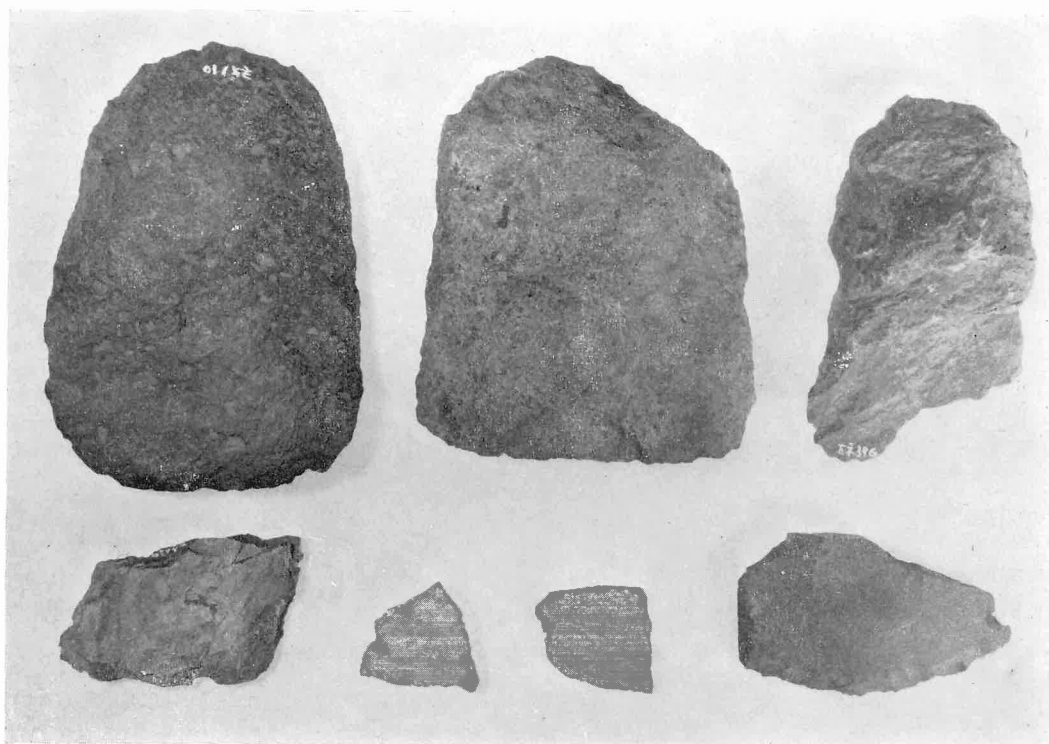


各区出土剥片石器

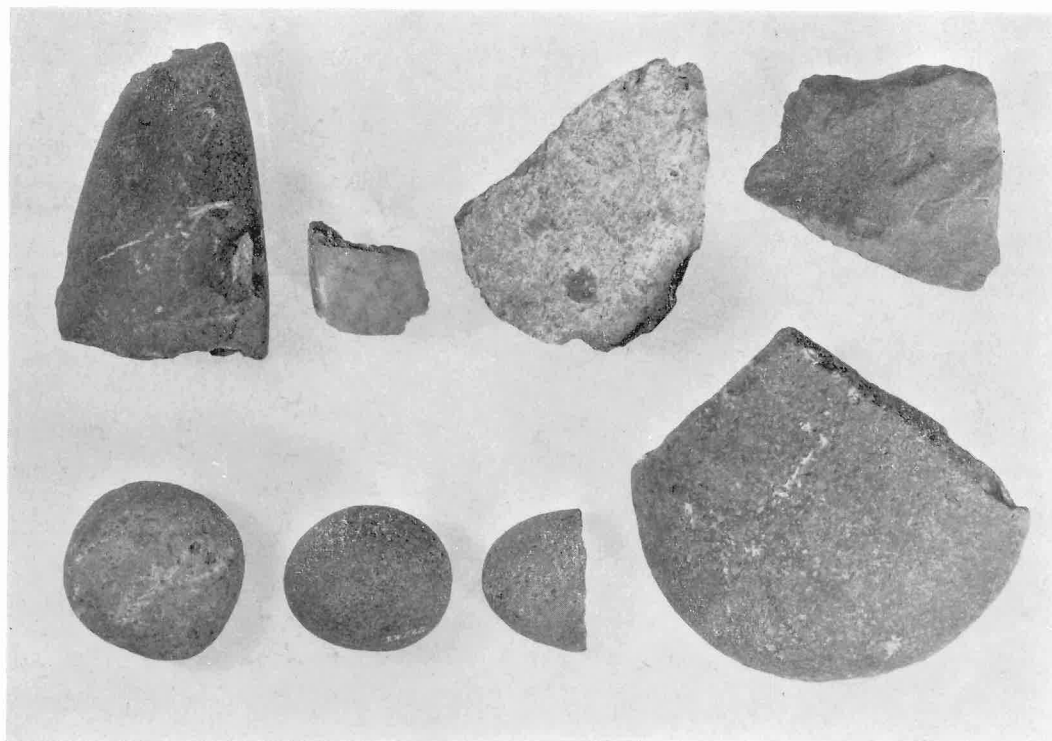


表面採集剥片石器

図版16 遺物 (7)



表面採集石器 その1

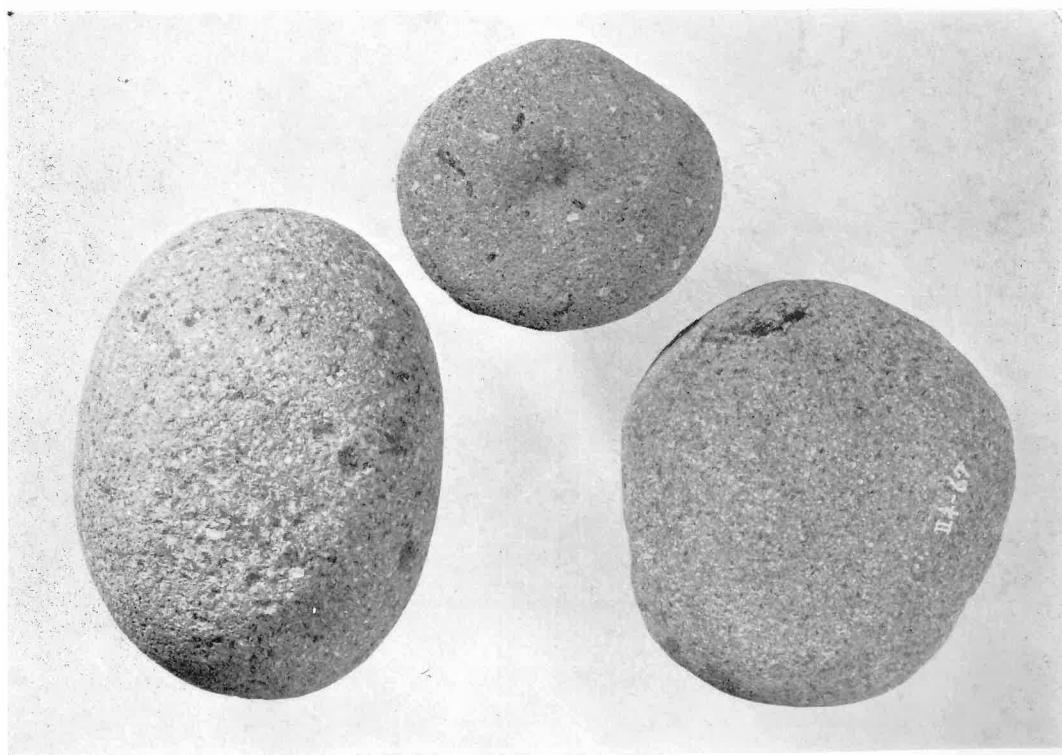


表面採集石器 その2

图版17 遺 物 (8)



各区出土扁平打製石器



各区出土礫石器

ネギノ遺跡

大分県文化財調査報告 第35輯

昭和51年5月31日

発行 大分県教育委員会

(事務局 大分市府内町3丁目10-1)
大分県教育庁文化課内)

印刷 東洋印刷有限会社 別府市千代町
